全道中

No.93

2024.3

北海道中学校長会

No. 93

全道中

2024－3

運　営　方　針

1　本会の目的である「中学校長の職能の向上と、北海道の中学校教育の振興」を図り、校長相互の協力や信頼関係を一層深めるとともに、会の総力を結集して活動の充実と諸問題の解決に努める。

2　道教委をはじめ、全日中、四種校長会及び教頭会等の教育関係諸機関や、ＰＴＡをはじめとした諸団体との連携を深め、国及び道・市町村教委の動向を踏まえて適切な対応に努める。

3　校長としての学校経営力の向上を図り、道民の負託に応える中学校教育の創造に努める。

北海道
中学校長会

第96回 北海道中学校長会 総会・研修会（4/28）

理事研修会（4/29）

第74回 全日本中学校長会 総会・研修会（5/25～5/26）

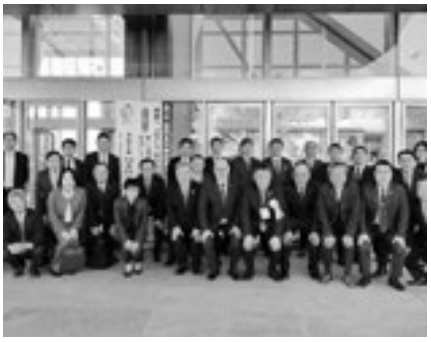
小中合同事務局研修会・学習会（7/18）

道教委と校長会、教頭会との意見交換会・各課懇談会（8/7）

地区別教育経営研究会

第64回 北海道中学校長会研究大会 小樽大会（9/22～9/23）

第74回 全日本中学校長会研究協議会 大分大会（10/26～10/27）



全道中 九三号 令和六年三月一日 もくじ

巻頭言

◎新たな時代へ「心を一つ」「思いを一つ」にし、「しなやか」に歩む　道中
……北海道中学校長会会長　森田聖吾…8

潮流

◎中学校教育の一層の充実を願って　……北海道教育委員会教育長　倉本博史…10
◎変革期の校長として大切にしていただきたいこと　……北海道立教育研究所所長　中澤美明…12

論考

◎心豊かで主体的に生きる力を育む学校経営
校種間・地域連携を進める学校経営　……古平町・古平中　秋元大…14
「よし！　やってみよう！」を合い言葉に　……枝幸町・枝幸中　林智宏…15
生徒に自立と共生の土台を育む学校経営　……本別町・勇足中　齊藤芳秀…16
人と人とを結ぶ持続可能な地域活動　……札幌市・南が丘中　中川桃子…17
◎心豊かで主体的に生きる力を育む生徒指導
心理的な安全が保障される安心・安全な学校を目指して　……初山別村・初山別中　嶋本佳世子…18
社会的な自立を実現する生徒指導　……福島町・福島中　助川剛…19
自走する生徒指導体制で主体的に生きる子供を育む　……平取町・平取中　多田謙一…20
「鶴居学校」としての連携・協働体制による
発達支持的・課題予防的生徒指導の推進　……鶴居村・鶴居中　淵本浩之…21
◎心豊かで主体的に生きる力を育む体験学習
課題解決のための体験活動　……千歳市・向陽台中　久保田豊…22
学校間連携による体験活動の充実　……美瑛町・美馬牛中　大柄洋樹…23
特色ある地域連携と自らを知る語る場の設定　……苫小牧市・ウトナイ中　石田憲一…24
心豊かで主体的に生きる力を育む「はぼまい学」　……根室市・歯舞学園　南靖志…25
地域の特産を知り、ふるさとの深みにふれる体験活動　……北見市・常呂中　佐藤拓也…26

特集

テーマ

◎学校教育の今日的な課題から　～更なる学校力の向上を目指して～

全市で取り組む「社会的・職業的自立に向けたキャリア教育」と進路指導の充実
～「帯広っ子」の主体的な自己実現を目指して～ …… 帯広市・緑園中 **大泉昭人** …28

豊かな心を育む学校の環境づくり～生徒の内面の把握と内発的動機付けを高める
教育活動の推進から～ …… 千歳市・勇舞中 **上田充士** …31

健やかな体の育成の推進
～栄養教諭と連携した食の推進の充実を通して～ …… せたな町・北檜山中 **酒井豊志** …34

今年の道中

◎第六四回北海道中学校長会研究大会小樽大会を終えて …… 研修部長 **遠山博雅** …37

◎第七四回全日本中学校長会研究協議会大分大会提言概要

多様化した学校教育課題に対応できる教員の育成
～教員が自ら学び成長する学校づくりを通して～ …… 函館市・銭亀沢中 **橋本智也** …39

多様化した学校教育課題に対応できる教員の育成
～協働と意識改革を軸に
学校力を向上させる学校経営の在り方～ …… 八雲町・野田生中 **増田正弘** …43

◎各部門の活動

令和五年度の活動及び次年度への展望 …… 事務局長 **三浦英悟** …47

各部の活動（経営部・研修部・対策部・情報部） …… **50**

各地区の活動 …… **54**

北海道風土記

美しきそらのまち　しんしのつ …… 新篠津村・新篠津中 **寺嶋裕介** …75

小樽歴史探訪 …… 小樽市・西陵中 **吉岡智尋** …76

へそのまち、スキーのまち、ワインのまち「富良野」 …… 富良野市・富良野東中 **田中正徳** …77

私の散歩道～歩いて楽しい町　旭川（時々ラーメン） …… 旭川市・緑が丘中 **貞弘真悟** …78

南茅部地域の歴史と伝統 …… 函館市・南茅部中 **山口哲也** …79

開庁一四〇年・市制施行八〇周年を迎えた岩見沢市の魅力 …… 岩見沢市・上幌向中 **髙田恭介** …80

幌尻岳の秀嶺を仰ぎ戸蔦川の清流を聞く
肥沃な土壌の帯広市清川町 …… 帯広市・清川中 **小野稔之** …81

釧路市～発展と共生 …… 釧路市・共栄中 **田中君枝** …82

文芸

早朝サイクリングからマイカー通勤へ……恵庭市・恵北中　加藤　暢……83
心温かな　北限のブナの里……黒松内町・黒松内中　柴山理香……83
川柳と新聞で思考力・表現力を育む……小樽市・潮見台中　髙橋恒雄……84
笑顔の魅力……士別市・上士別中　及川裕二……84
ＡＩ時代を生きる……旭川市・神居東中　神林宏行……85
我々はまだ考える葦なのか……猿払村・拓心中　藤田淳……85
ふるさとへの誇りと愛着を！……羽幌町・焼尻中　加納克則……86
タイパになじまないもの……江差町・江差北中　米谷優……86
教育の本質に迫っていくには……北斗市・浜分中　大友貴代……87
恩師のもとで……函館市・深堀中　佐藤強……87
旧交を温める……赤平市・赤平中　髙岸春二……88
四〇年ぶりの再会……室蘭市・室蘭西中　赤松政彦……88
つながり……日高町・門別中　高杉省一……89
生涯心の師……幕別町・札内東中　横山一仁……89
スポーツ界の名将に学ぶ……帯広市・川西中　村上達也……90
アウトドア考……釧路町・富原中　水野秀哲……90
私の背中を押してくれる「マグカップ」……釧路市・春採中　新井真人……91
八〇二〇運動……中標津町・広陵中　谷村靖志……91
バスケ男子ワールドカップとウェルビーイング……遠軽町・南中　小栗敬一郎……92
吹奏楽の思い出……札幌市・八軒中　大矢俊明……92

資料

◎令和五年度　一般会計予算……93
◎令和五年度北海道中学校長会役員・理事……94
表紙に寄せて「小樽市銀鱗荘」……小樽市・桜町中　代永研……95
編集後記……96

北海道中学校長会の歌
題字　「全道中」　元北海道中学校長会会長　**本間均**

巻頭言

新たな時代へ　「心を一つ」「思いを一つ」にし、「しなやか」に歩む　道中

北海道中学校長会　会長　**森　田　聖　吾**

今年度も、あとわずかで終わろうとしています。この一年間、北海道中学校長会（以下道中）は、「オール北海道」の気概を強くもち、七五年の歴史と脈々と受け継がれてきた伝統を引き継ぎながら、会の総力を結集し、令和の日本型学校教育の構築に向けた様々な歩みを進めるという決意を込め、「新たな時代へ『連携』し、『しなやか』に歩む道中」というスローガンを掲げ、全道五六一人の会員の皆様から、温かい御理解と御協力を賜り活動してまいりました。

校長の皆様におかれましては、新しい時代にふさわしい質の高い教育の実現、学校における働き方改革、複雑化・困難化する教育課題への対応に、自らの言葉で自身のビジョンを発信し、教育改革の当事者としてリーダーシップを発揮する一年であったことと推察いたします。また、皆様の中には、時に〝展望が見えず、眠れない夜〟が続くなど、困難事案等の対応に御苦労された方もおられたことと思います。しかし、明けない夜はありません。私たち校長が、志を高く掲げ、理想の教育を志向し、「しなやか」に歩み続ければ、きっとその願いとやり抜く気概が周囲にも伝わり、学校が活性化していくはずです。このような時代だからこそ、全道の校長が、互いに学校づくりについての夢を語り、その具現化への方途を話し合う土壌をつくっていく、学校経営の支えとなれる校長会であり続けたいと意を強くした一年でもあります。

そういった意味では、新型コロナウイルス感染症の位置付けが五類へと移行され、校長の学びを止めない、喫緊の諸課題と向き合うために、本会の各種研修会を極力参集形式で開催できましたことは、本当にありがたいことであると思っております。会員同士が地区を越えて交流することで、確かなつながりと広く深い学びが実現し、学校経営に対する視座を高めることができたと実感しております。加えて、道中研究大会小樽大会では、四年ぶりに北海道教育委員会の教育指導監や義務教育指導監の皆様、人材育成部長様から、直接、校長の職能向上に関わる多くの御示唆をいただけましたことは、とても尊いことであります。こうして得た学びは、市町村や地区校長会の発展にもつながるものであり、本会の極めて重要な目的を果たすことができたものと思っております。会員の皆様、教育関係諸機関の皆様に厚く御礼を申し上げます。

さて、今年の道中の重点的な取組を振り返りますと、次の二つに収れんすることになります。

まずはじめは、「子供を主語とする学校づくり」についてです。我々校長は、「子供たち一人一人の可能性を引き出す教育の推進」、「学びの機会を保障し、質を高める環境の確立」、「地域と歩む持続可能な教育の実現」の三つの施策を柱とした新たな北海道教育推進計画の下、本道教育の充実に取り組むことが求められております。そのため学校は、「子供を育てる

場」に加え、「子供が育つ場」としての機能を高めていく必要があり、私たち校長は、未来社会の担い手である生徒を育てるために、強い覚悟をもって新しい教育に対応する学校へと導いていかなければなりません。

道中は、その根幹となる教育活動の方向性として、これまで情報提供者としての役割が大きかった教師の授業スタイルから、これからは生徒の学びの伴走者として、子供が目を輝かせて「なるほど分かった」「学ぶことは楽しい」「もっと学びたい」など、子供たちが前のめりになる、ＩＣＴを有効に活用した主体的・対話的で深い学びへの授業改善を発信し、自立した学習者を育成する新たな学びへの挑戦に努めてまいりました。本会が夏に実施した教育課程に関する調査において、「学力の確実な定着、資質・能力の育成に向けた方策」を質問したところ、ＩＣＴを活用した個別最適な学びと協働的な学びの充実に重点を置いていると回答した学校が八五・六％と最も高い数値となり、取組の成果が表れていました。

次年度の学校経営にあたっては、全日本中学校長会と道中がそれぞれ発行している「調査研究報告書」を、是非、皆様の新年度の計画に反映させていただきたく存じます。

次に、「教師を主語とする学校づくり」についてです。教員免許更新制度の発展的解消により、新たな研修の仕組みが導入されました。今回の改革は、まさに今起きている学校教育の課題に的確に対応できる力量を兼ね備えた教員の育成につながるものであります。しかしながら、教員自身が望む研修を確実に受けられたり、自己研さんに励んだりすることができる環境が整備されなくては意味がありません。昨年四月に速報値が発表された令和四年度の教員勤務実態調査集計において、一日当たりの在校等時間は、未だ多くの教員が一〇時間近く、またはそれ以上です。道中は、「教員が笑顔になり、その先にいる子供たちも笑顔になれる学校における働き方改革の推進」という「全日中新教育ビジョン」に示されたスタンスで、皆様と課題や対応策などを共有し、教育環境の充実につなげてまいりたいと思っております。

また、中学校教育の大きな変革となる部活動の地域移行については、各地区の課題や進捗状況等を共有し、皆様の学校経営や市町村への具申等に役立てることができますよう、引き続き、取り組んでまいりたいと考えております。

教育は時の社会、政治、経済などの情勢と関わりをもっています。いわゆる「骨太の方針二〇二三」には、働き方改革の更なる加速化、指導・運営体制の充実などを進めるために、本年度からの三年間を集中改革期間として施策が進められることが明記されました。今後も、国の動向を注視しながら、校長という視座で、子供たちと教職員の未来、学校の未来の姿をしっかりと描き、新たな時代へ、「心を一つ」「思いを一つ」に、より一層結束を強めて、「しなやか」に歩んでいかなければならないと強く思っております。

結びになりますが、私どもが衿に付けております北海道を輪郭とした「道中バッジ」には、中心から放射状に全道各地に伸びる線があしらわれています。この線は道中と各地区とのつながりを表しており、オール北海道で「心を一つ」に、中学校教育の振興を図り、全道五六一校と道中が、共に光り輝くようにとの強い願いが込められています。このような先達の「思い」をしっかりと引き継ぎ、子供と教師の未来のために、新たな針路や新たな流れをつくる校長会であり続けたいと願っております。これまでの会員の皆様、北海道教育委員会をはじめとした教育関係諸機関や異校種等の皆様の御支援と御協力に衷心より感謝申し上げまして、会誌「全道中」発刊にあたっての御挨拶とさせていただきます。

潮流

中学校教育の一層の充実を願って

北海道教育委員会　教育長　倉本博史

北海道中学校長会におかれましては、本道の中学校教育の改善・充実はもとより、本道の教育行政の推進に特段の御理解と御協力をいただいていることに心から感謝申し上げます。

新しい時代に求められる資質・能力を育成する中学校教育の充実に向け、大きく三点にわたり、述べさせていただきます。

一　子どもたち一人一人の可能性を引き出す教育の推進

(一) 教育課程の適切な編成・実施

学習指導要領で育成を目指す資質・能力を生徒一人一人が身に付けるためには、校長を中心とした全教職員の協力の下、家庭や地域社会との連携を図り、教育課程に基づき組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図ることが重要であり、とりわけ、授業時数の設定に当たっては、国の通知に基づき、全ての学校において、生徒の学習状況や教職員の勤務の状況、近年の休校や学級閉鎖の状況などの観点から、現在の教育課程を点検することが大切です。各学校においては、令和六年度以降の教育課程編成において、指導体制や教育課程の編成の工夫・改善等により、指導体制に見合った計画としていただくようお願いします。

(二) 学力向上の取組

令和五年度全国学力・学習状況調査の結果では、一部の教科で全国平均との差が縮まるなど改善傾向が見られますが、様々な場面で知識・技能を活用し、思考・判断・表現することなどに課題が見られます。

このため、ＩＣＴの効果的な活用による組織的な授業改善などの取組を一層充実させる必要があり、北海道版結果報告書に掲載している改善方策等を参考に、校長のリーダーシップの下、学校全体で学力向上に向けた取組を進めていただくようお願いします。

(三) 英語教育

グローバル化が急速に進展する中で、生徒に四技能五領域のバランスのとれた英語力を身に付けさせることが求められています。各学校においては、全国学力・学習状況調査や英検ＩＢＡ等の結果を踏まえ、小学校と連携を図りながら授業改善を推進するとともに、学習到達目標の生徒・保護者との共有や目標の達成状況の把握による指導と評価の充実などの取組を一層進めていただくようお願いします。

(四) 人権教育

令和五年四月に施行された「こども基本法」に基づき、「全ての子どもは大切にされ、基本的な人権が守られ、差別されないこと」など、こども施策の基本理念を踏まえた教育活動を推進することが大切です。各学校においては、生徒一人一人の成長や変容を適切に捉えてよさを伸ばすなどの取組を進められるよう、人権教育に係る効果的な指導に向けた校内研修等の取組を一層進めていただくようお願いします。

(五) 特別支援教育

管理職を含めた全教職員の専門性向上に向けた取組の一環として、「小・中学校の管理職のための特別支援教育ハンドブック」を作成し、配付しました。各学校においては、特別支援教育を一部の教職員が担当する「特別」な教育と捉えるのではなく、全ての教職員が携わり推進すべきとの認識の下、校長は本ハンドブックを活用し、校内支援体制を整備し、一人一人の可能性を引き出す教育を推進いただくようお願いします。

（六）体力向上

令和五年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査では、「卒業後も運動したい」と回答した生徒の割合が増加する一方、一週間の総運動時間が「〇分」、学習以外のスクリーンタイムが平日一日「四時間以上」と回答した生徒の割合が増加しています。各学校においては、保健体育授業の更なる質の向上や、望ましい運動習慣や生活習慣の定着などに向けた組織的な取組の一層の充実を図っていただくようお願いします。

二　学びの機会を保障し質を高める環境の確立

（一）ＩＣＴを活用した学びの保障

新型コロナウイルス感染症に伴う臨時休業等の場合のみならず、インフルエンザの流行やその他の感染症・災害時等においてもＩＣＴを活用した学びを継続することが重要です。各学校においては、非常時における生徒の学びを保障する観点からも、授業等における一人一台端末の日常的な活用や、家庭への持ち帰りを進め、ＩＣＴを活用した学びの充実を図っていただくようお願いします。

（二）生徒指導の充実

国が示した「不登校・いじめ緊急対策」において、学校には、生徒のＳＯＳを受け止め、組織的対応を行い、外部の関係機関等とも連携して対処するなど、きめ細かな対応が求められています。このため、各学校においては、一人一台端末を活用した「心の健康観察」等の早期発見の取組や、ＳＣ、ＳＳＷ等の専門家を加えた組織的対応の徹底を図るなど、校長のリーダーシップのもと、すべての生徒が安心して学べる学校づくりを推進いただくようお願いします。

（三）学校における働き方改革の推進

働き方改革により教員自身がこれまでの働き方を見直し、生徒と向き合う時間や自らの学びを深めるための時間を確保していくことは、「質の高い学び」と「持続可能な学校」の実現につながるものです。学校が「働きやすさ」と「働きがい」を両立する職場となるよう、各学校の実情に応じた取組を推進いただくようお願いします。

（四）服務規律の保持

教職員のわいせつ行為など、重大かつ悪質な不祥事の発生が後を絶たない状況です。こうした不祥事は道民の信頼を大きく損なうものであり、職員を指導する立場にある校長の皆様におかれましては、自らを厳しく律するとともに、教職員が服務規律を徹底するよう、これまで以上に危機感をもって取り組んでいただくようお願いします。

三　地域と歩む持続可能な教育の実現

（一）地学協働活動の推進

学校が家庭、行政、企業等と連携し、学びの場を地域社会に広げるとともに、生徒が主体的な地域社会の担い手として成長できる教育を推進することが重要です。各学校においては、「コミュニティ・スクール」をはじめ、地域の方々が学習活動に参画する体制を構築し、地学協働活動を推進いただくようお願いします。

（二）世界遺産の活用

「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界文化遺産に登録されたことを契機として、生徒の歴史・文化への理解促進を図るため、世界遺産の構成資産を歩いたように探索できるデジタル教材等を作成し、ホームページで公開しましたので、学習機会の一層の充実を図っていただくようお願いします。

（三）部活動の地域移行

部活動の地域移行は、「地域の子供たちは、学校を含めた地域で育てる」という考えの下、生徒の望ましい成長を保障できるよう、地域の実情に応じスポーツ・文化芸術活動の最適化を図り、体験格差を解消することを目指すものです。学校は、生徒の教育や健全育成に関する専門性と実績を生かし、市町村教育委員会や市町村関係部署、スポーツ・文化芸術団体等と積極的に連携を図っていただくようお願いします。

終わりに、急激に変化する時代の中で、学校教育においては、生徒一人一人が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら社会的変化を乗り越え、人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、資質・能力を育むことが求められます。そのため、校長のリーダーシップの下、学校と社会が目標を共有し、連携・協働しながら、「社会に開かれた教育課程」の実現を目指すなど、学習指導要領の趣旨等を踏まえた取組を着実に実施していくことが重要です。

道教委といたしましても、今求められる学校教育の実現に向けて、貴校長会との絆をより一層深めていく必要があると考えており、今後も引き続き、緊密な連携・協力をお願い申し上げますとともに、貴校長会のますますの御発展を祈念申し上げ、会誌の発刊に寄せる言葉とします。

変革期の校長として大切にしていただきたいこと

北海道立教育研究所　所長　中澤美明

校長の皆様には、令和の日本型学校教育の実現に向けて、ＧＩＧＡスクール構想や働き方改革、部活動の地域移行など、大きな教育の変化を受け止めながら、リーダーシップを発揮され、確実に成果を上げられていることに、心から敬意を表します。

昨年は、六月に「持続可能な社会の創り手の育成」「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」をコンセプトとした第四期教育振興基本計画が策定され、五年間の国の教育施策全体の方向性が明らかになりました。また、十二月には、中央教育審議会の義務教育の在り方ワーキンググループの中間まとめが示され、これからの義務教育に関する基本的な考え方やオンラインを活用した学び、自立した学習者の育成などについて整理されました。さらに、ＧＩＧＡスクール構想では、端末更新に必要な国家予算が概ね確保される見通しであり、セカンドステージに向けた取組も進められています。このほか、令和六年度は、次期学習指導要領の改訂にかかわり、文部科学大臣から中央教育審議会への諮問が想定されており、新たな時代の学校教育の青写真が明らかになろうとしています。

こうした流れを踏まえると、今後数年間の学校は、これまで以上に変化が求められる「変革期」の中にあり、既存の取組の見直しのほか、新たな教育活動など、様々な取組が展開されることと思います。

本稿では、この変革期の校長が、「新たな取組」や「大きな変化を伴う取組」を進める際、特に大切にしていただきたいことについて、私が行政経験の中で教示いただいた知見等を基に述べてまいります。

一　先進事例の「背景」を見抜く

新たなことや大きな変化を伴う取組を行う前には、先進校を視察したり、実践発表などを参考にしたりすることが一般的ですが、そのような他校の実践を取り入れてもうまくいかないことがよくあります。むしろうまくいかないことや長続きしないことが多いのかもしれません。それはなぜか。おそらく、先進校の目に見える「現象面」だけを真似て、その背景にある取組を見逃しているからではないでしょうか。例えば、ＩＣＴ活用の先進校を視察すると、授業開始と同時に生徒が端末を活用して自分たちで学び始める場面を目にすることがあります。まさに自立した学習者です。この状況を視察して刺激を受けた教職員は、その生徒の姿を自校の生徒に求めますが、思い通りになりません。なぜならば、先進校では、その生徒の姿に至るまでに、「学び方を習得する」、「良好な人間関係をつくる」、「基礎学力を確実に身に付ける」「キーボード操作を練習する」など、学びを支える地道な取組を全校体制で積み上げてきているからです。

校長は、教職員より高い位置から物事を眺めることができる職位です。先進事例の導入の際には、その背景まで見抜き、土台となる取組も含め、総合的に教育活動を展開していただくようお願いします。

二　自身の「思考特徴」を自覚し、判断する

校長の重要な役割として、「判断」があります。新たな取組を行う場合や大きな変化を伴う際には、より適切な判断が求められます。皆様は、適切に判断するためにどのようなことに気を付けられていますか。様々考えられますが、まずは、自身の思考特徴を自覚することが大切ではないでしょうか。例えば、学力向上のために新たな取組を企画する場面を考えて

みましょう。郡部の中学校で生徒指導部を中心に担当して学校の荒れを肌で感じてきた校長と、都市部の小学校で低学年と研究部を中心に担当してきた校長の判断を比較した場合、視点や発想、内容が異なることは容易に想像できます。これは、それぞれの校長がこれまで経験してきた校種、校務分掌、出会い、成功や失敗などにより、思考に偏りが生じるからです。こうした偏りはあって当然なのですが、大切なことは、その偏りを自覚して、より広く情報を収集したり、他から意見をもらったりして、自校にふさわしい取組となるよう調整しながらよりよい判断を行うことなのです。

職位が上がるほど偏りが顕著になる一方、周囲では進言してくれる人が少なくなる傾向にあります。校長は、適切に判断できるよう自身の思考特徴を自覚する姿勢を大切にしていただきたいと思います。

三　自身が「腹落ちしたビジョン」を「魅力的」に伝える

皆様は、新たな取組を行う際に、実現するまでの道程や最終的に実現した状態、得られる成果などのプロセスやゴールイメージを「ビジョン」として示されていることと思います。しかし、教職員は、そのビジョンに魅力を感じ、積極的に取り組んでいるでしょうか。優れた校長は、ポジティブな表現で伝えることはもとより、教職員のモチベーションを高めるために様々な伝え方を工夫しています。例えば、会議やスピーチ、日常の会話などで、繰り返し伝えます。例え話やストーリーを用いてわかりやすく表現します。特に重要な内容は、場面やタイミングを選び、熱意をもって話します。

とはいえ、こうした工夫を凝らしても伝わらないことがあります。そのときは、ビジョンに校長自身の教育観や価値観が反映されているか、そのビジョンに校長自身が魅力を感じ、納得し、腹落ちしているかをセルフチェックすることが重要です。本心と異なることをビジョンとして説明しても伝わりません。むしろ逆効果になることもあります。校長の魂のこもったビジョンこそが教職員を動かすのです。

四　スピードに配慮した「経過目標」を設定する

大きな変化を伴う取組を短期間で実現することは難しいため、中・長期にわたる計画が必要になります。その際、重要なことは、三ヶ月後、一年後、二年後などの節目における「経過目標」を設定し、達成状況を確認したり、場合によっては途中で計画を変更したりして、着実に取組を推進していくことです。経過目標の設定には、このような進行管理ができるよさがありますが、そのほかにも、取組の途中で、達成した喜びを教職員間で共有したり、活躍した人を賞賛したりすることにより、教職員のモチベーションを高めるメリットもあります。

経過目標の設定で最も留意していただきたいのは、管理職と教職員の「スピード感のズレ」です。管理職は多くの経験を積み、高い資質・能力を身に付けているので、教職員より早めに成果を求める傾向があります。私はこれまで、この傾向を校長が自覚しないために、計画が思うように進まない事例を数多く目にしてきました。校長は、目標のレベル、生徒や教職員の状況、これまでの取組等を把握し、最初からスピードを出すのか、徐々に加速していくのか吟味し、自校に適したスピードで確実に目標を達成していただくようお願いします。

結びに

どんなに有能な校長でも、一人で全ての校務を行い、学校が目指す目的を実現することはできません。校長は、場合によっては自らプレイヤーとして動くこともありますが、基本的には「人を介して目的を実現するマネージャー」であります。この役割を果たすためには、校長は、教職員一人一人が最高のパフォーマンスを発揮できるよう、教職員の負担に配慮しながら、教職員がやりがいをもち、満足感を感じて働くことができる学校づくりに努めることが重要であり、本稿をその一助として御活用いただければ幸甚であります。

なお、当研究所では、来年度、本稿で述べた内容にかかわる管理職向けの研修講座を実施します。集合形式のケーススタディを中心とした演習を通して探究や省察を行います。学校マネジメント能力を一層高めたい方は、是非、参加いただきますよう御案内申し上げます。

論考

心豊かで主体的に生きる力を育む学校経営

校種間・地域連携を進める学校経営

古平町・古平中　秋元　大

一　はじめに

本校は後志の北海岸に位置し、小樽市から車で約一時間ほどである。地域の産業は水産業や社会福祉事業となる。生徒数は五三人と各学年一学級と特別支援学級からなるこぢんまりとした規模の学校である。学校のそばには古平川が流れ、日本海に注ぐ河口を望む立地となる。保護者・地域の学校に対する協力が厚く、様々な学校行事や教育活動に積極的に参加している。

二　校種間連携を進める

本町は小学校が一校であるため、比較的連携を進めやすい状況にある。以前から学習規律の整理・共有などを進めてきた。平成二十八年度から町教育研究会の組織を改め、小中合同の部会を設置、小中の教職員が一堂に会して、様々な交流や研究を進めてきた。感染症対策のため、一時活動は停滞していたが、徐々に回復してきている。

中学校教員による乗り入れ授業や、小学校授業の見学・意見交流を定期的に行ったり、共通課題の協議を進めたりするなど、連携を重ねてきた。

平成三十一年度（令和元年）より三年間、「海洋教育パイオニアスクールプログラム」の研究指定を受け、その後も総合的な学習の時間における「海洋教育科」として実践を進めてきた。小学校三年生から中学校三年生までの探究課題や取り扱う内容を一覧にし、連続した学習になるように取り組んでいる。その中で、北海道小樽水産高等学校の古平実習場とも連携し、サケの人工授精（小学三年生）や海岸の生物採集や種の同定学習（高校生も参加、中学一年生）、栽培漁業に関わる講話及び実習船体験乗船（中学二年生）など、地域に根ざした学習と校種間連携を行っている。

また、児童保育施設である幼児センターと小学校でも共通の指針を策定し、連携を深めている。

三　地域連携を進める

町の産業課が橋渡しとなり、東しゃこたん漁業協同組合の青年部による出前授業を中学一年生を対象に行っている。古平沖で行われている漁の実際の様子を撮影した映像を見て、実物の漁具にふれ、鱈鍋を試食するなど、五感に訴えたふるさとを実感する授業となっている。

また、保健福祉課の依頼を受け、認知症サポーター認定講習を小学校と中学校で年に一度ずつ実施している。認知症の人への対応の理解を深め、認知症高齢者とその家族に優しい町づくりへの貢献を目指している。

中学三年生では、キャリア教育の一環として、町内外の事業所で二日間実習を行う職場体験を実施、今年度についてはこれに加えて、社会人による職業講話を実施した。地域で活躍している社会人の職業に対する思いや実情、地域への思いを直接聞くことができて、自身の将来を考える上で、大いに刺激となる時間となった。

感染症対策に伴う制限も概ね解除されたことから、地域行事への参加が復活してきている。地域イベントへの吹奏楽部出演、スポーツ大会や祭典への参加など、地域とのつながりを大切にしながら、学校運営を進めている。

四　結びに

児童・生徒数がどんどん減少していく中で、持続可能な社会の担い手を育成する学校教育において、校種間、家庭、地域の連携・協働を進めることは、非常に重要な意味をもっている。

そのために、小・中学校の校長が中心となってビジョンを共有し、教育委員会と密接に連携をとり、目指す子供を育てるため、実効性のある手だてを講じていかなければならない。

町が目指す「新しいこと、困難なことに自ら挑戦し、努力を続ける子供」の育成のために今後も取り組んでいく所存である。

「よし！　やってみよう！」を合い言葉に

枝幸町・枝幸中　林　智宏

一　はじめに

本校はオホーツク海に面した枝幸町市街地を中心に、南北三〇ｋｍに及ぶ校区をもつ学校である。今年度は全校生徒一一〇人、六学級（特支二）であり、近年、生徒の減少が著しい。

保護者・地域ともに伝統を大切にする気風があり、さらに、「おらが街の学校」のイメージを有する人が多い。また、学力はもちろん、行事や部活動への期待の声も多い実感がある。このような地域の期待に応えるべく、前例踏襲となりがちな教育活動の抜本的な見直しを進めてきた。そのキーワードが「よし！　やってみよう！」である。

二　学校経営の基本方針

1　学校教育目標の徹底した実現を目指す

○確かな知恵を養おう
○豊かな心を育てよう
○健やかな体をつくろう
○逞しい実践力を身につけよう

2　「生徒の『成長』のために」を中心に据え、職員全体で創り出し、支え、導く。

3　地域社会との連携を密にし、開かれた学校として、信頼を得る学校づくりを目指す

三　本年度の重点

1　実践のキーワード…『よし！　やってみよう！』

『よし、やってみよう！』の『よし』の言葉に内在するのは自己肯定感、自己決定。『やってみよう』に内在するのは意欲、実践化、粘り強さ。これらが主体性の育成に、そして実践力・実行力を高め、さらには創造性の育成にも大きく働くと考えている。

教師も生徒も、個で、学級で、学年で、生徒会活動で、部活動で、行事で、様々な場所で使うことのできる言葉であり、全ての生徒が、「よし！やってみよう！」と挑戦していく勇気をもてる環境づくりと方策を全員で作り出すことを目指している。

2　本年度の重点

(1)　「確かな知恵を養う」ために

①学力の定着・向上を目指した教科経営
②生徒一人一人を大切にした学習指導

(2)　「豊かな心を育てる」ために

①互いに尊重し、助け合い、高め合う人間関係づくり
②生徒一人一人の実態に応じ、意図的・計画的に意思決定や役割（出番）・承認の場を設定

(3)　「健やかな体をつくる」ために

①基本的生活態度（習慣）の定着
②健康・安全に対する知識・技能や判断力・行動力の育成

(4)　「逞しい実践力を身につける」ために

①自らの力で未来を切り拓く「キャリア教育」と「総合的な学習の時間」の充実

四　おわりに

課題を乗り越えるためには、あきらめない「実行し続ける力」が重要であり、やりきる「突破力」も必要である。「実行力・突破力」を引き出す第一歩が『よし！やってみよう！』であり、生徒の中に生まれた『よし、やってみよう！』を「あきらめない」「やりきる」取組へと昇華させることを目指してきた。その積み重ねが、生徒の自信に、そして成長へとつながってきたことを生徒の姿から実感している。今後も、校長の経営ビジョンが教職員はもちろん、生徒へと伝わり、具現化される教育活動を展開できるよう学校経営に努めていく所存である。

生徒に自立と共生の土台を育む学校経営

本別町・勇足中　齊藤芳秀

一　はじめに

本校は、帯広市の中心部から車で約四〇分の東北部に位置する、全校生徒一九人の学校である。本町は全国一の豆の生産地としても名高く、また酪農の大規模経営等により安定した営農がなされている。地域が学校教育に寄せる思いも強く、学校運営協議会等の地学協働体制が早くから確立しており、地域からの信頼を得た教育活動が実現できている。

二　生徒のよさと課題

本校の生徒は礼儀正しく素直で実直であるが、保育所から人間関係が変わることなく育ち、中学卒業後の新たな人間関係や環境への順応に困難をきたす事例が出現し始めた。学校評価アンケートや学校運営協議会でもこの課題を共有し、地域ぐるみで改善に向けた一歩を踏み出した。

三　重点課題設定のプロセス

1　学校課題の共有

年二回の学校評価アンケート（生徒・職員・保護者）の実施により、生徒の良さや課題を明確にし、結果を共有した。

2　重点課題の設定

共有した結果から、個々の生徒の資質・能力（自立）の伸長と、他者や社会と関わる力（共生）の伸長を併せて目指す必要性を確認し、重点課題を「自立と共生の土台を育む学校」とした。

3　重点課題に迫る手だて

教科指導、生徒指導、分掌業務や各種特別委員会の業務推進に全職員が参画意識をもって取り組むために、重点課題の改善・解決に迫るキーワードを整えた。教科指導においては「考える」（学び方を学ばせる指導の個別化・学習の個性化の実践）、生徒指導においては「伝え合う」（日常の挨拶や表現、会話を通して、伝える・伝わるを意識した指導）、特別委員会では「広げる」（関わり方を学ばせ、視野を広げる機会の拡充、連携・協働）の三点のキーワードを職員が設定した。

四　重点課題に迫る実践

1　授業改革

全教科、特別の教科道徳、特別活動等で、生徒自らが「考える」ことを主眼とした指導に切り替えた。また、通常学級における特別な支援を必要とする生徒に対して、従来の支援体制と方法を見直し、「学び方を学ばせる」指導を年間を通じて貫くこととした。さらに、外部からの指導をあおぐ校内研修の充実を図った。

2　生徒の良さを活かす生徒指導

本校生徒の礼儀と挨拶の良さは、職員・保護者・地域からも称賛されており、日常の教育活動の中で更に質を高める取組を進めることとした。生徒会の発案で「挨拶・礼儀・態度の向上」を生活目標のスローガンとして設定することとなった。

3　広い視野・世界にいざなう体験活動

総合的な学習の時間では、十勝管内から様々な人材や外部講師を招聘し、多様な学びを提供するとともに人との関わり方を体験させている。また、隣町の同規模中学校との「中・中連携授業」を実現し、同年代生徒との交流を実施したことにより、本校が課題としていた「高一ギャップ」の克服を叶えている。

五　終わりに

生徒の成長と課題改善・解決に向けた私たちの挑戦は尽きない。生徒の「自立と共生」を育む営みを進める以上、私たち職員も自立と共生の主体者であるべきだろう。学校全体に共同体意識（心理的安全性）を醸成し、参画意識と自走力に満ちた組織体制づくりが求められる。

人と人とを結ぶ持続可能な地域活動

札幌市・南が丘中　中川桃子

一　はじめに

初夏、本校の前の花壇には一面にかわいらしいラベンダーが咲き誇り、芳しい香りを放っている。札幌のラベンダーの歴史は、この地、南沢農場に昭和十五年、フランスから輸入された種から始まる。この地区こそ、札幌のラベンダーの発祥の地であり、この地区の人たちにとってラベンダーは自分たちの住む町のアイデンティティであり、文字どおり、今も地域に根付いた、人と人をつなぐ大切なツールでもある。南沢地域の歩道には手入れの行き届いたラベンダーが元気に誇らしげに咲いている。

そのような場所に位置する本校は今年、開校四〇周年を迎える。この自然が豊かで、静かな住宅地で、地域の方々に温かく見守られながら、およそ三三〇人の生徒が伸び伸びと学んでいる。

二　ラベンダーが結ぶ人と人とのつながり

1　ラベンダーを核としたプロジェクト活動を通して

本校では、毎春、全校から「ラベンダープロジェクト」と呼ばれるボランティアに参加する生徒を募集する。各クラスから生徒が手をあげて、プロジェクトに参加し、校地にあるラベンダー畑の雑草を抜いたり、手入れをしたりする。また、最適な頃合いを見て、花をつけた茎を刈り取って、ドライフラワーにし、かわいらしくアレンジをしたり、ポプリにしたり、瓶に詰めたりなど、思い思いに小物を作り教室などを飾る。

また、「小中一貫した教育」の一助として、それらを校区の小学校の児童会にプレゼントしたり、スキー学習のお手伝いをしてくださっている方々にプレゼントしたりするなど自分たちで考えながらラベンダーを地域に還元している。今年は、生徒会が、良く育ったラベンダーの株を小学校に分け、喜んでいただいた。本校で育てたラベンダーの家族が増え、「小学校と中学校の絆」がラベンダーを核に深まっている。

2　地域清掃ボランティアを通して

年に数回、生徒がごみ袋をもって、自宅から学校までの通学路を、ごみを拾いながら歩く。いつも通学の見守りをしてくださっている地域の方々に声をかけてもらう。生徒は元気な挨拶を褒められる。ゴールの学校の前では、委員会の生徒がプラカードをもって分別を呼び掛け、ごみの整理をしている。ただそれだけの活動だが、その意義はとても大きい。

生徒たちは「思いのほか、ごみは落ちていなかったです。地域の人たちが日頃からきれいにしているのですね。」「地域にごみがないって、すごいことですよね。」と感想を述べあっている。

この活動を通して、生徒たちは地域の良さやこの地域での暮らしやすさを改めて実感する。地域に育ててもらう、そして、地域のために何かをする心が芽生えることを期待し、この行事を継続している。

三　結びに

これから「札幌らしいコミュニティ・スクール」の実践が本格化する。この取組は地域の人たちとともに学び合える子供たち、主体的に課題解決をすることに喜びを感じる子供たちを育てると確信している。自分たちが住む地域の成り立ちや素晴らしさを自覚し、小さなことでも楽しみながら地域の方々とともに教育活動を行う。培われてきた地域の教育資源を生かし、持続可能で楽しい仕掛けを提供し、皆で地域に連綿と続く教育活動として育てていくことがこの取組の醍醐味である。

社会情勢が目まぐるしく変化し、いろいろなことに急がされている。新しい変化に付いていくことがつらいと思う子供たちも少なくないように感じる。しかし、そのような中にあっても、あふれる情報の中から自分に必要なものを選んだり、結びつかせたり、根拠をもって物事を正しく判断できる子供たちを育てなければならない。そして、子供たちが難しい課題や困難にあっても、思考しながら行動ができたり、多様な価値観を互いに認め合いつつ、仲間や周りの人たちと学び合ったり、広い視野で思慮深く創造的に考えたりできるようにしなければならない。そのために、より多くの大人たち、地域の人たちが関わり、目指す子供像の実現のために協働する組織づくりを推進する必要がある。

これからも、子供たちにとってラベンダーの花のような安らぎ、優しさのある学校を目指し、「学校力」の向上につながる取組を進めたい。

論考

心豊かで主体的に生きる力を育む生徒指導

心理的な安全が保障される安心・安全な学校を目指して

初山別村・初山別中　嶋本　佳世子

一　はじめに

本校生徒は、学習に真面目に取り組み、周りの状況を考えて行動することができる。反面、少人数でクラス替えがないため人間関係が固定化されやすく、新たなことに挑戦することに抵抗感をもっている生徒が少なくない。そこで、生徒一人一人が、安心して学び合うことができる環境を土台として構築し、教職員と生徒が共に、自らの考えを生かし、より良く変えていくことができる学校の実現を目指している。

【目指す学校像】

◆生徒自らが考え、自らが動く学校（主体性）
◆だれもが安心して学び合える学校（心理的安全、人との関わり）
◆保護者・地域が応援したくなる学校（家庭・地域からの信頼）

二　生徒指導の理念

小さい学校ではあるが、ここ数年、中一ギャップから登校不安に陥ったり、不登校になってしまったりという生徒も少なからずいる。場当たり的な対応ではなく、安心・安全な仕組みをつくるために、スクールカウンセラーの配置、組織的な対応の基盤づくり、自走する生徒会組織の育成に力を注いできた。

今年度の重点教育目標は「当事者意識の更に上！～何事も面白がって挑戦する『ご機嫌力』を磨く生徒の育成～」とした。今年度は生徒数が減少し、開校以来、歴代三番目一六人という少なさである。全校生徒がより良い学校を目指し、一人一人が学校の推進力となって活躍できる環境と場を設定することや意識付けをすることが大切であると考えている。そのためには、失敗を恐れずポジティブに受け止めて実行に移せるように、新たな挑戦を後押しし、失敗を許容する支持的風土をつくっていく。

【本年度の教育重点目標】
当事者意識の更に上！
～何事も面白がって
挑戦する
「ご機嫌力」を磨く
生徒の育成～

◆風通しの良い職員室と組織的な対応
◆互いを尊重するフラットな関係性の構築
◆生徒の主体性を育む取組とそれを後押しする雰囲気の醸成
◆個性や特性の理解とベクトルをそろえた指導
◆心理的な安全が保障される居心地の良い学校

校則見直しの学級討議

三　本校の取組

◆「フォーサイトアプリ」の活用による生徒の生活習慣づくりと、振り返りの共有による生徒理解。
◆学年担任制、部活動複数顧問体制による、複数の目で生徒を見つめ、組織で対応する仕組みづくり。
◆丁寧な言葉遣いでの語りかけや相手を尊重する言葉遣い。意見箱の設置による生徒主体の学校づくり。生徒指導提要改訂を機に進めた校則や「置き勉」の見直し。
◆関わった生徒の足跡を残す、前年度踏襲にならない自走する生徒会活動（挨拶運動、意見箱の設置、みんスポ、各員会企画レク）。
◆スクールカウンセラーの配置とカンファレンスによる情報共有。いつでも、誰かに相談できる環境の整備。

四　終わりに

今年度、三人の転校生を迎えた。そのうちの一人は三年生での転校であった。小学生からサッカーを続けてきたその子は、本校にサッカー部がないことを知り、失意のどん底であった。教職員や関係機関と話し合い、臨時のサッカー部を立ち上げて、他の学校との合同チームを組めるようにした。サッカーを続けることができたその生徒は、学校にも慣れて、今では中心的な存在として活躍している。生徒一人一人の考えや思いをくみ取り、個別最適な対応を行い、安心して楽しく学校生活を送れる環境をつくっていくことが、何より大切なのではないかと思う。

社会的な自立を実現する生徒指導

福島町・福島中　助川　剛

一　はじめに

本町は北海道最南端に位置し、津軽海峡を隔て青森県竜飛岬と対し、道南の秀峰大千軒岳を背負う。松前・矢越道立自然公園の一部で、温暖で風光明媚の地であり、千代の山関、千代の富士関と二人の横綱を輩出している「横綱の里」である。地域は漁業を基幹産業としている。また、スポーツ振興に一体となって取り組むとともに、ＩＴ推進町として情報教育の推進にも努めている。地元高校との取組や連携を強化し、小中高連携も図りながら、町民の豊かな暮らしや人材育成等に寄与する各種事業が展開されている。

本校は、今年で七六周年を迎えた。昭和三十七年には七二八人、青函トンネル工事当時、四〇〇人ほどいた生徒も少子高齢化のため、現在は五学級（特別支援二学級）、生徒数三九人の小規模校となっている。生徒は、明るく、純真、純朴で活動的である。落ち着いた学校生活の中で、自尊感情の高さ、表現力の豊かさという長所を生かし、部活動への積極的な取組など、一層の活力が生まれてきている。各種調査の結果から基礎学力の向上に取り組んできた。毎朝の読書習慣等で国語力に一定の成果がみられる。数学でも基礎的・基本的な学習事項の定着に成果が出ているが、記述式の問題に課題を残している。ＩＣＴの効果的な活用や、望ましい生活習慣・学習習慣の形成を図ることでより一層の学力向上を図っている。

二　生徒指導の考え方

今年度の重点教育目標は「認め合い、支え合い、未来を切り拓く生徒の育成」である。多様な考えを認め、いろいろな意見をまとめ協力し合うことで、様々な課題を乗り越えていける力を育んでいくことを目標として設定した。その中で展開される本校の生徒指導は次のことを重点とした。

◎「社会的な自立を実現」　～魅力ある学校づくりの推進～

1　集団づくり・授業づくりを通した未然防止的な生徒指導
（各行事等を通した自己有用感・自己存在感の獲得や「分かる」授業の実施）

2　命の大切さや自らの生き方を前向きに考える教育活動
（教科道徳の実践交流）

3　認め合い支え合う、温かい人間関係づくりを高める指導
（多様性の理解と人権尊重）

4　生徒主体による教育活動（生徒会活動）の充実

三　具体的な取組

1　生徒指導提要に基づき二軸三類四層構造を踏まえた指導体制の充実

(1)発達支持的生徒指導と課題未然防止教育を重視した生徒指導体制

①発達支持的生徒指導に係って
・生徒指導部通信の定期的発行
・生徒指導交流会による生徒理解と指導・支援の充実
・生徒指導に係る事例研修の充実

②課題未然防止教育に係って
・生徒会主導の「いじめ撲滅集会」「校則を考える会」
・情報モラル教室（年三回）、ＩＣＴ支援員の活用
・全教師による道徳科の授業

2　学習規律の確立

(1)全校体制で望ましい学習環境づくりのための学習規律の徹底

3　いじめ・不登校防止について

(1)全校体制で「創り出す」取組
・豊かな心を高める道徳科の授業
・人権教育・情報モラル教育の推進
・生徒と教師の望ましい人間関係の構築といじめや問題行動未然防止のためのふれあい活動の継続
・教育相談の充実
・スクールカウンセラーの活用

四　終わりに

生徒会主催の「いじめ撲滅集会」、「校則を考える会」では、縦割りグループの中で意見を交換し、また他のグループの意見をタブレット上で確認し、さらにグループで話合いを深め、どのようにすればいじめはなくなるか、校則の何が必要で何が不必要かを全体で発表・交流している。他の意見を認め、学年を超えて意見を交流し、新しい学校生活を自ら創り出そうとしている。本校の生徒指導のねらいが浸透し、生徒の資質・能力が育まれているのを実感する。「社会的な自立」ができる生徒の育成にこれからも努めていきたい。

自走する生徒指導体制で
主体的に生きる子供を育む

平取町・平取中　多田　謙一

一　はじめに

本校は、昭和二十二年に開校した。町名の平取（びらとり）は、アイヌ語「ピラ・ウトル（崖の間）」に由来している。校区は広く、本年度は四つの小学校より三八人が入学、全校生徒一〇三人が在籍している。

生徒は、明るく素直で活動的であり、主体的に学習に取り組もうとする姿が多く見られる。一方で、自分の考えを他者に伝えることに苦手意識をもっている生徒も少なくない。学校教育に対する保護者の関心は高く、協力的である。胆振や石狩、札幌市等、管外の高校に進学する生徒も多い。

二　生徒指導の考え方

「自分の想いや考えを豊かに表現できる生徒の育成」

これは今年度の重点目標である。この目標を達成するためには、全教員が生徒指導を意図的に推進することが不可欠である。特に日常の教育活動の中心となる授業で、生徒指導の中核となる三つの機能、「自己決定の場を与える」「自己存在感を与える」「共感的な人間関係を育成する」を生かし、指導に当たらせている。

また、本校は初任段階の教員が多く、教職経験の年数の差もあるので、生徒指導の研修を年に複数回実施している。社会や家庭教育の変化・複雑化に伴い、学校現場では多種多様な生徒指導の場面に遭遇し、適切な生徒指導が求められている。だからこそ、自己の指導の経験値を積極的に上げていく姿勢が必要であることを研修の中で確認した。

研修の講師を務めた生徒指導主事からは、日常の生徒指導をチェックする三つの視点が提示された。

1　しっかりとした指導理念（育成を目指す人間像・集団像を構築し共有する）

2　基礎思考から実践思考へ（理念を具体化するために必要なキーワードを洗い出し、指導項目を明確にする）

3　ティーチングよりコーチング（伴走者の視点をもつ）

「教師が変わらなければ、生徒を変えることはできない」

これも生徒指導主事から提示された言葉である。生徒指導の考え方について、年度当初だけではなく、意図的・計画的に研修の機会を設定し、組織的な生徒指導体制の充実を図っている。

三　本年度の主な取組

1　生徒指導交流の定例化（職員会議での情報交流、生徒指導上の課題解決に向けた共通理解）

2　教育相談の充実（教育相談週間を年間複数回設定・実施、スクールカウンセラーの効果的活用等）

3　主体性を育てる生徒会・学級活動の充実（「いじめゼロ宣言」の採択、校則の見直し、学校改善運動等）

4　「考え、議論する道徳」の組織的実践（全教員による実践の累積、生徒の変容の共有、外部人材による人権教育講話等）

四　おわりに

八月下旬、猛暑が続いたある日の朝の職員室。教頭を中心に、教務部や生徒指導部が熱中症対策を協議していた。教務部は、冷房のある限られた教室での授業等、少しでも快適な環境での学びについて調整していた。生徒指導部は、部活動の実施判断や冷却グッズ等の使用について、関係職員と連携しながら保護者向けの文書を作成し配付準備をしていた。子供の命と健康を守り、教育活動を保障しようとする姿が見られた。朝会では、適切な服装や水分補給を含め、受け身ではなく主体的に自分の命と健康を自分で守らせる指導、主体的に生きる力を育む指導について全教員で再確認した。引き続き、生徒指導の三機能を生かした教育活動を推進し、自走する生徒指導体制の構築に努めていきたい。

「鶴居学校」としての連携・協働体制による発達支持的・課題予防的生徒指導の推進

鶴居村・鶴居中　渕本浩之

一　はじめに

鶴居村は釧路管内のほぼ中央に位置し、村南部には釧路湿原国立公園が広がっている。また、その名のとおり鶴が居る村。長年、タンチョウの保護活動を続けている。

本村には小学校三校、中学校二校があり、それぞれの学校の個性を大切にしながら、五つの学校をまとめて「鶴居学校」という考えのもと、学校単独では指導が難しいことでも、五校が連携して人づくりに臨んでいる。令和三年度からは北海道教育委員会の「学校力向上に関する総合実践事業」の指定地域となり、本校を中核校として村内五校で小中連携を軸とした取組を推進してきた。

本校は鶴居小学校と下幌呂小学校の二校から生徒が入学している。全校生徒は六二人で、そのうち三三人がスクールバスで登校している。家庭や地域の教育力は高く、生徒は素直で落ち着いた学校生活を送っている。

二　学校力向上に関する総合実践事業における生徒指導の取組

1　学習規律の統一

「つるいの子　六か条」を作成。発達段階に応じて表現は変えているが、授業を通して生徒指導を行うことに取り組んでいる。

2　生活リズムチェックとタイムマネジメント力

村内共通様式で生活リズムチェックを実施。その結果分析から「よりよい生活・よりよい学びのための五か条」を児童生徒に提示し、さらに小学校高学年以上にはタイムマネジメント計画表と組み合わせた取組としている。

3　小中合同生徒理解研修

中学校区内の小中学生の実態や指導上の課題等に共通理解を図ることを目的に実施。各校で実施している分析ツール（ＱＵ等）の結果も活用し、中学校への円滑な接続を図っている。

4　村内一斉の生徒指導研修

ＳＯＳの出し方に関する教育（自殺予防教育）の研修、いじめの認知に関する研修を、村内五校オンラインで結び、村内全教職員が参加のもとで実施した。

三　村内の関係団体

1　生徒指導研究協議会

村内の児童生徒の生徒指導上の実態を把握するとともに、児童会・生徒会活動の交流、「こども会議」を推進している。

2　特別支援教育連携協議会

教育上特別な支援を必要とする児童生徒の支援のあり方について学校、関係機関の連携を図っている。

四　本校の取組

村内の取組に加え、次のことを重点として実施している。

1　教育相談機会の充実

チャンス相談に加え、いじめ調査・ＱＵと合わせて年二回（中三は三回）の教育相談を行う時間を確保し、生徒の状況の積極的把握に努めている。

2　幌呂中学校の統合に向けた改善

令和七年四月の統合に向け、プロジェクトチームを立ち上げ、生徒指導面では主に次の事柄について両校の良さを生かす見直しを行っている。

・制服のブレザータイプへの変更
・生活のきまり（いわゆる校則）の改定
・生徒会活動の見直し

五　おわりに

本校の経営の重点の一つに「生徒の良好な人間関係の構築と主体性を育む生徒指導の充実」がある。これは本校の課題でもある。この課題の解決に向けて、成長を促す積極的な生徒指導の充実、課題の早期発見や教育相談体制の充実等を、学校が組織的に対応できるよう努めていくことが必要であると考えている。また、学校単独では難しいことについても、村内五校や関係機関と連携・協働できる体制を積極的に活用し、努力していたいと考えている。

論考

心豊かで主体的に生きる力を育む体験学習

課題解決のための体験活動

千歳市・向陽台中　久保田　豊

一　はじめに

千歳市の市街地から約六ｋｍ、自然林に囲まれた閑静な住宅街に学校はある。中学校の他、認定こども園二、児童館一、小学校二、専修学校一、大学・大学院一などの既存教育施設に加え、令和六年度には日本航空高等学校北海道が開校予定など、教育環境が恵まれている地域である。

生徒は礼儀正しく、素直で明るい。しかし、仲間と協力して物事を進める・目の前の課題を解決するという経験値が、新型コロナウイルス感染症拡大による影響もあったため低い。また、人間関係をうまく作れない生徒が少なくなく、些細なトラブルから不登校や教室に入れなくなるという生徒が年々増えていた。あわせて、将来に対して方向性を見い出せない生徒が多いという点が見られた。ここでは、その本校の課題解決のために実施している体験学習（キャリアプランニング能力向上）について、紹介させていただく。

二　本校の取組

１　職場体験学習

育成すべきキャリアプランニング能力のために、各学年で職場体験学習を実施している。特徴として、旅行的行事の際、自主研修活動と並行して職場体験活動を行っている点が挙げられる。その訪問先には可能な限り、その土地での特色のある企業や基幹産業で実施ができるような配慮を行っている。

第一学年では、千歳市近郊での校外学習の際に、体験学習を実施している。千歳空港内の航空機産業や食品産業などでの実習が多く見られる。同じように、第三学年の関東地方での修学旅行においても、報道関連産業や建設産業などで体験活動を実施している。第二学年では、これとは別に二日間、千歳市内の事業所での職場体験学習を実施している。事前・事後学習も含め、系統的にこの体験学習が深まっていくように取組を行っている。

三つの学年とも数多くの事業所に協力していただいているという利点を生かし、生徒が興味をもつ業種で主体的に体験活動を行うというだけではなく、少人数でグループ編成を行い、必ず生徒一人一人に役割を担わせ、コミュニケーション活動を基に協働的な学びになるような取組を行っている。

２　大学・専門学校訪問

本校卒業後はほぼ全員進学希望ではあるものの、近くに高等学校がないこともあり、進学意識が高まる時期が遅い。また将来の進路に対する具体性に欠ける点が散見されている。そのため第三学年で、近隣の大学や専門学校訪問を実施し、様々な分野の学問に実際に触れる機会を設けている。この取組もまた、キャリアプランニング能力を向上させるために実施している体験学習である。

三　おわりに

数年間にわたる新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、本校も体験活動の中止を余儀なくされた。今年度体験活動を再開する上で、本校の課題や生徒に付けさせたい資質・能力を整理した上で、どのような活動が必要なのかを検討し、総合的な学習の時間を再構成した。

一般的に言われることだが、社会で求められる仲間とのコミュニケーション能力や自立心、主体性、協調性、チャレンジ精神、責任感、創造力、異なる他者と協働する能力等を育むためには有効な活動がこの体験活動である。この活動を意図的・計画的に実施することにより、本校の課題であった、コミュニケーション能力やキャリアプランニング能力の育成に良い影響を与えた。

今後は、小中一貫教育を展開していく上で、この校区での九年間を通して付けさせたい力を念頭に、小学校二校との体験学習を含めた総合的な学習の時間を整理していきたい。

学校間連携による体験活動の充実

美瑛町・美馬牛中　大柄洋樹

一　はじめに

美瑛町は、旭川市に隣接し、主な産業は農業、林業、観光である。美瑛駅の正面からは盛んに噴煙が上がる十勝岳が一望できる。平成十七年より「日本で最も美しい村」連合に加盟するなど、美しく壮大な丘の町の景観が多くの観光客を呼び寄せている。令和五年度には、国連世界観光機関から、ベスト・ツーリズム・ビレッジの一つに選ばれた。人口は約一万人弱、風光明媚な環境の中で、小学校五校に三八八人の児童、中学校二校に二三五人の生徒が学んでいる。

二　「ふるさと学習」と「キャリア教育」

美瑛町では、小学校で「ふるさと学習」、中学校では「キャリア教育」を重点の一つとして町内の各学校が連携して取組を行っている。「ふるさと学習」では、美瑛小と他四校が二つのグループを作り、同じ学習内容を行っている。美瑛町の自然、産業を発達段階に応じて学び、美瑛町の魅力を更に発揮するための取組を考える。「キャリア教育」では、美瑛中と美馬牛中の二校が、木育、宿泊研修などを合同で実施する。生徒が自らの生き方を考える機会を用意している。

三　具体的取組

「ふるさと学習」

【小三】びえいの自然
国立大雪青少年の家職員を講師に招き、説明を受けながら川の体験活動を行い、美瑛町の自然の魅力を体験。

【小四】わたしたちの命
美瑛町、丘のまち郷土学館「美宙」の天文台長であり、理論物理学者の佐治晴夫氏の講演を通して、宇宙の成り立ちから生命の尊さを学び、見識を広げる機会を設定。

【小四】防災の学習
十勝岳は三〇年程に一度、噴火を繰り返している。十勝岳周辺の実地見学や関連施設の見学等を通して、火山に対しての理解を深め、防災意識を高める学習を実施。

【小五】十勝岳がつくる美瑛
十勝岳ジオパークガイドを講師に招き、美瑛の丘がどのように形成されたかを学ぶ。丘の成り立ちの再現実験により視覚的に理解が進むよう工夫。

【小六】美瑛のまちづくり
町長と丘のまち活性化協会の職員を講師に招き、講話を通して行政、観光協会それぞれの立場から美瑛町のまちづくりについて現在の取組を知る。グループワークでは、美瑛町の地域資源を生かし、より魅力ある町にするために必要な「もの」「こと」を考え、町長や観光協会に提案。

「キャリア教育」

【中一】木育
森林組合の職員を講師に招き、森林と環境の関わりを学び、森林を守る森林組合の取組について知る。グループワークを通して、持続可能な生活環境保全のために一人一人ができる取組や、町民に取り組んでほしいことを発表。

【中一】職場訪問
午前中に、旭川市内の工場や製造所を見学し、仕事の内容について学ぶ。午後は、旭山動物園のバックヤードや飼育の現場を見学。

【中二】町長講話
町長の半生を聞くとともに、美瑛町として魅力あるまちづくりをどのように進めているかを学ぶ。グループワークを通して、生徒が考える魅力あるまちづくりについて町長に提案。

【中二】キャリアアップ講座
東京大学公共政策大学院の鈴木一人先生の講演を通して、世界情勢の見方や考え方について知る。

【中二】考えるということ
理論物理学者・佐治晴夫氏が、宇宙の成り立ちについてテレビ出演したときの動画の視聴や講話を通して、生き方について考える。

【中二】職場体験
それぞれの中学校が、町内または近隣の自治体で職場体験学習を実施。

四　おわりに

美瑛町では、各学校がそれぞれの特色を活かしながらも、町内の学校と協働して取り組める教育活動については合同で実施している。そうすることで町内全ての子供が同じ目的に向かって同じ体験をすることができ、学校規模に関わらず同質の教育を受けられるようにしている。昨年度、美瑛町は大妻女子大学と提携し、教育学部の学生を受け入れている。今後、この取組が進めば、新たな取組が生まれ、子供たちに新しい体験をさせることができるものと期待している。

特色ある地域連携と自らを知る語る場の設定

苫小牧市・ウトナイ中　石田憲一

一　はじめに

本校は令和元年四月、発展著しい苫小牧市東部のウトナイ湖に近い郊外の住宅地に開校した。このウトナイ地区の人口増加と通学の安全を確保するために沼ノ端中学校から分離開校された市内一六番目の中学校であり、当時は、道内において公立中学校としては七年ぶりとなる新設校であった。さらに、新学習指導要領の全面実施を二年後に控え、学校教育には人生を主体的に切り拓くための学びが強く求められていた。そうした中、本校では、校則を設けず、生徒自身があるべきルールを考え、それを「ウトナイ宣言」として定め、生徒の自主性や自立心を育む取組を開校時より展開している。また、真新しい校舎をいつまでも保とうと清掃活動に集中して取り組むことや歌声が響く美しい学校を目指した取組など、学校の歴史や伝統を次の世代につないでいこうと生徒たちが自治活動を通して努力している。

二　特色ある本校の取組

1　地域学習塾と連携した取組

開校時よりウトナイ地区にある学習塾の方に、長期休業中の学習相談として学習サポートを依頼し、夏と冬に実施している。実施後には、成果と課題について本校の学力向上担当教諭と塾のスタッフによるミーティングを行い、学習サポートの内容や展開をアップデートしてきた。生徒の中には、毎年毎回参加する生徒もいることから、塾の方々も成長の様子を見ることができ、効果を実感していると聞いている。他に、塾講師の方にも地域・保護者に案内している学校公開日に合わせて本校の教員の授業を参観していただき、意見交流を図った。さらに、塾の代表より、保護者向けへ家庭学習の取組について講演をしていただくなど、地域の子供たちの学力向上や学ぶ環境について共有し、互いに指導力の向上に努める関係づくりができている。

2　防災学習や部活動ミーティング、全校生徒によるスピーチ発表

⑴　自分の身を守る防災学習において、二年生の宿泊研修で厚真町を訪れ、現地視察やＤＯハグなどの体験学習を行っている。三年生の修学旅行では東北地方の被災地を回り、現地ガイドによる臨場感ある震災学習を体験している。これらの学習を生かし、防災学習を二、三年生の学級縦割りの小グループによる座談会形式で、地域の防災について意見交流する場を設けた。

⑵　本校は文武両道が校訓である。ここ数年のコロナ禍にあって、大会や発表会も制限があり、練習の成果を試す機会も激減したことから、生徒が自らの成長と目標を確認する場として各部活動の交流の機会を設けた。時期は三年生が引退し、新体制で臨む頃、まず各部活動の次年度の目標や個人目標を確認し、部活動に参加している全生徒で小グループを形成し、各部の取組や目標を発表し合う座談会を行った。自分が取り組む部活動の様子を感想を交えて発表し、交流する取組である。

⑶　文化祭で学級代表によるスピーチ発表を行った。各学級において生徒全員が各々、日々感じていることや自分のこと、将来のことを発表し、学級代表を投票で決め、全校生徒の前で披露した。

三　終わりに

本校では、コロナ禍の影響から生徒が日常の授業や諸活動等、様々な場面で指示待ちの受け身であることが課題と感じた。生徒の想いや自分のことを表現する機会を設けることで責任をもち、行動することの大切さを教職員が共有し、これらを進めた。座談会やスピーチ発表では上級学年のリーダー性と高い能力を全校生徒で共有し、生徒の自己肯定感や自己有用感も感じとれる場面を得られたことは大きな成果と言える。今後は保護者や地域を巻き込み、生徒の成長につなげる取組を発展させていきたいと考えている。

心豊かで主体的に生きる力を育む「はぼまい学」

根室市・歯舞学園　南　靖志

一　はじめに

本校は、本土最東端根室半島納沙布岬まで数ｋｍの場所に位置し、「日本で一番朝日に近い学校」として、平成二十五年に近隣の四つの小学校と一つの中学校が合併し歯舞小中学校として開校した後、令和二年に義務教育学校として新たにスタートした。

「主体的に学び、仲間との協同を通して人間性を高め、未来をつかむ力の育成」を学校教育目標に掲げ、歯舞校区学校運営協議会の指導・助言を基に、歯舞漁業協同組合をはじめとした各種団体等の協力を得ながら、地元の産業や自然環境等様々な教育資源とした総合的な学習の時間「はぼまい学」を実践している。

二　九年間を通して生きる力を育む「はぼまい学」

1　取組の概要

子供たちの発達段階を考慮し、初等部（一～四年生）には、体験活動を通して「知る」、中等部（五～七年生）には、地域を題材とした学習を通して「学ぶ・考え合う」、高等部（八・九年生）には、既習事項から「発信する」ことで、心豊かで主体的に生きる力を育んでいる。

2　具体的な取組（一例紹介）

（一）ゴメ島探検（三・四年生）

一・二年生時に実施する、「アサリ掘り活動」を経て、校区にある大潮の際に陸続きとなる小島に赴き、魚介類の採取活動を通して、地域の主産業であり、自分達の父母や祖父母が営んでいる漁業を「知る」。

（二）歯舞湿原学習（六年生）

令和四年度に認定された市の自然文化財「歯舞湿原」について、北大教授や市学芸員を講師に迎え、実地研修や文化財会議出席を通して地域の自然や歴史を「学ぶ」と共に、近年多く設置されてきた太陽光パネルとの共存方法について「考え合った」。

（三）地元ＰＲ活動（八年生）

宿泊研修の活動の一つとして、地元の「歯舞昆布」を使用した歯舞昆布しょう油を釧路空港及びＪＲ釧路駅に赴き、観光客に配布しながら、既習事項より学んだ地元の良さを「発信する」。

（四）歯舞クリーンアップ作戦（全学年）

観光地でもある納沙布岬や地元歯舞漁港周辺のごみ拾いを全学年で実施することで地域を愛し、感謝する心を育む。

三　終わりに

「今回の歯舞湿原学習で、私たちの住む歯舞が世界的にも貴重な場所であるということが分かりました。これからは地域に生息する鳥や花なども勉強したいです。」（六年生女子の感想文より一部抜粋）

今後も地域の皆さまのお力を借りながら工夫改善を行い、学校目標である、「主体的に学び、仲間との協同を通して、人間性を高め、未来をつかむ力の育成」に精進していきたい。

地域の特産を知り、ふるさとの深みにふれる体験活動

北見市・常呂中　佐藤拓也

一　はじめに

北見市常呂町は、オホーツク海とサロマ湖に面し、豊かな山林に恵まれた土地柄である。農業と漁業を基幹産業としながら、社会教育（社会体育）活動も盛んな町である。特に冬季スポーツの「カーリング」は、八〇年代に町民が町のスポーツとしてカナダから導入し、町民の手で独自発展させてきた。さらにオリンピック代表（『ロコ・ソラーレ』）を輩出し、メダル獲得を実現するまでに至っている。

二〇〇六（平成十八）年に常呂町は北見市と合併し、本校は北見市立常呂中学校となった。全校生徒数はもはや一〇〇人は越えず、なだらかに減少している。少子化が進む中、将来の担い手である子供たちをどう育てるかは、地域にとっても大切な課題である。

このようなことから、地域学習として歴史や文化を知ることのみならず、地域の大人たちが常呂町の発展に向けて、どのように寄与しているかを知ることも地域学習に一層の深みを与えられると考えている。

二　本校の取組

1　新たな特産を目指す『ところピンクにんにく』学習のねらい

ＪＡところと生産者による『ところピンクにんにく』の普及活動が行われている。一般的なにんにくよりも味や香りが濃厚で、ピンク色がかったにんにくの種を『ところピンクにんにく』と銘打ち、新たな特産品として広く発信する試みである。二〇二二（令和四）年には、『ところピンクにんにく』の名称は農林水産省からＧＩ認定（地理的表示保護制度の認定）を受けている。

これは大人たちによる地域発展を願う取組とも言えよう。子供たちにとっても、単なる地域の特産物の学習にとどまらず、大人たちの地域に託す思いを知ることで、ふるさと学習を深めることができる。

これらをねらいとした学習を、第二学年の総合的な学習の時間において四年前から実施している。

2　ＪＡと生産者と協働した授業

『ところピンクにんにく』のＪＡ担当者と生産者代表がふるさと学習の講師となり、『ところピンクにんにく』についての学習を行っている。元来、常呂町の在来種であったこと、オホーツク沿岸の環境がピンクにんにくの栽培に適すること、生産者自身が新たに手掛ける作物としてピンクにんにくを選んだいきさつなど、『ところピンクにんにく』が生み出されるまでの経緯が学習される。

3　にんにく生産体験授業

生徒たちは別日に、『ところピンクにんにく』生産者の畑で体験学習を行っている。これまでには、にんにくの生長を促すための「にんにくの芽」を摘み取る作業や、収穫したにんにくを出荷するために行う「にんにく割り」作業など体験してきた。

炎天下での大変な作業となることもあるが、その分、日ごろの生産者の苦労と努力を身をもって知ることになった。細かな手作業とにんにくの強い香りが、体験として記憶に刻まれたことであろう。

三　大人が託す思い

人口減少、人口流出、後継者不足など地域が抱える問題は深刻である。新たな名産品を生み出す試みは、子供の未来のため土地を衰退させまいとする大人たちの責任をも感じさせる。本学習には、大人たちの強い思いと願いが込められているが、生徒たちにとっては四～五時間程度の授業にしか過ぎない。その中で大人たちの思いを十分に伝えるのは難しい。しかしながら、短い時間の体験が、自ら地域を考えるようになったときに、ふと思い起こされる記憶となればよいと考えている。

四　おわりに

本論考は、大人が主体的に自らの地域への思いと、それに伴う活動を子供たちに伝達するという内容であり、子供よりも大人を主語にしているかもしれない。しかしながら、これら大人たちの試みは、「ふるさとを愛する大人のモデル」を示すことにもなっている。大人がモデルを示すことは子供たちの心理発達過程において大変重要なことである。小さな体験活動の記憶とともに、あるべき大人としてのモデルが、子供たちに内在化されることを願っている。

内在化された大人像は、子供たちの将来の選択肢になるのである。

特集

テーマ

学校教育の今日的な課題から

～更なる学校力の向上を目指して～

1

全市で取り組む「社会的・職業的自立に向けたキャリア教育」と進路指導の充実

～「帯広っ子」の主体的な自己実現を目指して～

帯広市立緑園中学校　大泉昭人

2

豊かな心を育む学校の環境づくり

～生徒の内面の把握と内発的動機付けを高める教育活動の推進から～

千歳市立勇舞中学校　上田充士

3

健やかな体の育成の推進

～栄養教諭と連携した食の推進の充実を通して～

せたな町立北檜山中学校　酒井豊志

全市で取り組む「社会的・職業的自立に向けたキャリア教育」と進路指導の充実

～「帯広っ子」の主体的な自己実現を目指して～

帯広市立緑園中学校　大泉昭人

一　はじめに

帯広市は、北海道東部の十勝地方のほぼ中央に位置する、人口約一七万人のまちである。明治十六年に本格的に開拓がはじまり、現在は農業を主要産業とする十勝地方の中心地であり、農産物集積地、商業都市としての役割を担っている。本市を代表するものは、開拓の歴史・文化を今に受け継ぐ「ばんえい競馬」や「豚丼（豚食文化）」、植物由来のアルカリ性「モール温泉」、「フードバレーとかち」のもと、美味しいスイーツ、野菜、乳製品、肉製品など、数えきれない。開拓の歴史や文化、豊かな自然、食があふれる本市で育つ子供たちは、先人から進取の精神を学び、地域の様々な世代、職種の方から生き方のヒントを学んでいる。本稿では帯広市が取り組むキャリア教育と進路指導について、整理・報告させていただく。

二　研究について

1　帯広市校長会の研究体制

帯広市校長会は、教育課程委員会、生徒指導委員会、学校経営委員会に分かれ、研究主題「ふるさとに学び、新しい未来を切り拓くたくましい人間を育てる中学校教育」の実現に向けた研究を推進している。今回は、生徒指導委員会より、「社会的・職業的自立に向けたキャリア教育と進路指導の充実」について、十一月に行われた「帯広市校長会学校経営研究協議会」での提言をもとに紹介する。

2　キャリア教育

「キャリア教育」という用語が初めて登場したのは、平成十一年の中教審答申においてで、これを受け、平成十四年にいわゆる「四領域八能力の育成」モデルが示された。平成二十三年には、生涯を通じて育成される能力の観点に立った能力論が各界（内閣府・厚労省・経産省）から提唱され、これらを参考としつつ、整理したのが「基礎的・汎用的能力」だった。現在、一人一人の社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を育み、生徒が自己の在り方・生き方を考え主体的に進路を選択することができるよう、組織的且つ計画的な進路指導を行うことが求められている。（図1）

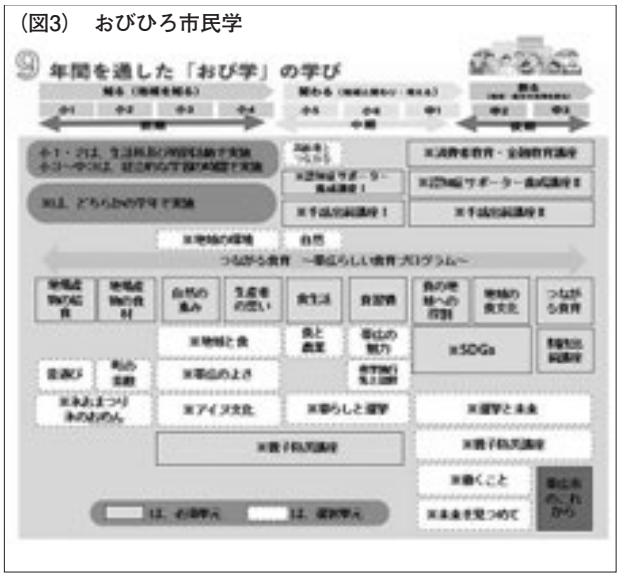
三　帯広市のキャリア教育と進路指導

1　基礎的・汎用的能力の育成（図2）

(1)　生き方学習

［おびひろ市民学］郷土愛を育み、より良い地域作りに関わる子供を育てる目的で、小中九年間で必須単元一八時間、選択単元一七時間を系統的に学習している。（図3）

（図3） おびひろ市民学

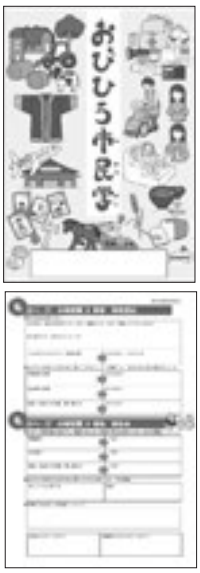


（図2） 基礎的・汎用的能力

能力	具体的能力	具体的教育活動
①人間関係形成・社会形成能力	・他者の個性を理解する力 ・他者に働きかける力 ・コミュニケーションスキル ・チームワーク ・リーダーシップ	行事、意見発表、学級活動、異学年交流、生徒会活動、特別活動、部活
②自己理解・自己管理能力	・自己の役割の理解 ・前向きに考える力 ・自己の動機付け ・忍耐力、ストレスマネジメント ・主体的行動	行事、意見発表、学級活動、部活
③課題対応能力	・情報の理解・選択・処理 ・本質の理解、原因の追及 ・課題発見、計画立案、実行力 ・評価・改善	職業調べ、職場体験、上級学校調べ・説明会・体験入学、総合的な学習の時間
④キャリアプランニング能力	・学ぶこと・働くことの意義や役割の理解 ・多様性の理解 ・将来設計、選択、行動と改善	おび学、学級活動、生徒会活動、職業調べ、職場体験、上級学校調べ・説明会・体験入学、進路学習、総合的な学習の時間

［キャリアパスポート］市内小中学生は「おびひろ市民学」だけでなく、自分が残しておきたいものを自由にファイルにつづって、自分だけの「キャリアパスポート」を作っている。ここには、おびひろ市民学と学年毎の「私のページ」があり、それぞれ自分の成長を記録している。心に残るふるさとや自分のことを残して、振り返ることで成長を確かめるためのものとしている。（図4）

（図4）キャリアパスポート



［意見発表、各交流］全市で取り組んでおり、生徒は自己理解や他者理解を深め、他者への働き掛けによるコミュニケーションスキルを体得している。意見発表は、疑問や葛藤に対して「自分や周囲がどうしたらよいのか」を考え、自分たちの在り方や生き方を中学生の視点で発表し、思いを言葉で伝え合う活動として全校生徒で行っている。また、異学年・異校種・地域交流は、校内の縦割りや全校での活動、園児・児童・高校生・大学生・地域住民と合同で行う学習や施設訪問、ボランティアや行事など、異年齢の人との交流を通して、自己有用感の高まりや役割の自覚、社会参画の意識や多様な生き方を学ぶ機会となっている。

(2) 協働的な学習

［体育祭、文化祭等］練習するほど上達する団体種目を意図的に取り入れ、チームワーク、役割の自覚、多様な他者と協働する楽しさを学ぶ機会としている。

［総合的な学習の時間］食、農業、郷土、防災、福祉、職業をテーマにした探究的な学習や、ディベート授業、卒業論文発表など、各校の特色を生かした学習を展開している。取組を通して、課題対応能力や人間関係形成・社会形成能力を向上させる機会としている。

(3) 職場体験等

［職業調べ、職場体験］取組を通して、働く意義や職業観、課題対応能力やキャリアプランニング能力を向上させる機会としている。職業調べは、職業人による講話や、ＩＣＴ等を活用したインタビューにより、職業についての基礎的な知識と技能、自立に向けて必要な資質・能力について学んでいる。また、職場体験では、各事業所（学校規模により九～六四事業所）に分かれ、少人数（一～数人）で二日間実習している。どの事業所も中学生をあたたかく受け入れてくれ、生徒は実習を通して、主体的に進路を選択する意欲を高めている。

(4) 上級学校調べ等

［上級学校調べ、講師招聘の説明会］両方またはどちらかの取組を通して、生徒が将来の自己実現に向け、主体的に進路を選択する情報収集の機会としている。

［体験入学、体験入部］上級学校主催の体験入学、体験入部に参加することで、生徒は中学校卒業後の生活をより具体的にイ

メージし、主体的に進路を選択するための更に必要な情報を集める機会としている。

(5) **進路指導**

[進路学習] 生徒は入試制度、上級学校で求められる資質・能力、受検・面接等の具体的な方法など、進路実現に必要な情報について学習するとともに、進路選択にあたり、面談等も経て、主体的に志望動機を考え、自己決定している。

[志望事由等の提出、面接練習] キャリア教育で培った自己理解、生き方や役割を自分の言葉で文書や面接で表現することで、覚悟につなげている。

(6) **その他**

[部活動] 市の加入率平均は七五%である。志を同じくする集団で、より高い目標に向かって主体的に活動する中で、自己理解、他者理解、チームワーク、役割の自覚、忍耐力やストレスマネジメントを向上させる機会となっている。競技力向上はもとより、人間的成長を目指した活動により、学校生活の充実や集団の活性化につながっている。

〈各校の特色〉

九年間を見通した「おびひろ市民学」や「大空市民学」、特色あるテーマを設定した「食の学習」「郷土学習」「防災学習」、職業観・勤労観を学ぶ「未来創造授業」「職業人講話」「職場体験」、その他「つながるタイム」「ディベート授業」「卒業論文発表」などの取組があり、各校で体験・交流・協働を重視し、地域に密着した探究的な学習を計画的に実施している。

〈成果と課題〉

(1) **成果**

・子供の変容としては、進路への意識の高まり、自己認識の向上、「自立するための力」や「どう生きるか」考えを深める生徒が増えた。

・指導体制・内容としては、「おびひろ市民学」を含めたキャリア教育の充実、積極的な外部講師の活用、直接関わり合いながら学ぶ機会の大切さの再認識、異学年・異校種・地域交流、九年間を見通した教育課程の実施などが挙げられる。

(2) **課題**

・職場体験における事業所の確保、中高間の交流促進、職業観と進路選択が結びつかない、小中の系統性の見直し、教育課程のブラッシュアップなどがあげられる。

2 円滑な進路指導

(1) **進路指導情報交流会（市教委主催）**

進路指導の在り方と進路指導資料等について、各校の進路指導を円滑に進めることを目的に、市中学校の校長会、教頭会、進路指導主事、市教委、合計一八人で組織して活動している。具体的には、北海道教育委員会「道立高等学校入学者選抜の手引」や、各種通知を複数体制で確認し、質問は事務局・市教委を経由して局に問い合わせ、市内で共有している。また、私立高校等の個別の案件や、その他の進路資料の交流も行っている。

(2) **進路指導連絡協議会（校長会主催）**

進路指導の資料となる入試情報の蓄積・活用や進路指導状況を交流している。

(3) **中高特連絡協議会（校長会主催）**

十勝管内の中学校・高等学校・特別支援学校の校長で組織し、相互の連携・協力及び研修を目的に、教育課程・生徒指導・進路指導についての合同研修や情報交流、進路事務等の効率化を推進している。

四 まとめ

○市内小中学校で、「おびひろ市民学」を通して九年間を見通した計画的なキャリア教育が進められ、地域の教育資源を活用した学習が行われている。

○体験的・協働的な学習を大切にし、生徒が基礎的・汎用的能力を体得する機会を効果的に設定している。

○日常はもちろん、行事、手厚い進路指導、部活動等、密な関わりから生まれる強い信頼関係により、各校で生徒・保護者と進路実現に向けた協力体制が確立されている。

○帯広市では、進路指導に関わる交流を行うシステムがあることで、有益な情報共有、ミスのない進路業務を推進している。

五 おわりに

全国学力・学習状況調査の生徒質問紙において、「将来の夢や目標を持っている」と回答した帯広市の生徒の割合は全国よりも高い。このことから、各取組の積み上げが、一定の成果をあげていると考えられる。今後も、小中高連携を更に進め、一二年間を見据えたキャリア教育の充実を推進していく。

豊かな心を育む学校の環境づくり

～生徒の内面の把握と内発的動機付けを高める教育活動の推進から～

千歳市立勇舞中学校　上田充士

一　はじめに

本校のある千歳市は、石狩振興局の南端に位置し、年間乗降客数平均が約二、〇〇〇万人を数え、北海道の空の玄関と呼ばれる新千歳空港がある、人口約九万八、〇〇〇人の都市である。また、支笏湖など雄大な自然に囲まれており、五〇年前よりアラスカ州アンカレジ市、鹿児島県指宿市と姉妹都市提携を結び、毎年児童生徒の交流を続けている。

千歳市には、小学校一六校、中学校七校、小中学校二校が設置されている。勇舞中学校は、千歳市の北側ＪＲ長都駅の東約一ｋｍに位置しており、敷地の東側には自衛隊走軌車両が通行する南二八号通りがあり、住宅地と畑地との境界となっている。

本校は、平成二十四年に前年度二七学級で九三〇人を超えていた富丘中学校より分離する形で開校した。開校時は一三学級四二五人だったが、宅地化が更に進み一二年目となった今年度は、二一学級七六六人にまで増加している。現在、教室スペースの関係で特別支援学級の開設には至っていない。

開校理念を「きらやかに　しなやかに」、教育目標を「瞳をきらめかせ　希望に満ちた未来を拓く」重点目標を「豊かな心に根ざした　確かな学力」と設定し、様々な教育活動を積みあげてきた。

二　本校の特色について

【育成を目指す資質・能力】
○将来にわたって生きる知識・技能
○自分の考えをまとめ・伝える力
○共感的人間関係を育む態度

【めざす生徒像】
○規律がありさわやかな挨拶をする生徒
○思いやりの心をもち、協力して活動する生徒
○意欲的に学習に取り組む生徒

【特色ある教育活動】
○朝読書の実施
表現力の育成と静寂からスタートする安定した校内生活維持のため、通年の朝読書に取り組む
○ノーチャイム
落ち着いた校内環境と主体的な行動を育み、潤いのある学校生活につなげるため、ノーチャイム・ノー放送に取り組む
○三分前学習
落ち着いた学習環境の整備と自主的に学習に取り組む姿勢が身に付くよう取り組む
○ＩＣＴの活用
電子黒板・タブレットＰＣ・デジタル教科書などＩＣＴの有効活用を図り、学力向上に取り組む
○小中連携・一貫教育
北陽小学校と、令和四年度開校したみどり台小学校との連携・一貫教育の推進に努める

特に、特色ある教育活動については開校以来継続しており、取組の成果として、生徒自らが時間を管理し、自主的に行動する習慣が育っていることが挙げられる。また、高い規範意識と規律も身に付いており、生徒は落ち着いた学習態度・生活態度で学校生活をおくっている。

三　豊かな心を育む

開校時からの重点であった「豊かな心」が

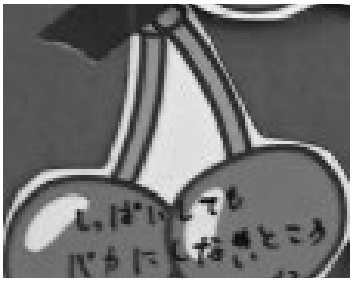
生徒に根ざしているか、今年度教職員対象のアンケートを実施した。

1　教職員が生徒に豊かな心が育っていると感じる場面

○行事で団結している様子
○目を見て大きくうなずいて話を聞く様子
○靴をそろえる、使用したものを元に戻し整える習慣が身に付いている場面
○授業で困っている生徒に対して優しい声かけや手助けをする場面
○部活動での挨拶・応援・準備の場面
○悩みを抱えている級友について教師に相談する生徒や友人関係の好ましい変化
○保健室への来室の減少
○校外のゴミを拾ってくる場面

2　生徒の豊かな心が育つことにつながっていると考えられる取組

○学校や学年をより良くしようとする生徒主体の委員会活動
○学年部と養護教諭の細かな連携
○部活動での人間関係の構築や挨拶
○教職員の明るい挨拶と、日常的に適度な距離感で生徒と接する姿勢
○大声で指導したり、頭越しに押さえつけたりしない教職員の態度
○一年部の「ほめほめの木」のような、他者の良いところを褒め合う取組



ほめほめの木のメッセージの中には、「担任の先生が生徒のためにいつも頑張ってくれている」との記述もあり、担任と生徒との信頼関係の構築に気づくこともできた。

他にも、アンケート外で次のような手紙を受け取った。

先日、私たちは校舎前の草刈りをしておりました。同時間、二年生が三人花壇の草取りをしており、エンジンがかかっていないときに、「いつもありがとうございます」と声をかけてくれました。

いろいろな子供たちがいる中、今回は感激し、先生方の「生徒に思いやりの心と人間性を育む」人間力が、心を育んでいるんだと思い、私も力をもらいこの夏の暑さを乗り切っていけそうです。

教職員間では、生徒の「できていないこと」「身に付いていないこと」「課題と感じていること」などの交流は日常的に行われるが、心温まる話などの交流を意図的に実施することは教職員の気づきややりがいにもつながり、重要性を改めて感じた。

四　生徒の内面を把握する

1　ハイパーQU検査の実施と分析

千歳市では、児童生徒同士が認め合い高め合える環境を整えることを目的に、全校でハイパーQU検査を年二回実施し、個々の生徒の状況や学級の親和度を把握することで集団作りに役立てている。全校で親和的な学級一〇〇%を目指し、学級生活満足群を七〇%以上にすることを目標としている。本校は、現在その目標値を大きく上回る八〇%台半ばとなっている。また、生徒一人一人の内面を把握できるよう、六月に分析・活用に関する校内研修会を実施している。

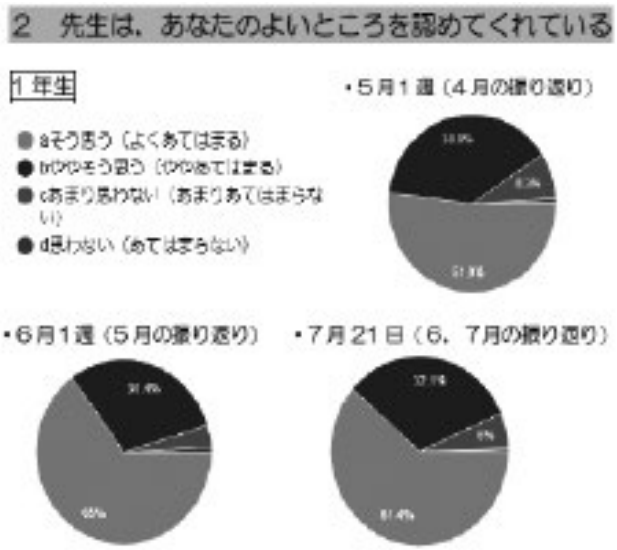
2　毎月の生徒アンケートによる内面のタイムリーな把握と発達支持的生徒指導

本校では、毎年七月と十二月に生徒アンケートを実施し、生徒の意識の変容を分析し

指導に活用してきた。一方で、過去の分析からは、十二月のアンケートの数値が毎年下がる傾向にあることが分かっている。このことは学校行事や部活動の大会等の時期と関係があるのではないかと考え、今年度は項目を絞ったアンケートを毎月実施している。

【毎月の生徒アンケート項目】
①自分には良いところがあると思う
②先生はあなたの良いところを認めてくれている
③充実した学校生活を送ることができている
④生徒の間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている
⑤学校生活に疲れている

特に、①の自己肯定感を問うアンケートの全校平均は、「そう思う」が約四六％、「ややそう思う」が約四〇％と、高い結果となっている。また、②のアンケート結果からも、生徒の教職員への信頼感が高いことがうかがえる。本校では、登下校時、朝・帰りの学活や授業間・昼休みには、職員室に管理職と事務職員しかおらず、全教職員が生徒の観察や対話を行っている。このような地道な取組が、教職員と生徒との好ましい関係づくりと密接につながっていると考えられる。他にも、否定的な回答をする生徒や、回答の急激な変化を捉えることで、今まで以上に生徒の内面の変化に気づくことができるようになった。



近年、教育活動全体を通したウェルビーイングの向上が大切であると言われている。教職員間はもちろん、教職員と生徒との関係においても、親和的な人間関係の中で指導から支援へ、ティーチングからコーチングへ軸足を移していくことの重要性が増している。本校では、生徒指導や部活動指導の場面でも、大きな声を張り上げて指導する姿を見ることがない。毎月のアンケートを通して、生徒の「自分には良いところがあり、認められ、大切にされている」という内面の変化をタイムリーに把握し、自己肯定感や自己存在感の涵養など、発達支持的生徒指導に全教職員が努めている。また、自分が他者のために役立った、認められたという自己有用感を併せて育みたい。

五　おわりに

本校では、「生徒の内発的動機付けを高める教育活動の推進」を今年度の重点の一つとして取り組んでいる。「誰かに褒められるから頑張る」「誰かに指導されるから頑張る」のではなく、生徒一人一人が、自分と向き合い、自身の個性や良さに気づき、伸ばしていくことのできる人になるような支援を大切にしている。

近年の国際的なイベント等で、日本の選手やスタッフ、観客などの礼儀やマナーについて好意的な報道に触れることが多い。今後、部活動の地域移行が進むことで、生徒の心の成長にどのような変化が起こるかを把握するとともに、学校全体で進める道徳教育の充実に努める。

また、本校生徒の約六％、五〇人近くの不登校生徒については、毎月のアンケートの回答も一部にとどまる。誰一人取り残されず全ての生徒の可能性を引き出す教育を推進するために、不登校生徒への支援体制の構築は、本校の大きな課題でもある。今後、学校風土の「見える化」を通して、生徒も教職員も安心して学べる、安心して働ける環境づくりに取り組んでいく。最後になるが、職員間の親和的な関係が、本校の最大の自慢であり、財産でもある。

健やかな体の育成の推進

～栄養教諭と連携した食の推進の充実を通して～

せたな町立北檜山中学校　酒井豊志

一　はじめに

本校は、日本海に面した渡島半島北部に位置するせたな町の三つの中学校のうちの一つの中学校である。せたな町は、平成十七年九月一日に、大成町、北檜山町、瀬棚町の三町が合併して誕生した比較的新しい町である。このときに学校の統合も進み、現在生徒数は一〇〇人、五学級（特別支援学級含む）全てが一クラスという小規模の学校である。檜山は、人口減少が激しく、複式学級の増加や統合問題をよく耳にする。その状況下にあって、本校の生徒数も緩やかな減少をたどっている。それは、町内の他の二つの中学校に至っても同様で、著しく生徒が減少し、学校間での合同学習等工夫をしながら学習する機会も増えてきている。

加えてその傾向は、町内の小学校も同様で、昨年度一つの小学校が統合となり、三つの小学校になっている状況である。また、この状況は檜山の学校全てにも通じていて、本町以上に減少率も高くて深刻な課題になっている。

二　本校の様子（全国体力・運動能力、運動習慣等調査等より）

1　運動能力

令和四年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査からは、男子は、全ての項目で全国平均を大きく超えている。女子は、五〇m走と立ち幅跳び・握力以外は、全て全国平均を超えている。体力合計点では、男女ともに全国平均点を大きく超えている。

2　体格

男女の身長・体重の平均も全国を大きく超えている。しかし、軽度肥満度と判定される割合は男女合わせて一〇％に満たない。つまり、すらりとしているように見えるが、がっしりとした体つきの生徒が多いということになる。

3　質問紙

質問紙に関しては、全国と状況はあまり変わらないか、下回る項目も少なくない。つまり、運動する環境や意識には、全国とは大差ない状況である。

三　今年度の食育指導についての位置づけ

1　体力向上プラン

健やかな体づくりに対しては、平成二十九年度に、檜山全体で体力向上プランの様式を共有し取り組む活動をしている。この実践は、全日中の大会及び全道大会で、檜山の実践を、私が発表させていただいたとおりである。その内容は、現在まで引き継がれている。このような校長間の連携意識の強さは、檜山の良い面であると考える。

2　食育の視点

昨年度から、運動能力や生活習慣の改善に加え、本校は町内の学校の栄養教諭の拠点校となっていることから、食育に対して視点を当て、学校経営の柱として、組織的な取組をすることを試みた。加えて、栄養教諭は本校のみだけではなく、町内の学校にも派遣することを踏まえ、町民の子供たち・保護者、及び、町民も視野に入れた範囲に拡大した「食育」の取組に挑戦してみた。そして栄養教諭と連携を強化しながら、検証改善サイクルを行い、学校と地域が連携した、健やかな体づくりにつなげていこうと試みた。

四　食育の推進

1　重点教育目標

学校教育目標や学校評価を踏まえ、重点教育目標を「合言葉は自ら～関わる・学ぶ・振り返る・見とおす～」とした。そして、生徒の主体性を重視する取組を、教育課程に横断的に取り入れるようにした。また、郷土愛を育む観点から、地域とのつながりを重視した教育活動も、グランドデザインに明記し、

学校運営協議会での承認や熟議を通し、地域人材を積極的に活用することを視野に入れ、学校経営を推進することを試みた。

2　学校経営の位置づけ

①体づくりの視点

・全国体力・運動能力・運動習慣等調査の体力的な面を支えるものとして、体を動かすことに重点を置いて取り組み実績を図ってきた。

・その一方で、体をつくっている土台は食生活・食事内容にある。給食の残食量が少ない・三食をきちんと摂取している生徒の多い学級は、健やかで健康で落ち着きのある生徒が多い傾向がある。そのことから、栄養教諭と連携し、具体的な学校運営の内容を考え、学校組織として取り組んでみた。

②学校運営の組織的な取組内容

・給食指導や食育を通し、望ましい食習慣の定着

・地場産を利用した食への感謝の気持ちの醸成

・学校と家庭・地域が連携し、食に関する正しい知識と望ましい食習慣の育成

・地域素材を生かした「ふるさと学習」を通じた探究的学習の充実

・アレルギー反応を有する子供たちへの適切な対応。

3　具体的な食育の推進

料 理 名	R4残 食 率
かぼちゃとなすの揚げ煮	0
フルーツ白玉	1
フルーツゼリーあえ	2
ビビンバ	3
杏仁フルーツ	3
大豆と鶏肉のトマト煮	4
ドライカレー ご飯込み	4
みそおでん	4
焼肉丼	5
ポテトとベーコンソテー	5
フルーツフルーチェ	5
マーボー豆腐	5
じゃが芋そぼろ煮	5
中華あんかけ	5

①残食の記録・見える化（月二回）

・残食量や献立別のランキングを具体的数値で継続的に記録をする。

・グラフ等で表現することで見える化を図る。そのことにより、生徒や保護者が分かりやすく身近な内容へと意識できるように工夫した。

・生徒会専門委員会の活動の一環として、生徒を通してその結果を配布することで、生徒自らに課題意識をもたせ、行動変容を図るようにした。

②その結果

・昨年度は、残食量は二〇％を超えることも数多くあったが、徐々に残食量は減り、一〇％半ばになってきている。

・専門委員会の活動と位置づけられ、結果が良好になっていることで、生徒自らの活動にも活気が出てきている。

③給食町民向けのアプリ（毎日更新）

せたな町独自のアプリに学校給食の情報を配信するコーナーを設置し、毎日給食の写真や内容を発信している。また、食育の視点から、町民にも知ってほしい内容の情報発信にも努めた。

・給食だよりの発行（月一回）

年間を見通して計画的に情報の発信に努めた。例えば、食物アレルギーの原因や情報、食材カロリー量、使用されている地場産物の紹介、減塩の呼びかけ、生活習慣と食事の紹介、「こ食」（孤・子・個・固・粉・小・濃という七つの「こ」）の紹介等。

④地場産の活用その一

（地場産サケを活用した給食）

・町内の学校に向け、栄養教諭と教育委員会が連携し、ひやま漁協瀬棚支所

鮭定置網部会から、鮭を無償提供していただいた。

・その食材を活用し、令和三年度は鮭フライとして給食に提供、令和四年度は鮭フライと生産者を招いた交流給食の実施をした。生徒アンケートからは、高い評価を受けるとともに、残食量も非常に少なかった。

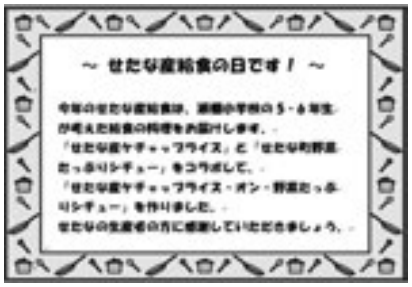
⑤地場産の活用その二（調理実習）

・栄養教諭と家庭科担当者との連携による調理実習を実施。内容としては、北檜山中二年家庭科調理実習として、エコクッキングの授業を行った。具体的には、地元の方が鮭を丸ごと一本さばく過程を見学し、その後、切り身はムニエル、中骨と頭は郷土料理の三平汁、皮はカリカリ焼きを作る調理実習を実施した。

⑥献立の工夫

・町内の子供たちから、地元食材を生かして考案された給食メニューを、せたな産給食の日に、全町の子供たちの給食として実現化した。また、予定献立表の中にも詳細を記載し、家庭へも周知した。

・具体的には、「せたな産ケチャップライス」と「せたな町野菜たっぷりシチュー」の二つのメニューを合体させた、「せたな産ケチャップライス・オン・野菜たっぷりシチュー」や「せたなふるさとカレー」を提供した。その内容は、町民向けアプリでも配信し、広く町民に紹介することができた。



・その結果

この取組は、非常に生徒からも大きな反響があった。味も非常に美味しく、残食量も少なかった。また、当該小学校には、高い評価やお礼の電話があり、考案した子供にとっても、食育に興味をもつきっかけになった。

五　今後に向けて

次のことについて、今後も粘り強く継続して取組をしていきたいと考える。

1　生徒の意識の変化

①地産地消、子供たちの意見を取り入れたメニュー、栄養教諭の専門的見地からの授業等で、給食時間に子供たちから食に関しての発言が多く飛び交うようになってきている成果の共有の継続。

②残食等に関しては、専門委員会活動の一環として活動することにより、生徒自ら課題意識をもち、良い状況で推移しているので、その継続。

2　職員の意識の変化

①ミドルリーダー会議では、給食をおいしく食べるための課題を出し合い、時間の取り方や給食時間の形態の交流を今後も推奨。

②①を受け、職員会議では、給食の時間帯・食事をする時間の保障、黙食から会話のある楽しさを感じ取ることのできる時空間の保障、準備や後片付けの工夫などの提案の推奨と実行。

3　家庭・地域との連携

①食の教育は、学校教育だけで子供たちに定着することは難しい。栄養教諭が拠点となり、各学校共通の教材活用、お便りの充実と発信、アプリの活用等で、家庭や地域でも食の大切さを理解し、意識を高めていけるような粘り強い取組を継続。

②せたな町は、良質な食材の宝庫である。そのことから、郷土愛の育成に向けた教育をしていく取組にも、地域の人材や役場との連携強化を図り、組織的に取り組むことを継続していく。また、そのことを町内にアナウンスしていくことで、より自分の住んでいる町を好きになってくれるきっかけとなれるよう粘り強く取り組んでいく。

今年の道中

第六四回 北海道中学校長会研究大会 小樽大会を終えて

札幌市・山鼻中　遠山博雅（研修部長）

一　はじめに

第六四回北海道中学校長会研究大会小樽大会は、大会主題「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を創り出していく日本人を育てる中学校教育～歴史の街小樽より、未来を創る子供たちを育てる～」を掲げ、九月二十二日から二十三日の二日間、四年ぶりに会同して開催された。

令和二年度からの四か年継続研究の三年目として、大会主題の実現に向けて地区を超えた「気づき」や校長同士の「心のつながり」を強固にする大会であった。開会式で、北海道中学校長会の森田聖吾会長は「全日中教育ビジョンに示されているとおり、学校こそが教育改革の現場であり、子供を主語にする学校をつくるために、全ての教師が責任と誇りをもって働ける環境を各地区校長会と連携しながら、整えていかなければならないと思っております」と挨拶された。

岡本清豪大会実行委員長からは、大会開催にあたっての熱い願い、参加者への歓迎と関係各位への謝意、そして大会成功を期する御挨拶があった。

二　全日中会長情勢報告

全日本中学校長会会長齊藤正富氏からは、「コロナ禍三年間の様々な教育界の施策」「学び続ける教員の実現と教職の魅力の向上と質の高い教師の確保」「全日中教育ビジョン」を中心とした教育情勢について説明をいただいた。

三　分科会

午後からは、五つの分科会に分かれ、各研究主題のもと提言が行われ、研究の視点に基づき熱心な協議が行われた。

【第一分科会】「社会に開かれた教育課程」の実現

◎研究の視点　学校や地域の特色を生かした教育課程の編成・実施

1　地域等の外部の人的・物的資源を有効活用した特色ある教育課程の編成・実施

2　家庭や地域社会との連携・協働を深める教育課程の編成・実施

◎提言者　苫前町立苫前中学校　西山　智章　校長

視点1については、家庭や地域との学校課題解決への取組が紹介された。視点2については、自分たちが住む地域の魅力を、修学旅行の訪問先へ紹介する取組を例に、地域の人材・物的資源の有効活用、外部人材と連携した教育活動の推進について発表があった。グループ協議では、高校や大学との連携を通したキャリア教育、地域と連携した防災教育、地域社会との様々な連携の在り方についての情報交流が行われた。

【第二分科会】　新たな時代に求められる資質・能力の育成と学習評価の充実

◎研究の視点　保護者、地域と連携した開かれた学校経営

1　学校・家庭・地域が一体となった学力向上

2　学校評価を活用した学校改善の工夫とその充実

◎提言者　新得町立富村牛小中学校　石丸　揚一朗　校長

視点1については、学校運営協議会や地域学校協働本部が中心となった取組、外部団体と連携した取組、「学校・家庭・地域が一体となった学力向上」の取組における校長の役割について発表があった。視点2については、アンケート調査を基に、連携状況の把握、学校改善プランやロードマップへの反映、校長の役割について発表があった。グループ協議では、コミュニティ・スクールを中心とした取組や地域支援員・高校生・大学生による学習サポートの取組など、開かれた学校経営につながる事例の情報交流が行われた。

【第三分科会】　豊かな心と健やかな体を育む教育の充実

◎研究の視点　社会的・職業的自立に向けたキャリア教育と進路指導の充実

1　社会的・職業的自立のために必要な能力を育成するキャリア教育の充実

２　教育活動全体を通した組織的・計画的な進路指導の充実
◎提言者　せたな町立大成中学校　赤井　優子　校長
視点１・２について、各校のキャリア教育に関連付けて実施している活動に注目し、改善方策をまとめる形で、「職場体験学習」と「地域素材・人材を活用した体験的な学習」を例に、概要・成果・校長の関与について発表があった。グループ協議では、外部人材などの活用によるキャリア教育の充実について情報交流が行われた。また、小学校一年生から中学校三年生まで系統的に学習していく市民学の紹介や外部関係機関との連携を含めて課題や意見交流が行われた。

【第四分科会】　多様化した学校教育課題に対応できる教員の育成と働き方改革の推進
◎研究の視点　学校における組織マネジメントや指導の充実を図る研修の推進
１　校長のマネジメント能力やリーダーシップを発揮する研修会等の充実
２　地域と連携・協働した学校経営に携われる教員の育成
◎提言者　江別市立江陽中学校　信定　学　校長
アンケート調査結果からの考察・検証により取組改善に役立てることをねらいとし、視点１については、「組織を生かすマネジメント力について」の校長の方策について発表があった。視点２については、「地域と連携・協働を通した教員育成」に関する校長の方策について発表があった。グループ協議では、メンター研修の有効活用やミドルリーダー育成の方策や学校経営方針の教職員への意識付けと学校運営参画意識への醸成についての情報交流が行われた。

【第五分科会】　家庭・地域や校種間における連携・協働の推進
◎研究の視点　小学校との円滑な接続を目指す小中連携・一貫教育の推進
１　義務教育９年間を見通した計画的・継続的な教育課程編成に向けた取組の推進
２　小中一貫教育や校種間連携を活用した教育の充実
◎提言者　様似町立様似中学校　松田　陽一　校長
視点１・２について、「学力向上に向けた小中連携の取組」と「組織力向上に向けた小中連携の取組」の実践例から、乗り入れ授業や中学校登校の効果について発表があった。また、校長同士がリーダーシップを発揮し、組織体制を整備することによる九年間を見通した教育課程編成の推進について紹介された。グループ協議では、乗り入れ授業、合同授業、合同運動会に関する取組など、小中連携を活用した教育活動の充実やそれぞれの地域の状況に合わせた校長のリーダーシップの在り方などについて情報交流が行われた。

四　全日中提案概要説明

第七四回全日本中学校長会研究協議会大分大会の第七分科会「多様化した学校教育課題に対応できる教員の育成」において提案される二人の校長から、提案内容の概要説明が行われた。
◎提案者１　函館市立銭亀沢中学校　橋本　智也　校長
「教員自ら学び成長する学校づくりを通して」
◎提案者２　八雲町立野田生中学校　増田　正弘　校長
「協働と意識改革を軸に学校力を向上させる学校経営の在り方」

五　記念講演

◎演題　「地域のくらしと地域の歴史～小樽を例に～」
◎講師　石川　直章　氏（小樽市総合博物館　館長）
小樽の歴史と地域のくらしの変化や今後の博物館の役割と進むべき方向性など、空間と時間の広がりの中で「町」を立体的に捉えたご講演は、地域とともにあり、持続可能な学校を創り出そうする私たち校長にとって、多くの示唆に富んだ内容であり、学ぶことの多い、とても有意義な講演であった。

六　おわりに

全道各地から三〇七人の会員が参集し、各地域の実践を持ち寄り、熱心な研究協議を重ねることができた。小樽市中学校長会をはじめ、お力添えをいただいた関係各位に改めて感謝申し上げ、次期開催の道中研十勝・帯広大会の成功を祈念し、本年度研究大会の報告とする。

多様化した学校教育課題に対応できる教員の育成
～教員が自ら学び成長する学校づくりを通して～

函館市・銭亀沢中　橋本智也

Ⅰ　はじめに

現実世界と仮想空間との融合による社会の到来、グローバル化や情報通信技術の進展、少子高齢化、インフレの進行など激変する社会の変化に伴い、学校が抱える教育課題はますます多様化・複雑化している。

学校においては、いじめや不登校などの生徒指導上の問題、特別支援教育の充実、家庭や地域との連携・協働等、多様な課題に対応できる教員の資質・能力の向上が必要である。このことは、全ての子供たちの可能性を引き出す「令和の日本型学校教育」の実現に向けて、極めて重要である。

一方、教員の大量退職に伴う大量採用が続き、経験の浅い教員が増え、教育の質の維持・向上が危惧される状況にある。さらに、働き方改革が進展する反面、従来の先輩教員による教育技術を伝承する時間的余裕は減少している。

そこで函館市中学校長会では、学び合う学校文化の醸成による学校改善を目指し、「変化を前向きに受け止め常に学び続ける教員」の育成に向け、組織的に取組を進めてきた。

Ⅱ　地域、学校の状況

函館市は、観光的に魅力ある街として広く知られているが、若年層の転出、少子高齢化による人口減少が進み、ここ四〇年で中学校の生徒数は約三分の一に減少している。この状況下で学校再編も進み、ここ一〇年で二八校から一九校に統合・整理された。

函館市中学校長会は年々会員数を減少させてはいるものの、毎月の定例研修会を開催し、組織を機能させ、一丸となって地区の教育課題、経営課題の解決に努めている。

中でも、要因が複雑化する不登校生徒への対応や教育的支援を必要とする生徒数の増加、ＩＣＴ活用による授業改善等を当地区の大きな課題として捉え、課題解決に向けた取組を計画的に進めている。

Ⅲ　研究の概要

1　研究のねらい

多様化した学校教育課題に対応できる教員育成における函館地区の課題は、教員自身が率先してスキルアップを進められる体制整備にある。校長会としての実践、各校の人材育成に向けた取組の交流を通し、教員自らが成長する学校づくりを進めることをねらいとした。

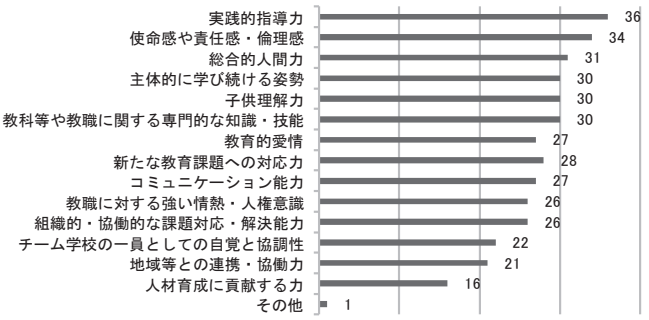
2　研究の視点と手法

研究推進にあたり、より効果的な教員の育成となるよう事前調査を行い、校長会としての管理職養成や各校でのキャリアステージに応じた教員育成の取組に生かしている。

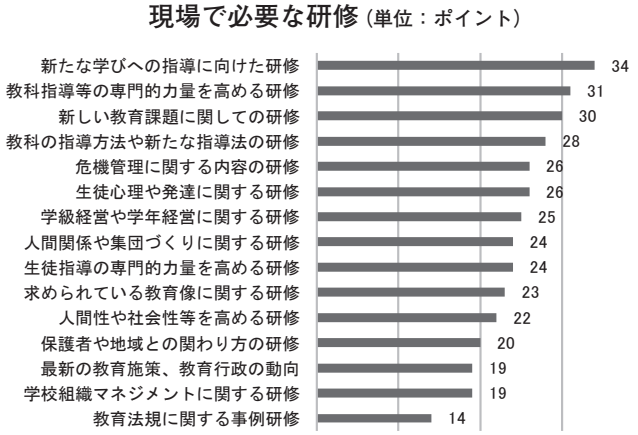
⑴　教員育成に関わるアンケート調査

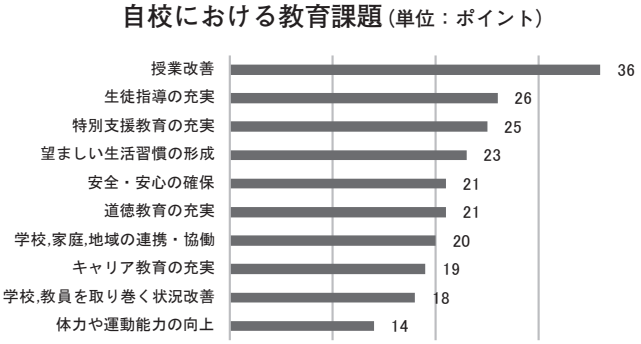
教員自身が主体的・自律的に資質・能力の向上に励み、変化を前向きに受け止め常に学び続けるためには、画一的な研修のみではなく、一人一人の教員のニーズに応じた研さんが必要である。人材育成等に関する各校の実態把握のため校長会でアンケート調査を行い、課題の分析を通して学校経営における教員の育成等の課題を明確にした。

教員に必要な資質・能力（単位：ポイント）



⑵　アンケート調査の結果と考察





各項目とも特にあてはまるものに◎（2ポイント）を、あてはまるものに○（1ポイント）を付け、ポイントの高い順にグラフ化した。

「教員に必要な資質・能力」では、授業力や生徒指導等の実践的指導力の回答が最も多く、次いで、どんな職にも適合する使命感や責任感、倫理観の回答となった。また、「自校における教育課題」や「現場で必要な研修」においても、授業改善やいじめ・不登校等の課題解決に向けた実践的指導力の向上が挙げられた。一方、「現場で必要な研修」で「あてはまる」という回答が少なかった項目は、教育法規や教育施策・教育行政の動向、学校組織マネジメントであった。教育現場では、理論よりも実践的指導力の向上が求められている。

⑶　人材育成等の実践交流

校長会では、アンケート調査の結果と考察を共有し、各中学校での育成指標に基づいた研修の在り方やキャリアステージに応じた取組について実践事例交流会を実施した。教育課題である授業改善の取組や実践的指導力の向上を目指した研修等、学び続ける教員の育成に向け、各校が工夫して取り組んだ実践について交流することができた。

Ⅳ　実践の概要

1　函館市中学校長会としての取組

⑴　生き生きセミナー

函館市小・中学校長会は、教頭会との共催により、教育に関する基礎的な知識や今日的な課題への対応を目的とした研修会を夏期休業期間中に開催し、次世代のリーダーとしての資質・能力の向上を図ってきた。学校経営の基本的事項、教育指導に関する内容、管理運営に関する内容に分け、市内小・中学校の校長や教頭が講師を務め、講義の他、グループ討議による演習を通して人材育成を図った。

コロナ禍の令和二年度からは、後継者育成資料「明日を拓く教育を求めて～学校経営の基礎・基本～」を各校にデータ配布し、資質・能力の向上に役立てている。

⑵　特別研修会

函館市小・中学校長会は、学校経営の責任者としての資質・能力の向上を目的として市内全教頭を対象とした学習会を開催している。

全体学習会・論文研修・模擬面接研修の研修内容において、校長が論文添削や受講者への直接指導を行う。今日的な課題への対応を含め、強いリーダーシップを発揮し学校経営に当たる校長としての心構えを醸成する。

○　論文研修会	
オリエンテーション、全体学習会１（リモート）	５月
第１回論文研修会（自校校長による指導）	５月
第２回論文研修会（担当校長によるオンライン指導）	６月
第３回論文研修会（会場筆記・○○小）	７月
○　面接研修会	
全体学習会２（南北海道教育センター）	９月
模擬面接研修（○○小）	９月

⑶　北海道における教員育成指標の活用

北海道教育委員会では関係機関より意見を集め、「北海道における『求める教員像』」として明示し、その実現に向けてキャリアステージに応じた「北海道における『教員育成指標』」を作成している。

函館市中学校長会では、学校における人材育成の取組として、キャリアステージに応じた『教員育成指標』を配布し、自己診断シートや目標設定シートの活用により、向上を目指す資質・能力の設定や必要な研修等を選択させている。また、校内研修においてキャリアステージ毎のグループ分けによる意見交流や、育成指標を踏まえたＯＪＴやＯＦＦ-ＪＴの取組を推進している。

2　各校のキャリアステージに応じた取組

⑴　若手教員の育成

ア　初任層教員を軸にしたメンター研修

Ａ中学校では、校内研修の一環として初任層教員を軸とし、学校教育に関する様々な経験や知見を継承する目的でメンター研修を実施した。生徒指導主事をメンター長として依頼・配置し、ほとんどのテーマをフリー参加とした。誰でも自由に研修に参加でき、自らの指導力向上や教職員同士のスキルアップ、コミュニケーションの場として活用している。

イ　若手教員による学校評価の改善

Ｂ中学校では、教頭・主幹教諭を筆頭に若手教員を評価委員として選出し、評価結果の集計と分析を委ねる。次年度に向けた課題を明確にし、改善に生かす目的であることを確認して業務を担当させる。評価方法や項目を厳選して実施した過年度の内容を、あらかじめ校長・教頭や主幹教諭で更に見直したものを準備しておき、経営参画意識を高揚させるねらいも含めその先を彼らに付託する。回答は全てＷＥＢで行い、集計作業は省けるよう評価委員会で工夫する。実効性のある評価・改善サイクルを目指すものである。

回	プログラム	参加形態
1	座談会(課題交流)	メンティ
2	本校ならではの授業づくり	フリー
3	生徒支援の概論と実際	フリー
4	知っておきたい学校事務	フリー
5	学校における危機管理	フリー
6	子供たちの命と健康を守る	フリー
7	座談会(課題・悩み交流)	メンティ
8	座談会(振り返り)	メンティ

⑵　ミドルリーダーの育成

ア　プロジェクトチームによる経営参画

Ｃ中学校では、校務分掌とは別の三つのチーム（Ｄｘ、ＷＳＲ、Ｆ）を編成し、各自が抱えている課題を思いついたときに、柔軟にチームで解決することができる環境を整備した。アジャイル型開発（短期的な開発の積み重ね）により、「何を、いつまでに、誰がするか」具体案を示し、優先順位を付けプロジェクトを推進している。

イ　推進チームによる学校課題解決

Ｄ中学校では、従来の重層式の組織では多様化・複雑化した課題解決が困難なため、校長のトップダウン型のリーダーシップではなく、「分散型リーダーシップ」により、教職員の学校経営参画意識を高めるよう環境を整備し組織の活性化を図った。働き方改革、重点教育目標としてのキャリア教育、休みがちな生徒への支援等を学校改革課題として捉え、通年で解決に向けた学校改革推進チームを立ち上げた。教頭、主幹教諭、学年代表、教務・生徒指導代表をメンバーとし、校長はオブザーバーとして参加する。

改善方策が「重点教育目標に迫るものか」「生徒の成長につなが

プロジェクトDx（Digital transformation）

主にＩＣＴを駆使した業務改善の提案

プロジェクトWsr（work- style reform）

働き方改革に向けた意識改革，業務推進

プロジェクトＦ　（Future・○○○○）

総合的な学習の時間，○○教育の体系化

るものか」「生徒の将来の幸せにつながるものか」の視点に収れんするよう取り組んだ。マイナーチェンジ、ショートスパンでの改革を即断し、成果を実感させている。

⑶　ベテラン教員のスキルアップ

ア　意識改革による行動変容

E中学校では、学年・分掌・部活動等の業務の均質化や、適材適所の組織編成を行い、ベテラン層の得意分野での能力発揮による肯定感や有用感を醸成した。

教務・生徒指導の主任には、ビジョンを共有し校長の意を受けリーダーシップを発揮する人材を登用した。学年では、総合的な学習の時間や道徳、生徒指導、ＩＣＴ等の担当を分担し、短学活や給食指導も複数担当とする等、学年団全員担任制のイメージを根付かせる。持ち時数の少ない教員は、英語・数学の習熟度別学習の指導と校内フリースクール登校生徒への積極的支援に関わる。個々の教員がもつ強みや適性を考慮した上で配置し、実力の発揮につなげた。

イ　ＩＣＴ活用の日常化に向けた取組

F中学校では、年齢の高い教員への一人一台端末の利活用促進に向け学級活動や総合的な学習の時間における写真の共有やまとめのレポート作成等を、学年の全教員で取り組んだ。生徒への直接的な指導を通し、端末に対する心理的な抵抗感が減少し、教科指導での活用を促す契機とした。

校内研修では、端末を教科や学級指導で使用する具体的場面を想定し、自らが進んで関わるアクティブな内容とした。

Ⅴ　実践の成果と課題

1　成果

⑴　生き生きセミナーや特別研修会では、学校経営・運営についての確認や協議を通し、学校経営参画意識の高揚に直結した。

⑵　「育成指標」のキャリアステージに応じ、個人目標の設定や自己評価を通し、自身の成長や取り組むべき内容について具体化することができた。

⑶　研修内容に触発された初任層教員が先輩教員からの助言を受け、職場内で研さんを積もうとする前向きな空気が流れている。

⑷　個々の教員が本当の意味で高め合える職員集団であることを自覚し、プロジェクトチームが教育改革を進める原動力となっていることを実感している。

⑸　経験値や古い価値観に頼っていたベテラン層が肯定感や有用感を享受し、対話を重視した研修体制を構築したことで、前向きにＯＪＴに取り組み、ＩＣＴの活用にも意欲的に動き出すこととなっている。

2　課題

⑴　メンター研修の実施において、課題や悩みをメンティー同士にとどめずに、全体で共有する必要がある。

⑵　従来の学校教育課題とコロナ禍における学校教育課題が重なり、本来目指していた姿が見えにくくなっている。アフターコロナを見据えた整理が必要である。

⑶　ＧＩＧＡスクール構想において「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実のためには、教員の授業観の転換を柱とした組織としての取組が必要である。

Ⅵ　おわりに

困難を乗り越え、未来を切り拓き、持続可能な社会の創り手となる子供の育成には、多様化した学校教育課題に対応できる教員が必要である。函館市中学校長会では、自ら学び成長する学校づくりを通して、教員の資質・能力の向上に取り組んでいる。これからも、連携と協働のもとで交流を深め、一丸となって人材育成に励んでいきたい。

多様化した学校教育課題に対応できる教員の育成
～協働と意識改革を軸に学校力を向上させる学校経営の在り方～

八雲町・野田生中　増田正弘

Ⅰ　はじめに

今後の時代や社会を見据えたとき、学校には様々な視点からの多様化した教育課題が押し寄せ、それらへの適切な対応力が求められる。さらには、一人一人の教員の対応力向上はもとより、総合的な学校力で乗り切ることが重要である。次代を担う子供たちを育てる現場の最前線にいる教員に、総合的な学校力の向上のために、それぞれの役割を理解して、適時適切に協働できる力を身に付けさせることは、我々校長の使命である。そのために校長は、自校の「強み」と「弱み」を鋭い分析眼で見つめ、「強み」に磨きをかけ、「弱み」は克服するための策を粘り強く実行していかなければならない。

以上のことから、渡島小中学校長会は、いかなる教育課題に対しても臆することなく対応できる教員を継続して育成していくことの重要性を認識しながら、校長の学校経営の充実に資するべく本研究の究明のために取り組んできた。

Ⅱ　地域の現状と課題

1　渡島管内の状況

渡島管内は、北海道の南西部、渡島半島に位置しており、総面積は三、九三六平方ｋｍで北海道全体の約四・七％を占め、長崎県(四、一〇四平方ｋｍ)の広さに匹敵する。

日本海に面する南西部の松前町から、南に津軽海峡、東に太平洋を巡り噴火湾に面する長万部町まで、約二〇〇ｋｍの非常に長い海岸線を有している。

渡島小中学校長会は、函館市を除く一市九町の小中学校長五七（小三七校、中一八校、義務教育学校一校）で構成している。中学校の生徒数は約三、〇五〇人、全中学校の半数以上が、六学級（特支含む）以内の小規模校である。

2　今後を見通した課題

令和三年と四年の秋に取った「学校力向上の課題と策」に関するアンケートの中で、各校様々な視点からの課題があることが分かった。中でも、「取組姿勢に課題のある教員」を挙げた学校が複数あり、学校力の向上にも大きな課題になっていると思われる。具体的な内容としては、「現状維持の考え方から脱却できない」「大変な役割や面倒な仕事を回避したがったり、協力的ではなかったりする教員」などが挙げられる。

また、少子化の影響を受けて、学校が急速に小規模校化していることにより、同一教科に複数の担当者がいないことから、校内では専門的な議論ができにくいという環境も増えているようだ。

さらに、アンケートの中にはＧＩＧＡスクール構想を進める中で、ＩＣＴ環境自体が勤務校によって差があること、個人の経験や能力、意欲に格差があることを大きな課題として挙げる学校もあった。

もう一つ気になる指摘は、教員のコミュニケーション能力の低下を挙げている学校が複数校あり、全体の約二六％あった。保護者対応がうまくいかず、トラブルに発展してしまうケースの増加や保護者からの意見や申し出をクレームとしてしか捉えられないケース等が報告されている。

学校力の向上は、これらの問題をも一つ一つクリアしていかなければ、なかなか実現が難しいのではないかと思われる。

Ⅲ　渡島小中学校長会の取組

渡島小中学校長会は、令和五年度も令和四年度から引き続き、研究主題を『未来を切り拓き　豊かな社会を創り出す日本人を育成する渡島小中学校教育』と定め、二か年研究を組織的な研究を進めている。

具体的には、小中別の研究課題を設定して研究に取り組み、その成果を八月に開催される研究大会で発表して、研究討議の中で揉み、積み上げていくものが一つ。それとは別に、渡島管内を三つのブロックに分け、ブロックごとに研究会を開催し、研究テーマに沿って研究討議をし、議論を深めている。我々は、この二本立ての研究システムを用いて、新しい時代にふさわしい教育活動を展開しながら、渡島の子供たちや教員の幸せのために自己修養を図り、強い意思で研究活動を推進している。

1　各校の実践例紹介

⑴　A義務教育学校の取組（学級数　一二）

A義務教育学校は、令和三年度から義務教育学校としてスタートした学校であり、小中一貫校としての新たな学びの姿を創り出すことが求められた。何十年と続いた伝統校とは違い、校風や文化を一から創り上げていかなければならず、そのための教育活動をどうマネジメントするかが問われた。その結果、「アイディア→議論→納得解→実践」という流れが創り出された。

A義務教育学校の「学校力向上」の目標は、「学校最大の教育資源を教職員自身と位置付け、教職員の独創的で斬新なアイディアを学校の財産や資源とし、それらの考え方やアイディア等を日常的に議論し合い、そこから新たな解や納得解を生み出すことで、組織力の活性化と学校力の向上につなげる」である。

A義務教育学校の校長は、職員間のコミュニケーションを充実させるリーダーシップであり、「人を育てるのは人である」という言葉のとおり、お互いに積極的に関わったり、話しかけたりしながら、納得できる解を導き出した実践例である。

⑵　B中学校の取組（学級数　五）

B中学校は、町内に二校ある中学校の一校であり、もう一校が大規模校であるのに比して、生徒数や教員数も少ない学校である。

B中学校の校長は、「学校力向上」を「チームとしての教師集団の質の向上」と捉え、その教師集団の質の向上という観点での目標を自校の経営の重点の一つである「自律的・協働的な校務運営」と設定した。この目標を設定した経緯は、まずB中学校の重点教育目標が、「意欲をもって、自ら学び続ける生徒」であることに起因する。この目標に迫るには、一人一人の教師が、生徒との信頼関係をもちながら、分かる授業や伝わる生徒指導をしていくこと、そして、そのために主体的に研修し続けていくことが必要である。

そのような個々の教師であるためには、教師同士がお互いを受け入れ合い、意見し合い、支え合うようなチームとしての教師集団を作っていくことが大切だと考えた。教師集団が、活力とぬくもりと、「このチームでなら」という有用感を感じて教育活動を推進できることが、目標に近づくための必須条件である、と考えた。

そして、そのような集団であるには、教師個々が自らのアイディアや判断、工夫が生かされ、主体性と経営参画意識をもって取り組む自律性、さらに、適切な組織体制の中、他の教師と協調し、組織的に動ける協働性が必要である。そのような経緯の下、上述のような目標設定に至ったそうである。

B中学校の校長は、ビジョンを明確に示すリーダーシップであり、分かりやすいゴールの設定と「この方法ならそこまで着実に行けるだろう」、というステップの設定・道筋、それらを含めて、教員が納得できるものを用意して学校内のベクトルの向きを揃えた実践例である。

(3)　C中学校の取組（学級数　四）

C中学校は、町内に小学校一校、中学校一校という環境にあり、幼・小・中の連携の強さに特色があり、防災教育にも力を入れている学校である。当該校の学校力向上における目標は、「『チームC中』としての協働意識をもった教育活動の推進」と「ミドルリーダーを中心とした組織的分掌・学年経営の推進」の二点である。

この目標設定の背景には、学校力を高め、維持し、持続可能な学校運営を目指すときに、現存の個々人の能力を基盤とする分業制にすると、人事異動や教員定数の変更によって、困難が生じることが想定されやすい。

そこで、ミドルリーダーを中心とした組織的学校運営・教育活動推進とすることで、人の入れ替わりや人数の変更があっても、組織全体でカバーができ、学校力の低下を招きにくくなると考えたのである。C中学校の校長が指摘するとおり、授業や生徒指導、分掌業務の力量にばかり依存していると、何らかの不測の事態や人事異動等で、以前までのパフォーマンスを学校として発揮できなくなる可能性は、多くの学校現場が抱える悩みであり、非常に参考になる取組である。

C中学校の校長は、持続可能な組織編成と環境整備によるリーダーシップであり、校内の人的資源の活用や補完し合える組織体制を組み立てる際の環境整備として見るものがある。この実践例のように、知恵と工夫で困難な事案や局面を乗り切りながら、教員が力を発揮しやすい環境を整えたいものである。

2　協働できる教員を育てるために

協働してチームとして仕事をする際に一番大切なことは、目標の明確な提示とその共有である。アンケートの項目にも「グランドデザインを作成するときにどんなことに注意するか」という項目を入れた結果、キーワードとして、「明確化」「簡潔」「図式化」「視覚」「分かりやすさ」「絞る」「具体的（性）」「作成させる（参画意識）」「つながり（連動）」等のフレーズが目立った。

つまり、難しい言葉や分かりづらい言葉で目標提示をしたり、内容量が多すぎたりする場合、教員の意識や行動のベクトルの向きは揃わないだけでなく、学校力としてのパワーやパフォーマンス、質的向上は望めないと考えている。

また、一般的に仕事の割り振りが、適材適所であることと各人に責任や役割をもたせることで、責任感や当事者意識、さらには達成感や成就感を感じさせることができるだろうとも考えている。

そうすると、校長の重要な役割は、教員の経験値やステージに応じて、適切な役割を割り振ることと、その任せられた仕事のことを相談できたり、指導できたりする人材を配置することだと言える。

3　意識改革を推し進めるための取組

学校力向上を阻む壁を乗り越えるために、各校の校長が腐心していることが明らかになった。

そして、様々な対策を講じているので紹介したい。まず、自分の考えや指導のポイントを納得してもらうために、「タイムリーで分かりやすい伝達」を心掛けている校長が多い。そのような関わり方で、「教員の理解度を地道に上げていきたい」という言葉にも表れていた。

また、「何でも言い合える、教え合える職場環境の構築」を対策として掲げている学校もあった。言い換えると、メンタルヘルスにも配慮した、心理的安全性が確保された職場環境を整えることで、よりコミュニケーションを取りやすい状況を作ることができれば、相談する気持ちや指導を受け入れる心のゆとりも生まれるだろう

と考えていることが分かる。

さらに、意識が低かったり、現状維持で満足したりしている教員の場合は、意識的に適切な「場面」や「状況」を創り出して、新しいアイディアを出さざるを得ない状況に追い込んだり、関わりをもたせたりすることを考えている校長もいた。

他に、メンター制度を有効に活用しながら、メンターとメンティーをペアとして組ませながら、育成の担当者に責任感を持たせる手法を取っている学校もあった。

4　総合的な学校力を向上させる経営

総合的な学校力の向上を目指すときに重要なことは、アンケート結果からも明らかなように、組織マネジメントの三要素である「目標の共有」「方策の共有」「活発なコミュニケーション」を大事にすることである。

渡島管内の各中学校では、それぞれの実情に応じて、手法は異なるが、上述の3要素を充実させようと最大限の努力をしていることが分かった。

また、多くの校長は、教員がそれぞれもっているパワーやパフォーマンス、潜在能力等を十分に発揮させるためには、「目的意識」「主体性」「同僚性」の三要素が職場内で充実していることが重要であり、その三要素が有機的に関連したり、総合的に働いたりしたときに、教員の協働力の高まりが実現できると考えているようである。

教員の力量を向上させたいならば、一人一人の教員に教授・学習活動の質的改善に対する自らの関与可能性を確信させ、自信と自己効力感をもたせることが有効である。そして、一人一人の教師に「自分の課題意識やアイディアをもって取り組めば、必ず何か達成できる」という積極的な思いを抱かせることが大切である。

そのために校長は、前述した実践例から明らかになった①「職員間のコミュニケーションを充実させるリーダーシップ」、②「ビジョンを明確に示すリーダーシップ」、③「持続可能な組織編成と環境整備によるリーダーシップ」を状況に応じて発揮して学校経営にあたり、学校力の更なる向上を目指していかなければならないと考える。

Ⅳ　研究の成果と課題

1　成　果

⑴　学校力向上のためにそれぞれの校長が必要な、強いリーダーシップの例を三点明らかにすることができた。

⑵　信頼づくりや心理的安全性確保から組織力をアップさせたり、教員の潜在能力を引き出したりするためには、コーチングの手法を活用した「傾聴」が、根本的に大切なツールであることが分かった。

2　課　題

⑴　教員のコミュニケーション能力やＩＣＴの格差がそのまま学校力の格差につながりかねないので格差是正のための取組が必要である。

⑵　風通しの良い職員室や、心理的安全性が担保された学校風土を構築する必要性に気付けたので、できることから確実にステップを刻むことが必要である。

Ⅴ　おわりに

第七分科会の「多様化した学校教育課題に対応できる教員の育成」という研究題について、二年間取り組んできた。渡島小中学校長会全会員相互の連携をもとに、校務多忙にもかかわらず、二度のアンケートに御協力をいただき、次世代の北海道や渡島の教育を支える人材育成と後継者の育成に取り組んできた。これからも、この貴重な二年間の研究の成果を土台に、総合的な学校力の向上を図りながら、多様化した様々な学校教育課題に対し、適切に、粘り強く対応できる教員やチーム学校の一員として、どんな人材とも協働して学校課題を解決できる教員を育てるために全力で取り組んでいきたい。

今年の道中

各部門の活動

令和五年度の活動及び次年度への展望

事務局長　三浦英悟

一　はじめに

激動する国際社会において、我が国では、二一世紀にふさわしい、持続可能な社会の仕組みを構築するため、行財政改革、規制緩和、地方分権などの動きが進行している。

教育界では、教育基本法及び教育関連法規の改正、第四期教育振興基本計画策定など一連の教育改革の流れを注視しながら、「社会に開かれた教育課程」及び「主体的・対話的で深い学び」の実現、「カリキュラム・マネジメント」の確立が求められている。また、国が進めるGIGAスクール構想の着実な推進により、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく、一人一人に個別最適な学びや、協働的な学びを実現するなど、新しい時代の学校教育である「令和の日本型学校教育」の構築も求められている。さらに、学校部活動の地域連携や地域クラブ活動への移行等、中学校の教育の大きな変革となる取組も始まろうとしている。

また、令和五年三月には、本道における教育課題の解決と地域創生の実現に向けた「自立」・「共生」の基本理念を継承し、「子供たち一人一人の可能性を引き出す教育の推進」「学びの機会を保障し、質を高める環境の確立」「地域と歩む持続可能な教育の実現」の施策を柱とした新たな「北海道教育推進計画」が策定された。

私たち中学校長は、学校教育の課題を踏まえ、人間尊重の精神に徹し、子供たちの「社会を生き抜く力」と「よりよい社会を形成する力」を育むとともに、生徒・保護者・地域の信頼と期待に応えるため、新たな教師の学びの姿の実現と多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成など、新しい時代に求められる学校づくりに向けてリーダーシップを発揮し、学校からの教育改革を推進しなくてはならない。併せて、本来、学校が担うべき業務の明確化・適正化をはじめ、学校の組織運営体制の見直し、教職員の意識改革等により、「学校における働き方改革」の推進も図る必要がある。また、東日本大震災の風化防止に引き続き取り組むとともに、北海道胆振東部地震をはじめ、近年、災害等が多発していることから、今後起こりうる災害に対し、能動的に対応できる生徒を育成するため、防災教育・安全教育の更なる充実を図る必要がある。さらに、新型コロナウイルスをはじめとした感染症対策を講じつつ、生徒の健やかな学びの保障を両立させなくてはならない。以上の認識に立ち、北海道中学校長会は、校長としての主体性と指導性、しなやかさを発揮しながら、会員相互の連携の下、「全日中新教育ビジョン　学校からの教育改革（令和二年五月）」の内容を踏まえ、「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を創り出していく日本人を育てる中学校教育」の推進と全道の中学校が抱える教育課題の解決に向けて取り組んできた。

二　活動の経過

1　各種養成及び要望活動

道教委に対し、以下の活動を行った。

・「令和六年度北海道文教施策・予算策定に関する要望書の手交（五月二十九日）

・公立学校入学者選抜について

・学校に対する暑さ対策に向けて
・「北海道アクションプラン（第三期）」作成に向けて
・「ヤングケアラー支援事業」に向けて
・「教育実習サポートガイド」作成に向けて

2　道教委との意見交換会及び各課懇談会

今年度も北海道小学校長会・中学校長会・公立学校教頭会と合同で、北海道教育委員会に対し、次年度の文教施策・予算策定に関する要望活動を行った。「要望書」の取組に関しては先に報告したとおりであるが、道教委からの回答については、「道小情報・道中だより号外」にて会員に報告した。この回答をもとに、八月七日北海道第二水産ビルにおいて、意見交換会が会同で開催された。「教員の新たな研修制度による教員の資質向上と学校経営について」というテーマで、道教委からは倉本教育長をはじめ、教育部長、学校教育監、教育指導監、総務政策局長、学校教育局長、特別支援教育担当局長、生徒指導・学校安全担当局長、ＩＣＴ教育推進担当局長、教職員局長と運営者として関係課長の計一三人が参加した。道小・道中・道公教からはそれぞれの会長及び役員計三九人が出席した。

続いて各課懇談会は、会場をポールスター札幌へ移し、会同で開催した。

道教委からは関係課の課長以下一七人、道小・道中・道公教からは会長をはじめ、副会長、地区理事、事務局員等、六九人が出席し、第一～三分科会に分かれ、各地区からの提言や道教委担当課からの具体的な説明を聞くことができた。この内容についても「道小情報・道中だより号外」にて全会員に報告した。

3　第六四回北海道中学校長会研究大会小樽大会の開催

九月二十二日、二十三日、小樽市民会館、グランドパーク小樽ホテルを会場として、第六四回北海道中学校長会研究大会小樽大会を開催した。

大会主題「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を創り出していく日本人を育てる中学校教育」に基づき、「歴史の街小樽より、未来を創る子供たちを育てる」を大会スローガンとして、三〇〇人を超える参加者が集まり、四年ぶりの会同形式で開催した。

開会式では、道中の森田聖吾会長が、「大会主題の『新たな時代を切り拓き、よりよい社会を創り出していく日本人を育てる中学校教育』の実現に向け、四か年継続研究の三年目に当たる本研究大会において、全道各地区の実践をもとに、熱心な意見交流を通じて『オール北海道』でしなやかに力強く歩んでまいりたい。また、全日中教育ビジョンに示されているとおり、学校こそが教育改革の現場であり、『子供を主語にする学校』をつくるために、校長をはじめ、全ての教師が責任と誇りを持って働ける環境を、各地区校長会と連携しながら、整えていかなければならない」と述べた。

大会実行委員長の岡本清豪会長は、「今大会は四年ぶりの会同での大会となり、新たな知見を得ることに加え、校長同士の情報交換を通し、これまで以上に『チーム北海道』として強固に結びつく大会としたい」と述べられた。

御来賓の北海道知事、北海道教育委員会教育長、小樽市長、全日本中学校長会会長より御祝辞を頂戴した。

開会式の後、全日本中学校長会会長　齊藤正富様による教育情勢報告、休憩後、五分科会に分かれ、それぞれのテーマに沿って熱のこもった研究協議が展開された。

各分科会の研究題と、提案者は次の通りである。

【第一分科会】「社会に開かれた教育課程」の実現
苫前町立苫前中学校　西山智章　校長

【第二分科会】新たな時代に求められる資質・能力の育成と学習評価の充実
新得町立富村牛小中学校　石丸揚一朗　校長

【第三分科会】豊かな心と健やかな体を育む教育の充実
せたな町立大成中学校　赤井優子　校長

【第四分科会】多様化した学校教育課題に対応できる教員の育成と働き方改革の推進
江別市立江陽中学校　信定　学　校長

【第五分科会】家庭・地域や校種間における連携・協働の推進
様似町立様似中学校　松田陽一　校長

各分科会ではグループ討議を取り入れ、熱心で深まりのある話し合いが行われた。その後、助言者より今後の学校経営に向けた御助言をいただいた。

二日目の二十三日（土）は、函館市地区、渡島地区による全日中研大分大会の提案概

要説明があった。

【第七四回全日本中学校長会研究協議会大分大会　第七分科会提案概要】

函館市立銭亀沢中学校　橋本智也　校長

八雲町立野田生中学校　増田正弘　校長

提案概要説明の後、小樽市総合博物館館長　石川直章氏による、演題「地域のくらしと地域の歴史」の講演が行われた。

閉会式では、第六五回北海道中学校長会研究大会十勝・帯広大会の久保睦則準備委員長から挨拶があり、大会の幕を閉じた。

今大会は、事前にオンラインによる合同研修会を開催するなど研究協議の充実に向けて取り組み、大会後のアンケートを見ると高評価が示されていた。また、四年ぶりの会同形式での大会運営についても、高い評価が示された。寄せられた意見を分析・検討し、令和六年度開催の十勝・帯広大会の運営につなげていきたい。今大会が、校長の今後の学校経営に大きく資するものとなり、次年度大会への道筋をつける大きな成果を得た研究大会となった。

これまで、小樽市中学校長会が岡本清豪大会実行委員長を中心に誠心誠意準備をしてくださったことに心から感謝を申し上げたい。

4　地区別教育経営研究会・法制研修会

毎年、校長会会員の職能の向上を目的に各地区単位で開催されている地区別教育経営研究会・法制研修会は、今年は七月二十六日の宗谷地区のオンライン開催を皮切りに、十一月六日の旭川市小学校長会まで予定通り開催された。この二、三年はコロナ禍で書面開催等も多かったが、今年度は、殆どの地区で参集しての開催となった。

開催した研修会には、道小・道中事務局より役員や幹事を派遣し、各地区からの質問に回答するほか、各地区で教育局や市町村教育委員会から講師を招いての研修が行なわれた。また、会員の実践発表や校種別、課題別分科会での研究協議を取り入れるなど、内容が充実してきている。

今後もより一層充実した会になるよう各地区校長会の取組をお願いしたい。

5　道中組織と運営

組織体制・運営に伴う会則及び規約の改正以降、全道六ブロック体制で活動を行っている。事務局の経営・研修・対策・情報の四部の活動においては、石狩・札幌・空知・胆振の各地区に加え、後志地区も担っている。

「オール北海道」での取組体制も六年目を迎え、今年度は札幌を除く五人の副会長の互選により選出された旭川市立忠和中学校森田聖吾校長が、四月十三日の第一回理事研修会において道中会長として決定し、総会にて承認された。五役においても、事務局次長を札幌・空知、会計理事を小樽から選出し、「チーム北海道」として事務局の活動を進めている。令和六年度に開催される北海道中学校長会研究大会十勝・帯広大会に向けて、十勝校長会・帯広市校長会との連携を密に準備を進めている。

三　本年度の反省と次年度への展望

令和五年度の業務推進にあたっては、「新たな時代へ『連携』し、『しなやか』に歩む道中」というスローガンのもと、多くの成果をあげることができた。特に道教委との関わりについては、日常的な連携はもとより、意見交換会・各課懇談会は、新たな形での二年目となり、今年度は課長職の参加により、昨年以上に内容の濃い話し合いができた。

また、道中研小樽大会においては、四年ぶりに会同形式での開催を実現できた。小樽大会実行委員会と道中事務局と早い段階から綿密な連携を進め「オール北海道」による運営で、多くの参加者が充実感を得た研究大会となった。さらに、全道二〇地区と事務局との間においても、日頃からできるだけ細やかな情報共有に努め、会同による地教研では、絆を深めることができた。また、道小とは、年九回の小中事務局合同研修会を通して、様々な情報や意見交換を行うなど、「しなやか」で力強い活動を推進できた。しかし、時代の変化に応じて更なる改善を要することや、様々な教育課題への対応が求められ、今後も皆で知恵を出し合い、新たな時代へ、連携し、しなやかに力強く歩んでいかなければならない。これら今年度の成果と課題、そしてそこに込められた思いや願いを、次年度の全ての取組につなげていきたい。

学校経営に法的根拠を据えた教育活動の充実に努める

経営部

一　活動の方針

本会の運営方針・活動の重点を受け、学校経営に法的根拠を据え、教育活動の充実に努める。

1　教育制度、関係諸法規の情報収集と情報の提供、資料化に努める。

2　学校経営上の諸問題や管理運営に関する法制研究を行い、その解決に資する。

3　諸会議等を通じ、会員相互・地区との情報交換を図り、組織の連携・充実・発展に努める。

二　業務内容と進捗状況

1　諸会議の開催

⑴　経営部研修会

①　第一回経営部研修会

・四月二十八日（金）　方針、業務推進計画の検討

②　第二回経営部研修会会

・二月九日（金）　年度反省、次年度への課題・展望とまとめ

⑵　道小・道中合同学習会

・七月十八日（火）　質問・要望に対する学習会　道小と連携

2　法制研修会・地区別教育経営研究会の開催（今年度道中担当）

七月二十六日の宗谷地区を皮切りに、十一月六日の旭川小を最後に、全一九地区においてコロナ禍で培われた経験を生かし、計画通り実施

3　学校経営の資料の編集（今年度道中担当）

4　法制研究集録第五四集の編集発行（今年度道小担当）　二月にＨＰに掲載

三　今年度の反省と次年度への展望

1　法制研修会・地区別教育経営研究会

・五月に新型コロナウイルス感染症が五類に移行することを見越して、会同開催で計画する地区が多かった。全ての地区で、コロナ禍で培われた経験を加味しながら、工夫を凝らした準備を頂き、当初の日程通りに開催することができた。その甲斐あって、どの地区においても限られた時間の中で、内容の濃い充実した研修が行われ、多くの成果を収めることができた。

・会同開催（一六地区）

ハイブリッド、オンライン開催（三地区宗谷、釧路・釧路市、空知）

・「道小・道中の活動、役割や組織について」「教育情勢について」は道小中役員が説明した。

・地区から上げられた質問の中に、道小道中の経営に関わるものや、組織についての質問があった。幹事ではなく役員派遣者より説明を行うことで、派遣の役割分担が明確になり、地区参加者へ十分な回答となった。

・オンライン開催となった地区では、一部で音声が聞き取りにくい場面などもあったが、臨機応変に対応することで滞りなく進行できた。

・地区からの「質問事項」には、個人的な内容のものがある。地区の実情も十分理解はできるが、各幹事の回答に要する業務を鑑み、事前に地区の経営部内や役員会など、組織内で精査を行ったうえで、御提出くださるようお願いする。

2　学校経営の資料の編集

・道中が主たる編集を担当し、七月中旬全道各地区校長会に配布を終えた。

3　法制研究集録第五四集の編集発行

・道小が主たる編集を担当し、二月下旬にＨＰ上に掲載した。

本年度の経営部の活動では、皆様の御理解と御協力により多くの成果を収めることができた。特に地区別経営研では、一九地区の全てで、コロナ禍で培われた経験を生かして開催したことは、大きな成果といえる。各地区の校長会の御尽力に心より感謝申し上げる。

（石狩市・樽川中学校　小森　享）

「新たな時代を切り拓き よりよい社会を創り出していく日本人を育てる中学校教育」を目指して

研修部

基本主題『新たな時代を切り拓き　よりよい社会を創り出していく日本人を育てる中学校教育』のもと、全日中研大分大会、道中研小樽大会において研究交流を深めるとともに、各地区における研究を基盤とした研究活動の充実に努め、校長としての識見や指導力の向上を図る取組を推進した。

一　活動の方針

1　第七四回全日本中学校長会研究協議会大分大会の円滑な運営と研究内容の充実を図るために、開催地区並びに各地区研修担当者との連携を密にする。

2　第六四回北海道中学校長会研究大会小樽大会の円滑な開催及び研究活動の充実に向け、小樽市中学校長会との連携を密にする。

3　これまでの研究の成果と社会情勢や教育の動向を踏まえ、令和七年度以降の研究推進について原案作成に向けた研究主題や分科会研究主題についての検討や準備を進める。

4　令和五年度の研究を総括し、令和六年度「研究の手引き」の作成作業を行う。

5　教育課程に関する情報収集に努め、中学校教育における今日的課題を明らかにし、問題点の解明に寄与する。

二　業務の推進

1　諸会議の開催

(1)　第一回研修部研修会　四月二十八日

・研究方針、業務推進計画及び業務推進について

・第六四回道中研小樽大会、第七四回全日中研大分大会について

・令和六年度「研究の手引き」の作成について

・教育課程に関する調査について（令和五年度の調査実施と調査結果のまとめに向けて）

・各地区研究推進状況及び令和五年度の研究計画について

(2)　道中研合同研修会　七月十三日

(3)　道小道中合同研修会　七月十八日

(4)　道中研究大会全体研修会（小樽大会→十勝・帯広大会）　十一月十日

(5)　第二回研修部研修会　二月九日

・年度末反省、次年度への課題の検討と展望・まとめについて

・令和六年度以降の研究推進について

・令和六年度第六五回北海道中学校長会研究大会十勝・帯広大会（九月二十七、二十八日）について

・令和六年度第七五回全日本中学校長会研究協議会岩手大会について

・令和六年度「研究の手引き」について

・教育課程に関する調査について（令和五年度実施の振り返りと調査内容のまとめについて）

2　研究活動の推進

(1)　第六四回道中研小樽大会と第七四回全日中研大分大会の円滑な運営と研究内容の充実を図るため、当該実行委員会との連絡・情報交流を積極的に行う。また、道中研分科会提言及び全日中研提案に向けて、研修部として担当地区や発表者へのサポートを早めに行っていく。

(2)　その他の業務

・研究資料及び情報提供、研究校の紹介

・各地区研究推進の状況や成果の交流

・教育課程に関する調査と結果の分析・まとめ、調査研究報告書の発行

三　今年度の反省と次年度に向けて

道中研小樽大会については、大会実行委員会と連携を図り、大会を成功裏に終えることができた。また、業務の推進にあたっては関係の皆様に御協力いただいたことに深く感謝申し上げたい。今後も引き続き、円滑な業務を推進していきたい。

（札幌市・山鼻中学校　遠山　博雅）

学校経営の向上を目指した調査研究活動の推進

対策部

令和五年度、対策部では本会の運営方針と活動の重点を受け、業務を推進してきた。

今年度は令和六年度調査研究報告書の発行に向け、「ＧＩＧＡスクール構想の取組と現状等に関する追加調査」「いじめ問題への対応（主に重大事態についての対応）に関する調査」の検討・協議を行った。各地区理事並びに地区対策担当者の皆様の御協力により、計画した業務を遂行することができた。

一　活動の方針

本会の運営方針及び活動の重点を受け、学校運営上の諸問題について調査研究を推進し、学校経営の向上に役立てる。また、会員の職責に見合う待遇改善に向けて業務を推進する。

1　生徒指導等に関する情報収集や調査研究から情報提供に努める。

2　会員の身分確立や福利厚生、給与等の待遇改善に関する課題解決に向け、関係機関との連携強化に努める。

3　その他、緊急性のある課題や各種調査、情報に関することへの対応に努める。

二　業務内容と推進状況

1　諸会議の開催

(1)　対策部研修会

・四月二十八日(金)活動方針、業務計画の検討

・二月九日(金)業務反省、次年度の展望とまとめ

(2)　小中合同事務局研修会・学習会

・七月十八日(火)道小との連絡・調整、情報交換

2　各種調査の推進

(1)　令和六年度調査報告書の発行に関する検討・協議

・七月二十七日（木）対策部調査（案）についての意見集約

・八月二十一日（月）各地区担当者に意見集約結果を送付

・九月十三日（水）第三回理事研修会において方向性の確認

・十一月十三日（月）各地区担当者への意向調査の実施

・十二月十一日（月）対策部担当者、各地区担当者に意向調査結果の送付

・二月九日（金）令和６年度対策部「調査報告書」の作成について決定

(2)　全日中諸調査への協力

・調査研究協力校として学校規模に応じて全道一八校に依頼

①生徒指導部調査（十月）

・調査一　健全育成の推進・充実のための研究、当面する生徒指導上の課題への対応に関する調査

・調査二　特別支援教育推進上の課題への対応に関する調査

・調査三　部活動のあり方の検討に関する調査

・調査四　防災教育・安全教育推進と充実のための研究に関する調査

②教育研究部調査（十月）

・調査一　教育課程の編成・実施「主体的・対話的で深い学び」及び「学習評価」に関する調査

・調査二　新型コロナウイルス感染症の法的扱いの変更による学校教育活動等への影響に関する調査

③給与対策部調査（十一月十七日）

・調査一　人事院勧告の概要

・調査二　校長会の給与等に関する令和六年度予算要望の概要

三　活動の反省と次年度に向けて

業務推進にあたっては、部内の連携協力体制を維持し、当初の目的を達成することができた。関係各位の御理解と御協力に、改めて感謝を申し上げる次第である。

次年度は調査報告書の作成にあたり、全体統括、アンケート集計、結果分析等役割を分担しながら連携を図る。

（旭川市・中央中　工藤　亘）

情報交流の充実を目指して

情報部

情報部は、今年度も全国・全道の教育情勢を各地区に提供するとともに、各地区からの情報交流の充実を目指して業務推進にあたった。特に、本会の活動状況や教育関連情報については、会報「道中だより」、会誌「全道中」、そして道中ホームページによって随時お知らせしてきた。

情報部が提供する教育情報が、各地区校長会の取組に一層の充実が図られていること、また、会員諸氏の職能向上に貢献しているものと確信する。さらに、何かと御多用のところ原稿執筆に御協力いただいた皆様に感謝申し上げる次第である。

一　活動方針

本会の運営方針と活動の重点を受けて、広報活動のより効果的な業務推進を図り、会員意識の高揚並びに組織活動の強化に努める。

1　広く、本会活動の状況や関係機関の情報、各種資料等を提供する。

2　各地区の活動や会員の研究成果、論説等の交流を図るとともに、各界から教育に寄せられる意見も掲載し、会員の職能向上に努める。

3　教育関係機関・団体との情報・資料の交流並びに相互の連携・協調を図り、教育世論の喚起に努める。

二　業務内容と推進状況

1　諸会議の開催

(1)　情報部研修会

第一回　令和五年四月二十八日

本年度の活動方針、業務推進計画の検討・協議

第二回　令和六年二月九日

本年度の業務報告　来年度への展望

(2)　編集会議（随時）

2　機関誌等の編集・発行

(1)　「道中総会・研修会要項」編集、発行

令和五年度「第九六回総会・研修会要項」の発行　四月二十八日

令和六年度「第九七回総会・研修会要項」の編集（令和六年四月発行）

(2)　会報「道中だより」の発行

第三八二号　六月八日発行

第三八三号　七月六日発行

第三八四号　十一月九日発行

第三八五号　一月二十五日発行

(3)　号外「道小情報・道中だより」の発行（今年度は、道小担当）

十月十九日　北海道文教政策・予算策定に関する要望に対する回答

十二月二十七日　道教委との意見交換会・各課懇談会

(4)　会誌「全道中」第九三号の編集・発行

①潮流

②論考

③特集

④今年の道中　各部門・各地区の活動

⑤北海道風土記

⑥文芸

⑦資料等

3　北海道中学校長会公式ホームページの更新及び内容の充実

本会活動の状況や各地区発行機関誌、会誌等の交流、研究大会に関する案内、関係機関の情報、法制研究集録等の各種資料等の提供の場としての運用とタイムリーな更新に務めた。

4　全日中機関誌「中学校」の編集協力・原稿依頼

今年度は五本の割当があり、北海道各地の実践、及び、全日中研究協議会大分大会についての寄稿を行った。

四月号　三浦　英悟　道中事務局長「校長会だより」

七月号　玉置　英樹　厚沢部中学校「特集　学校経営」

十一月号　近藤　啓之　標津中学校「郷土芸文の旅」

一月号　徳増　秀隆　道中副会長「令和六年度全日中研究協議会大分大会「大会に拾う」

三月号　森田　聖吾　全日中副会長「主張」

三　活動の反省と次年度に向けて

全道各地区の御協力をいただいて業務推進にあたることができた。関係各位の御理解御協力に深く感謝申し上げたい。

次年度もタイムリーな内容となるよう刊行物の発行、及び、ホームページの掲載に力を尽くしたい。

（稚内市・稚内東中学校　細谷　隆志）

今年の道中

各地区の活動

石狩

エスコンフィールド
HOKKAIDO　開業

「石狩は一つ！」、石狩管内教育関係機関の合言葉となっている。石狩管内小中学校長会は、管内七市町村の小中学校長九八人で組織している。管内小中学校長会では、石狩の教育風土に根ざした伝統を踏まえつつ、今年度も関係機関との連携を大切に、管内が一つになった教育を推進していく。

一　活動方針

1　信頼される学校経営のもと、管内教育の安定と充実・発展に努める。

2　職能向上をめざす研修活動の推進と教職員の資質向上に努める。

3　管内における教育諸課題を把握しその解決に努める。

4　教育諸条件の整備・充実と教職員の処遇改善や福利厚生の増進に努める。

5　組織の強化と実態に即した会務の推進に努める。

6　会員相互の交流活動の推進に努める。

7　ポストコロナ社会の中、全ての子供たちの未来を保障する授業改革の推進に努める。

二　各部の活動

1　研修部

協議題「新たな時代に必要な資質能力を育成し、生きる力を育む学校経営の確立」について研究を推進。

(1)　管内校長会研究会の企画と運営

①　春季学校経営研究会（四月）

生きる力を育むカリキュラム・マネジメントの在り方

②　秋季学校経営研究会（十一月）

学び続ける組織と人材を育成する学校経営の在り方

(2)　全連小・全日中・道小・道中研究大会への参加

(3)　ブロック別研修会の開催（九月）

①　Aブロック研修会（北広島市）

②　Bブロック研修会（当別町）

(4)　研究収録第三九集の発行

2　経営部

(1)　石狩地区教育経営研究会の開催（十月）

学校経営等に関わる諸問題等について研究協議

(2)　道小・道中経営部との連携と業務推進

3　対策部

(1)　道小・道中対策部との連携と業務推進

(2)　会員の福利厚生活動の推進

(3)　管内関係機関・団体との連携

4　情報部

(1)　会報『石狩』の発行（二〇六・二〇七号）

(2)　会報『たがやし』の発行（五五号）

(3)　道小・道中広報誌への原稿執筆協力

三　諸会議

1　定期総会（四月）

2　役員研修会（月一回）当面する課題対応

3　幹事研修会（年九回）市町村幹事・関係機関による協議、交流

4　市町村代表者等研修会（七月）

四　地区役員

会長　佐藤　直己（北広島・東部中）
副会長　吉田　光岐（江別・上江別小）
副会長　金森　直人（千歳・千歳中）
事務局長　佐藤　誠（江別・中央中）
次長　千葉　則理（江別・江別第一中）
会計　後藤　章夫（江別・対雁小）
監査　佐藤　辰彦（江別・江別第二小）
監査　吉本　浩志（恵庭・恵明中）
監査　渡會　朋広（石狩・南線小）

五　道中役員

理事　小森　享（石狩・樽川中）
幹事　野口　俊之（石狩・花川北中）
幹事　北村　剛（千歳・駒里小中）
幹事　松橋　辰吾（北広島・西部中）

（江別市・中央中　佐藤　誠）

後　　志

国重要文化財
ニッカウヰスキー
余市蒸留所

後志小中学校長会は、一九町村より小学校長三八人、中学校長二四人の計六二人で構成されている。（十月末現在）

当会では、学校教育に対する保護者や地域社会の負託と信頼に応えるとともに、会長のリーダーシップのもと、「一人一人の校長の力を結集する」ことを基本に、各関係機関と連携を図りながら、後志教育の一層の充実・発展に寄与するために取り組んでいる。

一　運営方針

1　国や自治体における教育関連の動向を注視し、迅速な情報収集・情報共有に努める。

2　地域や会員が抱える課題に向き合い、その解決に寄与する取組に努める。

3　関係教育機関、関係団体との積極的な調整に努める。

二　活動方針

1　愛情と信頼に基づく、活力ある学校経営の充実に努める。

2　生きる力を育む「社会に開かれた教育課程」の編成・実施・評価・改善に努める。

3　児童生徒理解を深め、時代の変化に即した生徒指導や個々の教育的ニーズに応える特別支援教育の推進に努める。

4　会員の共同研究を推進し成果の交流を図るとともに校長自ら研さんに努める。

5　教職員の一層の資質・能力の総合的な向上に努める。

6　教育諸条件を把握し、その改善と整備・充実に努める。

7　教職員の処遇の改善に努める。

三　活動状況

1　経営部

(1)　後志地区教育経営研究会の開催

(2)　学校経営上の諸課題や管理運営上に関する法制資料の作成と研修会の実施

(3)　各町村校長会の教育法令・制度に関する課題の集約と解明

(4)　道小・道中（経営部）との連携・協力

2　研修部

(1)　後志小中学校長会研究大会の開催

(2)　ブロック研究会の開催

(3)　「研究の手引き」「研究紀要」等の発行

(4)　全道（道小・道中）・全国（全連小・全道中）の研究の方向性の共有

(5)　全道・全国研究大会提言内容の共有

3　対策部

(1)　各種調査の実施と集約・還流

(2)　教頭とミドルリーダーを各対象とした「スキルアップセミナー」等の開催他

4　情報部

(1)　「会報後志」の発行（年二回）

(2)　「情報部だより」の発行（年一回）

(3)　道小・道中機関誌への寄稿協力

四　今年度の新規活動

1「教頭のなり手不足」解消に向けた改善策

（町村教育長部会・教育局との共有）

2「人材育成チーム」の設置・研修会の開催

（同窓会等の枠を超えた人材育成支援策）

3「教科研修促進事業」の推進

（町村教育委員会協議会の協力のもと、持続可能な研修機会確保に向けた調整）

五　役　員

会　　長　中田恭太郎（真狩小）
副 会 長　前田　敦子（寿都小）
副 会 長　柴田　真琴（岩内第一中）
副 会 長　丸岡　哲也（古平小）
副 会 長　半田　健一（仁木小）
監　　査　五十嵐邦春（寿都中）
監　　査　姉帯　隆文（赤井川小）
事 務 局 長　中村　和男（共和中）
事務局次長　明村　秀之（余市黒川小）
事務局次長　山下　秀一（余市旭中）
会　　計　金崎　徳子（蘭越小）

（余市町・旭中　山下　秀一）

小 樽 市

「夜の小樽運河」

小樽市中学校長会は、市の方針「知・徳・体のバランスのとれた人材の育成」に基づき、小樽の未来を託すことのできる人材育成を目指す教育推進のため、真摯に研究と実践を積み重ね、着実に成果をあげてきている。

これまでの成果を踏まえ、「小樽市立学校」の一校をあずかる校長として、その使命と重責を背負って「自立」するとともに、日々、市教委との連携や横のつながりを大切にし、今年度の基本姿勢として「自立と連携・協働」を掲げ、自校や市内の課題解決に取り組み、一歩でも前進させ、次代につなげていく取組を行っている。

一　活動方針

1　市の教育ビジョンを基盤とした着実な取組

⑴　選択と集中による実践・検証

2　二つの部の充実

⑴　研究内容の充実

⑵　学び合いの深化

3　自主自立の確立

⑴　校長としての使命を自覚した自立した学校経営

二　活動にあたっての教育ビジョン

1　学校運営組織の機能化

⑴　指導的立場としての教務主任の機能化

2　小中一貫教育

⑴　分掌内への小中一貫教育担当の位置付け

⑵　中学校区内での担当者会議・全教職員による部会の実施

3　人材育成

⑴　主幹会のバックアップと主幹間の定期的な交流

⑵　教頭・主幹・主任等の他校体験・見学と、長期的展望に立った小樽市の管理職候補の育成

4　業務改善

⑴　校内組織の機能化をベースにした業務の見直しと推進

三　各部の取組

1　研究部

⑴　小樽市中学校教育の充実・発展のため、校長としての職能の向上を図る。

2　組織・法制部

⑴　学校経営に関する機能の向上を図る。

⑵　法制研修及び経営活動を通して、今日的な課題の解明に努める。

四　活動の状況

学校教育と社会教育を一本化した包括的な計画である「小樽市教育推進計画」で示された基本理念「主体的に学び　小樽の未来を創る　心豊かな人づくり」を踏まえ、毎年、中学校長会としての共通目標を立て、各学校で具体的な実践を進めている。

今年度は、「学校運営組織の機能化」を重点とし、教務主任がより一層、指導的な役割を果たせるような体制の整備や教頭の業務内容の見直し等に取り組んでいる。

また、各校の課題に合わせた働き方改革をはじめ、小中一貫教育の推進等を含めた研究活動を進めている。

五　年間活動（行事）

総会　一回

定例校長研修会　一二回

（うちオンライン会議三回）

四役研修会　一二回

（うちオンライン会議一〇回）

四役部長研修会　四回

（うちオンライン会議三回）

小樽市校長会役員研修会　六回

小樽後志代表校長会議　一回

道中第一ブロック連絡協議会　一回

中・高校長連絡会議・協議会　一回

経営・法制研究会等　三回

六　役員一覧

会　　長　村上　俊一（菁園中学校）

副　会　長　伊藤　仁弥（長橋中学校）

副　会　長　大山　倫生（朝里中学校）

事 務 局 長　代永　　研（桜町中学校）

研 究 部 長　髙橋　恒雄（潮見台中学校）

組織法制部長　吉岡　智尋（西陵中学校）

（小樽市・桜町中　代永　研）

上　川

ドラマ『北の国から』の
ロケ地、上富良野町
「吹上露天の湯」

令和五年四月十四日、八人の新会員と旭川市及び他管内からの異動の八人の会員が加わり、総勢八八人が出席した第四九回総会研修会から、上川管内校長会が始動した。

本会は、二期目となる南部和紀会長のもと、「新しい社会の形成に向けて挑戦する子供を育てる学校経営」の実現に向け、教育改革に組織的に対応し、「愛情と信頼」に基づく学校経営の推進を目指している。さらに、「研さん」に励みながら「結束」を強化し、迅速且つ適切に課題の解決に努めている。

一　活動方針

上川管内校長会は、「ふるさとを愛し、他者とともに持続可能な社会を創造する人材を育てる学校の在り方」の究明と、新しい社会の形成に向けて挑戦する子供を育てる学校経営を推進し、住民の負託と信頼に応える上川教育の一層の充実発展に寄与することを旨とする。そのため、「愛情と信頼」「研さんと結束」の合言葉を継承し、学校の教育力を高めるため、次の四点を活動方針としている。

1　「愛情」と「信頼」に基づき、創意に富む信頼される学校経営の充実に努める。

2　校長自ら「研さん」に励むとともに、教職員の一層の資質・能力の向上に努める。

3　組織活動の充実と確かな情報共有を図り、会員の「結束」を強化するとともに、教職員の処遇改善に努める。

4　上川教育局・地教委及び道小・道中、教育関係機関・団体と連携し、教育課題の解決及び北海道教育をリードしていくことに努める。

二　各部の活動（主な業務）

1　経営部

⑴　組織強化に関すること

⑵　法制研究会・教育経営研究会の開催

⑶　学校経営に関する法制上の課題把握と関係法規の研究・具体的問題の収集処理に関すること

⑷　道小及び道中経営部との連携に関すること

2　研修部

⑴　研修組織及び運営に関すること

⑵　道小・道中研究大会及び全連小・全日中研究協議会に関すること

⑶　会員の研修に関すること

⑷　道小及び道中研修部との連携に関すること

3　広報部

⑴　会報の編集と発行に関すること

⑵　各種調査の企画・実施に関すること

⑶　学校の統廃合に関すること

⑷　道小及び道中対策部・情報部との連携に関すること

4　事務局

⑴　学校経営に関する資料の整備と交流に関すること

⑵　地区ブロック研修会に関すること

⑶　後継者育成のための諸施策の立案と実施に関すること

⑷　教育局・教育委員会連合会・市町村校長会など関係諸団体との連携に関すること

⑸　各部との連携に関すること

三　役員一覧

会長	南部　和紀	（東川小）
副会長	大場　八仁	（鷹栖中）
副会長	鈴木　豊	（名寄南小）
副会長	千葉　良彦	（富良野西中）
運営委員長	蟹谷　正宏	（愛別中）
運営委員	杉山　禎裕	（和寒中）
事務局長	今村　雅之	（当麻小）
事務局次長	袰田佳奈恵	（当麻中）
事務局次長	豊田　央	（上富良野小）
会計理事	石坂　剛	（風連中央小）
庶務理事	森　広明	（士別小）
経営部長	越野　崇	（旭中小）
研修部長	小嶋　高徳	（樹海学校）
広報部長	大垣　幸治	（東神楽 東聖小）
	富居　充孝	（士別南中）

（富良野市・富良野西中　千葉　良彦）

旭川市

旭橋
「旭川八景」

旭川市中学校長会は、本年度、新採用二人の新会員を迎えた。会員二七人が工藤　亘会長を中心に、「知恵を結集し、さらに、前へ」を基本姿勢とし、旭川市教育大綱の基本方針「主体的に学び力強く未来を拓く人づくり」の具現化を図るために、組織の一層の活性化を進めている。

会員相互の研さんと連携のもと、新しい時代に相応しい学校教育の創造に向けて日々邁進するとともに、校長としての主体性とリーダーシップを発揮して、基本理念である「信頼される中学校教育の創造」を目指して会務を推進している。

一　活動の方針（要点）

1　教育改革の動向を見極め、主体的に取組を進めるとともに、いじめ防止対策を着実に推進する。

2　旭川市民の願いや期待に応え、信頼される中学校教育を目指し会務の推進に努める。

3　旭川市教育委員会を始め、関係機関等と緊密に連携し、教育諸課題への適切な対応に努める。

4　中学校長としての使命を自覚し、時代の進展に対応する中学校教育の在り方を見極めるとともに、その充実・発展に努める。

5　校長としての資質・能力の向上を図る研修に努める。

6　会員相互の意思疎通を図り、活動の活性化・効率化を進めるとともに、後継者の育成に努める。

二　活動の重点（要点）

1　創意と活力ある学校づくりの推進

2　信頼される開かれた学校づくりの推進

3　生徒指導上の諸課題の解決

4　校長の資質・能力の向上

5　関係機関・団体との連携と組織強化

三　各部の主な活動

1　研究部

⑴　六月研修会の開催・運営

⑵　上川管内小中学校長研究大会の運営

⑶　道中研究大会小樽大会への参加

⑷　全日中研大分別府大会への参加

⑸　二月研修会の開催・運営

⑹　研究紀要の発刊

2　厚生部

⑴　福利厚生関係業務の推進

⑵　叙位・叙勲関係業務の推進

⑶　親睦関係業務の推進

3　広報部

⑴　会報「校長会だより」の編集・発行

⑵　会誌「第五四号」の編集・発行

⑶　道中の広報活動への協力

4　生徒指導部

⑴　小学校・高等学校及び関係機関との交流の充実

⑵　定例校長会議における「生徒指導情報交流」「実践交流」の充実

⑶　地区ブロックにおける生徒指導体制及び小学校との連携や交流の充実

⑷　各関係機関との緊密な連携と協力体制の構築

5　学校教育対策部

⑴　旭川市小・中学校長会法制研修会の開催

⑵　学校運営及び法制上の諸課題への対応

⑶　道中地区対策担当者業務への対応

四　役員一覧

会　　長　工藤　亘（中央中）
副　会　長　中山　洋（東明中）
副　会　長　片原　俊光（東陽中）
副　会　長　森田　聖吾（忠和中）
監　査　委　員　佐藤　哲雄（愛宕中）
監　査　委　員　貞弘　真悟（緑が丘中）
事　務　局　長　福澤　秀（明星中）
事務局次長　千葉　雅樹（広陵中）
事務局次長　岩瀬　一弘（北星中）
会　計　委　員　濱中　昌志（旭川中）

（旭川市・明星中　福澤　秀）

宗　谷

そうや本線を走る列車と
利尻岳（利尻富士）

宗谷校長会は、一〇市町村、五二校（うち単置中学校一七校、小中併置校五校）の校長で構成している。結成以来、「宗谷の風土に根ざした豊かな自然に育む子供」をテーマに掲げ、会員相互の研さんと職能向上に努めながら管内教育の充実・発展を図っている。

一　運営方針

1　校長としての使命を自覚し、自らの職能向上に努めると同時に指導性を発揮し、教職員の研修活動の活性化を図り、保護者や地域の期待に応える学校経営の充実に努める。

2　会員相互の理解を深め、活動の活性化を図り、宗谷教育の充実・発展に努める。

3　関係機関・団体との連携を図り、教育諸課題の解決にあたるとともに、教育条件整備に努める。

二　活動の重点

1　「生きる力」を育む教育課程の編成・実施・評価・改善に努め、愛情と信頼に基づく活力ある学校経営を推進する。

2　研修活動を充実し、職能向上と、教職員の資質・能力の総合的な向上に努める。

3　関係機関・団体と連携し教育諸条件と教育諸課題の改善と整備・充実に努める。

4　校長会の組織を強化し、活動の活性化を図る。

三　各部の活動

1　研究部

(1)　宗谷校長会の活動方針に基づき、事業計画を立て、その遂行にあたるとともに、地域社会の期待と要請に応え、教育課程についての研究と当面する教育課題に向き合う学校経営を究明する。

(2)　『自らの可能性を信じ、豊かな人生を切り拓いていく力を育む学校教育の推進』を研究主題とする第一三次三か年継続研究の二年目の取組を行う。「学校経営」「教育課程」「資質向上」に関わる信頼される学校づくりの共通課題を明らかにし、実践的研究の充実に努める。

(3)　関係機関・団体との連携を図り、宗谷における教育研究の一層の発展・充実に努める。

(4)　道小、道中、全連小、全日中の研究大会などに積極的に参加し、研究大会での提言については宗谷校長会として協力共同で取り組み、組織的な発表とする。

(5)　宗谷の重要課題である学力保障を推進するため『学力向上プラン』による実効性ある手だてを講じるとともにその有効性を常に評価検証し改善を図る。

2　経営・情報部

(1)　学校経営上の諸問題の解明に努める。

(2)　学校経営の管理運営に関する調査及び研究に努める。

(3)　意欲を高め、やりがいのある人間関係づくりのための学びを高める。

(4)　会報と会誌を編集・発行するとともに、各種原稿依頼に迅速に対応する。

3　対策部

(1)　関係機関・団体との連携を一層強め、会員の福利厚生の充実と向上を図る。

(2)　道小・道中からの諸調査を迅速且つ正確に行うとともに、本会独自の調査活動を必要に応じて行う。

四　役員一覧

会長	藤田　淳（拓心中）
副会長	桜井　和則（浜頓別小）
	畠山　博次（増幌小中）
	林　智宏（枝幸中）
事務局長	吉﨑　健一（潮見が丘小）
事務局次長	細谷　隆志（稚内東中）
	三野宮誠一（稚内南小）
	宮崎　哲也（中頓別小）
	塩原　悟（幌延小）
	黒木　敏郎（豊富小）
	森河　真（稚内中）
会計	中村　繁仁（天北小中）

（稚内市・稚内東中　細谷　隆志）

留　　萌

日本の夕日百選
黄金岬
（留萌市）

今年度の留萌管内小中学校長会は、石田会長の強いリーダーシップの下、「学び合い、高め合う校長会」をキーワードに、会員相互の信頼関係を基盤とし、本会の特性でもある小さな組織だからこその機動性と凝集性を生かしていくことを確認し、会の運営をスタートした。

また、今年度は、新たな研修制度や定年延長の初年度であり、「令和の日本型教育」の実現を目指すＩＣＴの積極的な活用、いじめ不登校対応の強化、働き方改革の一層の推進など多くの課題もある。改めて、校長のリーダーシップ、信頼される校長に必要な資質・能力は何かを明確にし、学び合い、高め合いながら、学校改善をより良い方向に図るために、業務を推進している。

一　運営方針

1　校長の使命と責任を自覚し自らの識見を高める研修の充実と情報の共有を図る。

2　会員相互の連携を密にして信頼関係を深め、組織の強化と活動の充実を図る。

3　物事や事象の変化に対し、柔軟な組織を確立し、先を見通した最善の対応を図る。

二　活動の重点

1　教育改革を具現化する学校経営に努める。

(1)　「生きる力」を育む創意ある教育課程の編成・実施と評価・改善

(2)　社会とともに子供を育てる開かれた学校経営の推進

(3)　いじめや不登校等の生徒指導上の諸問題への未然防止と迅速な対応

(4)　児童生徒の安全確保と危機管理体制の徹底・保持・充実

(5)　学校における働き方改革の推進による教育活動の質の維持・向上

2　研修活動の充実と環流に努める。

(1)　管内校長会教育研究協議会の開催

(2)　留萌地区教育経営研究会の開催

(3)　道小・道中・全連小・全日中大会への参加

(4)　新任校長研修会の開催

(5)　研究集録や会報などによる環流

3　組織の強化と活動の効率化に努める。

(1)　理事研修会の充実と市町村校長会との連携

(2)　各部及び各市町村校長会との連携

(3)　教育の諸課題に対する的確な対応

(4)　全道(国)校長会、管内教育関係機関、団体との連携強化

4　教職員の待遇改善に努める。

(1)　公平な教職員人事に関わる取組の推進

(2)　退職手当及び退職時の処遇の充実

(3)　再任用の拡大と再就職の促進

三　各部の活動計画

1　研究部

(1)　留萌管内小中学校長会教育研究協議会の開催

(2)　全連小・道中提言プロジェクト委員会の充実と研究推進

(3)　研究集録の発行

(4)　留萌管内教育研究団体連絡協議会の業務推進

2　組織部

(1)　留萌地区教育経営研究会の開催

(2)　教育条件整備や福利厚生の実態把握

(3)　組織・法則に関する研修会の充実

3　広報部

(1)　会報の発行・市町村会報の交流

(2)　道小・道中情報部との連携

四　役員組織

会　　長　石田　正樹（留萌小）
副　会　長　亀田　寛人（増毛中）
事　務　局　長　村井　　亨（小平小）
事務局次長　秋葉　良之（緑丘小）
会　計　委　員　矢藤　典彦（港南中）
監査委員長　藤田　智哉（留萌中）
監　査　委　員　早坂　　康（東光小）
研　究　部　長　小柳　　豊（遠別小）
組　織　部　長　山口　清敏（古丹別小）
広　報　部　長　関根　　智（羽幌中）

（留萌市・港南中　矢藤　典彦）

檜　山

瓶子岩
(江差町)

檜山校長会は、檜山管内七町の小学校一七校、中学校一〇校の校長で構成している。本会は、昭和二十三年の創立以来、管内教育の充実・発展のために研究と実践を積み重ねるとともに、教育条件の整備等に努めるなど、組織の総力を挙げて取組を推進している。

一　今年度の運営方針

教育界では未来を見据えて「社会に開かれた教育課程」及び「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す学習指導要領が改定される中、新型感染症の対策を講じながら学びの保障を図る「カリキュラム・マネジメント」が求められてきた。こうした中、「生きる力」を育む教育課程の編成・実施・評価・改善に努め、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実等、他者と協働しながら創造的に生きていくために必要な資質・能力の育成が求められている。

檜山校長会は、檜山の教育を恒久的に維持、発展させていくために協働で役割と責任を果たしつつ今日的な教育課題解決のために「ふるさと檜山に誇りを持ち、自己実現に向けて未来を切り拓く児童生徒」を育む学校経営の在り方を究明し、保護者や住民の負託と信頼に応える教育活動の推進ならびに充実・発展に寄与していくために次の活動を重点にしている。

二　今年度の活動方針（◎は今年度重点）

1　組織マネジメントを活かした活力ある学校経営の推進
2◎「生きる力」を育む適切な教育課程の編成・実施・評価・改善
3　時代の変化に即した生徒指導や特別支援教育の組織的推進
4◎教職員の資質・能力の総合的向上
5　服務規律の厳正な保持
6◎組織活動の活性化と充実（重点）
7　ミドルリーダーならびに管理職候補者の育成
8◎防災教育と健康安全教育の充実
9　学校における「働き方改革」の推進

三　主な各部の活動

1　経営部
⑴教育研究事業の推進
①檜山校長会教育研究大会の開催
②檜山校長会教育研究大会の事業反省と意見・要望等の調査
⑵道小・道中の調査協力等の連携
2　研修部
⑴檜山校長会研究計画の作成及び推進
⑵檜山校長会教育研究大会分科会運営及び大会集録の編集（今年度改革）
⑶全道・全国研究大会への参加集約
⑷道小・道中との連携
3　対策部
⑴各種調査に対する取組
⑵新採用校長研修会の開催・運営
⑶各種資料の収集と整備
⑷福利厚生的な活動及び道小・道中との連携
4　情報部
⑴檜山校長会誌『清風』の編集・発行
⑵道小「教育北海道」の執筆依頼・原稿の提出
⑶道中「道中だより」・「全道中」の執筆依頼・原稿の提出
⑷『清風』の復刻版の閲覧の実施

四　役員一覧

会長	谷口　光伸	（江差小）
副会長	笠松　靖史	（乙部小）
監査	石澤　修介	（上ノ国小）
〃	晴山　泰文	（明和小）
事務局長	佐藤　等	（館小）
事務局次長	宮腰屋　由	（乙部中）
事務局次長	中山　晴生	（河北小）
会計	関田　貴人	（上ノ国中）
経営部長	米谷　優	（江差北中）
研修部長	久慈　学	（今金小）
情報部長	黒川　貴功	（種川小）
対策部長	西山　恭史	（久遠小）

（江差町・江差中　福井　順一）

渡　島

会旗：「拓創」

渡島小中学校長会は昭和五十二年に渡島小学校長会と渡島中学校長会の統合により会員数一三二人でスタートし、今年度で統合四六年目を迎えた。一〇市町校長会で、小学校三六人、中学校一八人、小中併置校一人、義務教育学校一人の合計五六人の会員で組織されている。

今年度は大橋宏朗新会長のリーダーシップのもと、「オール渡島」をキーワードに、先輩諸氏が築き上げてきた実績と伝統を守りながら、渡島教育の更なる充実と発展に寄与したいと考えている。

一　運営方針

1　後継者育成に向けた取組の強化
2　「学校における働き方改革」の一層の推進
3　第六六回北海道小学校長会教育研究渡島・北斗大会に向けた運営・準備
4　研修活動の推進

二　活動の重点

1　新しい時代を担う渡島小中学校の学校経営の充実に努める。
2　時代の動向に合わせ、迅速な情報交流や協働の研修を進め、校長としての見識や指導力の向上を図る。
3　第六六回北海道小学校長会教育研究渡島・北斗大会へ向け、準備を万全に整え、運営にあたる。
4　次世代の渡島の教育を支える人材育成を図り、後継者育成を進める。
5　教育の動向を踏まえ、教育関係機関・団体及び地域との連携を強化し諸課題の解決に努める。
6　渡島の教育全体の動向を各々の学校に生かすために調査と情報発信に努める。
7　渡島小中学校長会会員の連携をより一層図り、組織の強化と充実に努める。
8　教育環境・諸条件の整備と福利厚生の充実に努める。

三　各部・事務局の主な業務計画

1　研修部
(1)　第一八期二カ年継続研究二年次の研究計画の策定と推進
(2)　Ｗｅｂ研修会の開催
(3)　研修部通信の発行
(4)　全日中研究大会提言内容の検討
2　経営部
(1)　総会・研修会における研修講話
(2)　各種調査の実施と協力
(3)　函館・渡島地区教育経営研究会参加
3　対策部
(1)　校長会全体のＩＣＴ活用に関する情報集約と発信
(2)　厚生事業の見直し
(3)　住宅要覧の新規・追加・修正
4　情報部
(1)　会報「渡島」、会誌「拓創」の発行
(2)　道小・道中広報部への協力
5　正・副会長、事務局
(1)　会務の推進・連絡・調整
(2)　予算・決算の作成、会計事務の執行
(3)　各種会議、研修会、研究会等の開催
・夏季・冬季教育研修セミナー
・新採用会員研修会
・諸機関・関係団体との研究協議会等
・函館・渡島地区教育経営研究会
・三地区校長会役員研修会
(4)　教育実践表彰の企画・実施
(5)　渡島管内教育関係管理職名簿発行
(6)　全道・全国校長会との連携・協力

四　役員一覧

会長	大橋　宏朗	（大沼岳陽）
副会長	西田　浩人	（八雲小）
副会長	後藤　正弘	（大野中）
監査	三宅　貴裕	（谷川小）
監査	小野　元嗣	（峠下小）
事務局長	金澤　力	（七重小）
事務局次長	伊藤　明彦	（森　小）
会計理事	柳澤　満	（知内小）
庶務理事	増田　正弘	（野田生中）
庶務理事	齋藤　政洋	（久根別小）

（北斗市・大野中　後藤　正弘）

函館市

金森倉庫群
(ベイエリア)

函館市中学校長会は、今年度一九人の会員（新会員七人）でスタートした。長谷川秀雄会長の力強いリーダーシップのもと、小規模校長会ならではの機動性を生かしながら、函館市の教育振興計画に基づき、会員の知恵と力を結集し自走することで、函館の教育の充実に寄与したいと考えている。

一　基本方針

1　校長会の組織を機能させ、一丸となって教育課題、経営課題の解決に努める。

2　全教育活動を通して「生きる力」を育む「信頼される学校」の創造に努める。

3　関係機関との連携を基に、教育課題の解決、教育条件の整備充実に努める。

二　活動の重点

1　関係機関、各種団体とのネットワーク及びCSを活かした学校力の向上

2　中学校教育の在り方についての研修と幼・小・中・高の連携強化

3　各種実践交流による校長のマネジメント力の向上

4　業務改善に向けての更なる改善と信頼される学校づくりの経営研修の充実

5　関係機関と連携した管理職後継者の育成

6　函館市の「教育振興基本計画」と自校の学校経営の融合と実践・検証

三　各部運営計画の概要

1　経営部

(1)　道中経営部との連携

(2)　運営要項の作成

(3)　小中合同特別研修への運営支援

(4)　後継者育成資料作成

(5)　函館・渡島地区教育経営研修会及び三地区校長会役員研修会への運営協力

(6)　学校管理・服務に関する情報提供

(7)　各校教育課程に関する調査とまとめ

2　研修部

(1)　道中研修部との連携

(2)　実践事例交流会の企画・運営

(3)　教育経営研修会(局長講話)への運営協力

(4)　渡島管内中高連絡協議会の計画・運営

(5)　道中研究大会参加・協力・提案概要説明

(6)　全日中研究協議会大分大会参加協力・提言発表

3　対策部

(1)　道中対策部・調査部との連携

(2)　道中等各種調査への協力・まとめ

(3)　函館市への予算要望調査の依頼及びまとめ、各部各課、教育長への要望

(4)　教育実習生の受入れに関すること

(5)　福利厚生に関すること

(6)　道中会報・会誌の原稿依頼

(7)　函館市中学校長会誌「桐影」第四三号の編集と発行

四　主な活動の概要

1　定例研修会

職能向上を図るため経営課題や教育問題の報告と協議を行い、円滑な学校運営の推進を目指し研修の成果をあげている。

2　経営研修会

各種研修会の性格に応じた講演や提言により今日的課題への理解を深めている。

五　役員一覧

会長	長谷川秀雄	(桔梗中)
副会長	佐藤　雅博	(巴　中)
副会長	池田　公貴	(港　中)
監査	吉田　敬三	(亀田中)
監査	仲井　靖典	(本通中)
事務局長	田上　直広	(湯川中)
事務局次長	山口　哲也	(尾札部中)
事務局次長	阿部　真之	(戸倉中)
経営部長	對馬　寿恵	(北　中)
研修部長	佐々木理之	(五稜郭中)
対策部長	三谷　龍司	(青柳中)

(函館市・湯川中　田上　直広)

空　知

空知校長会
シンボルマーク

空知校長会は、管内二四市町、小学校五五校、中学校三七校、義務教育学校一校の九三人の会員で組織されている。

本年度は、五年ぶりに、空知校長会研究大会を会同で開催し、各部会において、提言を受けた協議が活発に展開された。御来賓の皆さまからは、日頃の取組の評価とともに、子供のウェルビーイングを実現するための学校経営や組織マネジメントの推進、人材育成などについて、校長のリーダーシップを一層発揮することへの期待の言葉を直接頂いた。『チーム空知』として、確かな教育理念に基づいた課題解決と空知の教育の充実発展に、全力で向かう決意を新たにし、取組を進めている。

一　活動方針

1　空知の校長としての使命を自覚し、研さんに励み、学校の自主性・自律性を発揮して、学校経営の充実・発展に努める。

2　校長相互の連携を図り、組織の在り方を再検討する中で、組織運営の効率や業務削減、諸課題の解決に努める。

3　教育関係機関・団体と緊密に連携し、教育課題の解決にあたり、地域・保護者から信頼される学校づくりに努める。

二　活動の重点

1　学校経営の充実と諸課題の解決

2　研修活動と広報活動の充実

三　活動の具体策

1　適切な教育活動の編成と実施

2　成果をあげる学校マネジメントの実現

3　信頼に応える学校経営の推進

4　会員相互の協力と教頭会との連動による取組の推進

四　各部の主な活動

1　経営・対策部

(1)　学校経営研究会の開催

(2)　空知教頭会の研修等への支援

(3)　教育条件の整備拡充に資するための調査・要請活動

(4)　教職員人事の課題把握と対応

(5)　働き方改革の調査及び課題把握

(6)　当面の課題に対する対策と解明

2　研修・情報部

(1)　空知校長会研究大会の開催

(2)　各種校長会研究大会への参加

(3)　各種研究団体・研修会への協力

(4)　研修便りの発行

(5)　会報「空知野」の編集・発行

(6)　各種名簿・資料の作成・保管

(7)　道小・道中広報関係への原稿執筆

五　組織と役員

《空知校長会役員》

・会　　長　松本　伸彦（岩見沢小）
・副 会 長　疋田　博和（赤平小）
・副 会 長　鳥谷部賢太（由仁中）
・事務局長　伊藤　聰（岩見沢栗沢中）
・事務局次長　小玉　剛（栗山小）
・監　　査　髙羅　正次（長沼小）
・監　　査　髙岸　春二（赤平中）

〈経営・対策部〉

・部　　長　角銅　隆（岩見沢北村小）
・副 部 長　菊地　佳子（岩見沢北村中）

〈研修・情報部〉

・部　　長　竹内　結美（岩見沢豊中）
・副 部 長　和田　知子（浦臼小）

〈地区幹事〉

・北地区幹事　中嶋　利啓（深川音江小）
・中地区幹事　髙岸　春二（赤平中）
・南地区幹事　髙田　恭介（岩見沢上幌尚中）
・東地区幹事　鈴木　祐子（栗山角田小）

〈道小役員〉

・副 会 長　松本　伸彦（岩見沢小）
・幹　　事　髙原　直樹（滝川第二小）
・地区理事　角銅　隆（岩見沢北村小）

〈道中役員〉

・事務局次長　河村　克也（岩見沢東光中）
・幹　　事　坂本　征人（深川一巳中）
・幹　　事　小泉　寧（南幌中）
・地区理事　鳥谷部賢太（由仁中）

（岩見沢市・豊中　竹内　結美）

胆　振

樽前山
風不死岳から

胆振管内校長会は、管内一一市町、併置校一校を含め、小学校六〇校、中学校四〇校、義務教育学校三校の一〇三校、一〇三人の校長によって構成されている。一一市町中、苫小牧市が小・中ごとの校長会を組織しており、管内校長会としては一二校長会から成り立っている。

一　運営・活動方針

本会は、子供たち一人一人に「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」といった生きる力を育むとともに、保護者や地域住民の負託と信頼に応え、管内教育の充実と発展のために努力を積み重ねてきた。今年度は、授業改善を中核に据え、教職員の職能の向上、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実、いじめ・不登校への迅速柔軟な対応、インクルーシブ教育の拡充を推進する。

家庭・地域と連携・協働し、未来社会を切り拓く資質・能力を身に付けた児童生徒の育成を中核に据えた教育活動を展開している。

1　活動方針

(1)　校長としての識見・能力を高めるため、自ら研さんに励むとともに組織のリーダーとしての指導力を培い、時代の要請や学習指導要領の目標を実現するため、「チームとしての学校」への改善充実に努める。

(2)　会員相互の信頼関係を基盤として、組織の充実・強化に努めるとともに、校長会の総力を結集して、迅速且つ適切に諸問題の解決に努める。

(3)　教育関係機関や諸団体との連携を強化し、働き方改革など、今日的な課題の解決に努める。

2　活動の重点

(1)　校長としての職能向上を図る研修の充実

(2)　学校経営の適正化を図る研究・実践及び教育条件の整備・充実

(3)　教職員の意識改革と資質・能力の向上による学校改善と働き方改革の着実な推進

(4)　後継者育成に向けた事業の推進

(5)　道小・道中、第四ブロック、各市町校長会との組織的な連携の重視と行政機関並びに関係団体との連携の強化

(6)　会員同士の親睦と福利厚生の充実に関する事業の推進

(7)　諸事業の機能的・効率的な運営改善と予算執行の適正化

二　各部の事業推進概要

1　研修部～研修の活性化と職能向上

2　経営部～組織・法制上の諸問題、法令法規の情報収集、組織力の強化

3　対策部～各種調査、福利厚生事業推進

4　情報部～会報・会誌「響箭」の発行

三　役員名

会　　長　瀧澤　義守（幌別中）
副　会　長　圓山　芳史（緑小）
　　井内　宏磨（明野中）
運営委員　中島　勉（美園小）
　　渡辺　敬方（星の丘小中）
事務局長　大谷　昌史（八丁平小）
事務局次長　近藤　大作（伊達市東小）
　　細部　善友（開成中）
研修部長　毛利　毅（拓進小）
経営部長　森田　芳明（拓勇小）
対策部長　小原　毅（幌別西小）
情報部長　小野由美子（蘭北小）
会　　計　仲見　真樹（白老小）
　　荒木　英弥（鵡川中央小）

（安平町・早来学園　山田　誠一）

日　高

2021年3月31日に
廃線した日高本線の
懐かしの風景

日高地区校長会は、管内の小・中学校三九校（中学校一五校）の校長で組織している。本年度の重点目標は、「日高管内の教育課題の達成のために、校長の職能向上を図りつつ、積極的に提言、発信、行動する校長会を実現する」ことを掲げ活動している。

活動の推進にあたっては、道小・道中や教育局、教委連、各町教委とのつながりを大切にし、校長会員の声を積極的に伝えるよう努めた。また、会員相互の情報交流を一層密にすることで「情報の共有化」を図り、課題を共有しながら取組を進めてきた。

一　活動方針・重点

1　ウィズコロナ時代を踏まえた信頼と秩序に基づく学校経営の推進

2　社会に開かれた教育課程の編成・実施・評価・改善

3　教職員の資質・能力の向上と後継者育成

4　研修活動による職能向上と組織体制の強化

二　各部の活動

1　研修部

今日的な管内状況を踏まえ、新しい時代や社会の要請に対応した「『学力向上』と『組織力向上』の実現に向けた校長のリーダーシップ」を今年度から新たな研究課題とし、研究活動を通して、校長の指導性の向上を図るための研修を推進している。この課題は、昨年度までの研究活動を継続・深化させて設定しており、個人研究と組織研究を関連づけて進めている。

また、会員相互の研修を深めるために、研究活動の実践状況の交流・協議・検証の場として、「日高管内小・中学校長研修会」、「課題別研修会」を開催した。今年度はどちらの研修会も全員が参集して行うことができ、大変有意義なものになった。

2　法制・広報部

教育経営・法制研修会については、二年連続全員参集して開催することができた。当日は、道小・道中の役員の方々より情勢報告をいただいた。またその後、「学校におけるハラスメントとスクールロイヤー活用事例」について、地元の弁護士から講話をいただき、校長としての見識を広げ、校務推進にあたって大変有意義な研修会となった。

校長会員の連携を高める会報「採用校長の決意」と広報誌「教育ひだか」の発行は予定どおり行った。

3　調査・厚生部

学校経営に必要な調査を道小・道中と連携しながら情報の共有化を図った。福利厚生については、主体的に研修を深め、厳しい共済制度に対しても見通しをもち、支援を進めている。

4　その他

地区校長会では、「次代を担う後継者の発掘と育成の取組」として、『人材リスト』を作成し、後継者の育成に長年役立てている。このリストは、歴任校や経験年数、主任経験や分掌経験等から適任者を判断し、当該校長との面接や推薦などを通し教頭受験者数を増やすために行っている。現在は、その効果もあって、管理職のなり手が少ないという事態を脱した。しかしながら、今後は、教頭の資質・能力向上の取組も必要に感じている。

三　役　員

会　　長　品田　和輝（浦河堺町小）
副 会 長　盛永　明寿（富川中）
副 会 長　玉手　広昭（静内小）
事 務 局 長　小嶋　範彦（静内三中）
事務局次長　川野　靖幸（静内中）
事務局次長　鈴木　晋作（高静小）
会　　計　木田　理博（平取小）

（様似町・様似中　松田　陽一）

十　勝

秋の十勝平野

十勝地区は、管内一八町村の小・中学校長九一人で構成されている。本校長会は「校長の教育実践指標」を掲げ、会員相互の研さんに励むとともに、公教育の役割と使命の高揚に努めてきた。そして、創意と工夫に富んだ学校経営と教育活動の推進で、十勝教育の充実・振興に多くの成果を挙げてきた。

また、校長一人一人が一校を預かる責任者であり、「子供の成長に責任を負う」という姿勢の下、十勝教育の推進・発展に寄与するよう努めてきたところである。

今年度は、子供たち、教職員のために「学び続ける校長」をテーマに、「十勝らしい一人一人の学びの実現」を目指し、保護者・地域とともに「子供の確かな育ちの創出」に努めてきた。

一　活動方針・重点

1　信頼に基づく創意工夫に満ちた活力ある学校経営に努める。

2　協働体制の確立と信頼関係の深化を図り、組織体として機能の充実に努める。

3　研修を深め、主体性を確立し、教育上の諸問題の解決に努める。

4　地域社会・関係機関との連携を強化し、教育諸条件の整備に努める。

5　待遇改善・福利厚生等の向上を図るため、情報交換と要望活動の充実に努める。

二　各部の活動（予定していた主な業務内容）

1　研修部

(1)　第一九次教育研究三か年計画一年次の推進～第五五回十勝小・中校長会教育研究大会の開催～

(2)　教育研究大会の研究収録の発行

(3)　道小・道中研修部との連携～地区活性化支援事業への参加等～

(4)　全国・全道校長研究大会への参加促進

(5)　情報紙等を通した教育情報の提供

2　経営部

(1)　第五七回十勝・帯広地区教育経営・法制研究会の開催

(2)　「学校経営等調査」の実施と調査報告書の発行

(3)　北海道教育公務員弘済会との連携～教育研究実践校助成事業等～

3　対策部

(1)　「十勝教育・学校の顔」の発行

(2)　「教育懇談会」の運営

(3)　「退任校長感謝激励の会」の運営

(4)　令和五年度「十勝・帯広　校長・教頭・主幹教諭名簿」の発行

(5)　全道・管内学校給食研究協議会への協力

4　情報部

(1)　会報「十勝川」の発行～年間三回～

(2)　各町村校長会情報部との連携、各種情報の提供

(3)　道小会報、道中会報等への寄稿

三　諸会議

1　総会（四月）活動計画・予算・役員

2　町村会長会議（年一回）・事務局長会議（年二回）

3　評議員会（年一回）

4　常任委員会（月一回）

四　十勝小・中校長会役員

会長	中村　俊緒（池田中）
副会長	野村　勉（木野東小）
副会長	久保　睦則（札内中）
事務局長	森　浩嘉（幕別小）
次長	佐々木典郎（共栄中）
会計長	伊藤　道彦（豊頃中）
会計次長	笠松真一郎（豊頃小）

五　役員一覧

代表者	中村　俊緒（池田中）
事務局長	久保　睦則（札内中）
会計担当	笠松真一郎（豊頃小）
研修担当	新倉　忠司（上士幌中）
経営担当	伊澤　理紀（陸別中）
対策担当	中井　哲（足寄中）
情報担当	森　英樹（中札内中）

（音更町・共栄中　佐々木典郎）

帯広市

ばんえい競馬

帯広市中学校長会は、大空学園義務教育学校を含む一四校の校長で構成している。今年度は、新会員四人を迎え、村松正仁会長を中心に、一枚岩となり諸課題に取り組んでいる。

はじめに

帯広市中学校長会は、全日中新教育ビジョン「学校からの教育改革」、帯広市教育基本計画の理念「ふるさとの風土に学び　人がきらめき　人がつながる　おびひろの教育」、帯広市中学校長会の方針「校長職　学び専門性を高め合う校長会～専門職としての校長像を確立し、その力量を高め、特色ある学校づくりを進める～」を踏まえ、校長としての主体性と指導性をもち、中学校教育を推進し、帯広市民の負託に応えていく。

一　運営方針

1　校長相互の協力や信頼関係を深めるため、対話や議論を大切にする。

2　帯広市教育委員会をはじめ、全日中、道中、管内小・中学校長会、中高特連絡協議会等の教育関係諸機関・諸団体と緊密に連携し、教育課題の解決にあたる。

3　教育者としての校長、管理者としての校長を自覚し、学び続ける。

4　アフターコロナの学校経営を進めるため関係機関と連携する。

二　活動の重点（今年度の重点課題）

1　中学校長会の組織を強化し、活動の充実に努める。

(1)　校種間の学びをつなぐ取組の充実・行動連携（エリアファミリー、小中一貫教育）

(2)　危機管理上の迅速な対応（中学校長会ならではのスピード感を生かした協力体制）

(3)　教育機関、道中・十勝小中校長会・公私立高校等との連携強化

(4)　職能を高める研修の実施

2　教育課題の解決を図り、学校経営の改善に努める。

(1)　社会に開かれた教育課程の実現（閉ざされていた教育の姿を想像する。コミュニティ・スクールの活用）

(2)　教職員の服務規律保持の徹底（同僚性の発揮）

危機管理・コンプライアンス・・・日常の研修

不祥事ゼロの取組・・・ＫＴＳＢＡ（交通事故・違反、体罰、セクハラ、暴言・安全管理）の誓いの取組

(3)　働き方改革の推進

北海道アクション・プラン、帯広市立学校における働き方改革推進プランの推進、部活動休養日の完全実施、定時退勤日の完全実施、学校閉庁日の設定、校務運営システムの積極的活用

3　教育課程の整備・充実と地域に根ざした学校づくりに努める。

(1)　生徒指導提要に基づいた、支える生徒指導の周知と実践

(2)　ＧＩＧＡスクール構想に基づいた個別最適な学びの実現

(3)　いじめ・不登校の問題への適切な対応と生徒指導体制の強化

(4)　多様化した高等学校教育並びに入学者選抜方法への適切な対応

4　円滑な教育活動推進のための教育諸条件の整備・充実に努める。

(1)　教育委員会との連携、人事異動要綱に基づく適正な配置

(2)　特別支援教育の充実のための教育課程編成

(3)　教頭、主幹教諭等候補者の人材発掘

三　役員

会　　長　村松　正仁（大空学園）
副　会　長　能戸　貴英（南町中）
事務局長　堂山　貴也（帯一中）
事務部長　嶋　　健（西陵中）
研修部長　今野　典之（翔陽中）
会　　計　髙橋　　譲（帯五中）

（帯広市・翔陽中　今野　典之）

釧　路

釧路湿原の神
「タンチョウ」

釧路校長会は、令和五年度、採用一一人の新会員を迎え、六町一村、四四人（小学校長二二人、中学校長一六人、小中併置校長四人、義務教育学校長二人）で構成している。

今年度、齋藤超会長を中心に、本会が歴史的な背景をふまえて作り上げてきた釧路校長会の理念『調和のある学校運営を目指して』の方針を全体で確認し活動を開始した。

一　基本方針

本会は、常に「釧路校長会綱領」を基底に、釧路の教育の発展・充実に期する「学校経営にあたっての基本的な姿勢」を示す「五つの柱」を堅持して「調和のある学校運営」を目指すとともに、子供のために最善を尽くす校長会として、各町村校長会や教育関係機関等との連携をより一層強化し、管内的な取組を通して課題解決に努め、以て、保護者や地域社会の負託に応え信頼される学校経営を推進するよう努力する。

【釧路校長会綱領】（平成二年三月　制定）

私たちは釧路教育の充実、発展に枢要な役割を果たし、子供の未来に責任を負う者として、ここにこの綱領を定める。

一、校長の使命を自覚し、常に厳しい自己研さんに努める
一、情熱と強固な意思をもって、公教育の推進に努める
一、たがいに強い連帯感をもって、職務の遂行に努める
一、職員相互の信頼関係を基盤とした学校経営に努める
一、釧路の風土に生き、未来を拓く子供の育成に努める

二　本年度の運営方針

1　校長としての経営ビジョンを明確に示し、その職責の重さを自覚して「釧路の風土に根ざす学校づくり」の経営感覚を磨き、その実践力を高めるために職能の向上に努め、諸課題を解決する。

2　教職員として服務規律を徹底し、地域や保護者からの信頼や期待に応え、「子供たちや教職員が明るく、楽しく学べる環境づくり」を志向する学校経営に努める。

3　新しい時代に求められる資質・能力など児童生徒の「生きる力」を育成する学習指導要領の確実な実施に向けて、授業改善やカリキュラム・マネジメントの確立等の取組を進め、自校の教育活動の質の向上を図る。

4　教育関係諸団体、特に町村教育委員会と町村校長会との連携協力を密にし、教育の動向や情報を共有して諸問題への対応と解決に向け迅速に行動する。

5　釧路校長会綱領を基底とし、会員個々の意識を高め相互に連携・協働を図りながら、各校の調和のある学校運営を目指す。

三　活動の重点

1　学校経営の充実
2　創意ある教育活動の推進
3　研修活動の推進
4　組織の充実と強化
5　関係機関・諸団体との連携強化

四　役　員

会長	齋藤　超	（釧路町立別保小）
副会長	富田　和幸	（標茶町立標茶中）
〃	大西　展史	（白糠町立庶路学園）
事務局長	田中　敏行	（釧路町立富原小）
次長	須藤　光秋	（白糠町立白糠学園）
会計	長谷川順子	（鶴居村立下幌呂小）
釧研所長	斉藤　直彦	（厚岸町立真龍小）
監査	水野　秀哲	（釧路町立富原中）
〃	山野　哲也	（白糠町立茶路小中）
研修部長	中岡　美緒	（標茶町立虹別小）
経営部長	渥美　清孝	（弟子屈町立弟子屈小）
対策部長	藤田　崇充	（釧路町立別保中）
情報部長	名和　勝紀	（浜中町立茶内中）

（標茶町・標茶中　富田　和幸）

釧路市

釧路市内の春採公園に
生息するシマエナガ

令和五年度釧路市中学校長会は、七人の新会員を迎え、一五人（併置校・義務教育学校各一校）でスタートした。佐藤会長のもと、今日的な教育課題や生徒指導上の諸課題について、具体的な事例をもとに研究協議を行い、校長としての資質能力の向上に努めている。

一　活動方針（概要）

1　釧路市小中学校校長会の「基本方針」を踏まえ、教育改革の推進と教育課題を勘案しながら、校長としての職能向上を図るため、組織的研究に努める。

2　道中・全日中などの基本課題に基づき、二一世紀を担う日本人の育成を目指して、学校経営の活性化と経営の充実に反映する研究を推進する。

二　活動の重点（概要）

1　学校経営

(1)　小中一貫教育の推進と義務教育学校の設置に向けた、義務教育九年間で育成する資質・能力を踏まえた「小・中ジョイントプロジェクト」の推進

(2)　「確かな学力」の確立に向けた授業改善への取組の充実と家庭学習を含む基本的な生活習慣の確立

(3)　ＧＩＧＡスクール構想の推進

(4)　個の教育的ニーズへの対応を図り、関係機関との連携を一層進める特別支援教育の充実

(5)　いじめ・不登校を含む生徒指導上の問題や学級内の諸問題への迅速な対応（アセス・Ｑ―Ｕの活用）と、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養う「道徳科」の授業の充実

(6)　健やかな体の育成を図るための運動習慣の改善と食育の推進

(7)　釧路市立小中学校における働き方改革アクション・プランの取組を軸にした働き方改革の推進

(8)　教職員の学校経営参画意識や学校改善意識の啓発

(9)　高等学校、特別支援学校との連携

(10)　地域の教育力を生かしたコミュニティ・スクール、地域学校協働本部事業、学校運営協議会や学校支援ボランティア及び教育大学釧路校フィールド研究・学生ボランティア等の有効活用

2　研修

(1)　教育界の動向と教育課題を勘案した計画的・継続的な研修の充実

(2)　職能向上のための全体研修会・校種別研修会の企画と開催

3　組織運営

(1)　学校運営に関する法制問題の調査研究

(2)　後継者育成のための職能向上を図る研修の充実

4　教育条件

(1)　行政機関（教育局・教育委員会）との連携強化

5　厚生

(1)　会員や教育関係者等との相互理解と連帯感の高揚

三　主な活動

1　釧路市全体のキャリア教育の推進

2　釧路市中学校教育課程改善研修の実施

2　中高特連絡協議会の企画・運営

4　学校経営研究協議会の実施

5　中学校長研修の実施

6　道中・全日中研究大会への参加

7　生徒指導情報交流

四　役員

会　　長　佐藤　英樹（山花小中）
副　会　長　藤森　健浩（青陵中）
事　務　局　長　小玉　　功（幣舞中）
事務局次長　林　　政孝（大楽毛中）
会　　計　田中　君枝（共栄中）

（釧路市・幣舞中　小玉　功）

根　室

明治公園のサイロ
（根室市）

一　はじめに

根室管内校長会は、管内に義務教育学校の設置が始まったことを踏まえて、名称を根室管内小中学校校長会から根室管内校長会に変更した。今年度、新採用校長七人を迎え、「継承と発展」を合い言葉に、管内教育の振興にあたってきた。全四〇校の校長がそれぞれ「チーム根室」を意識し、今年度をアフターコロナ元年と位置付け管内教育の質を高めるために、既存の取組（継承）にこだわらず、新しい発想（発展）で管内教育の課題解決に向けて、根室教育局及び管内教頭会とも連携して活動を進めてきた。

二　運営方針

1　教育をめぐる諸情勢を的確に捉えるとともに、校長の抱える問題を組織として共有化を図り、その解決に向けた情報提供や解決策の提案に努める。

2　信頼される公教育の確立を図るとともに、関係諸機関との連携を深め、国や道の諸改革の動向を踏まえて適切な対応に努める。

3　校長の経営力の向上を図り、地域に開かれた学校経営の改善・充実に努める。

4　会員相互の連帯意識を強め、信頼関係を基盤にした、強固な組織体制作りに努める。

三　活動の重点（概要）

1　家庭や地域社会に信頼される学校
(1)　教職員の資質・能力の向上
(2)　家庭や地域社会との連携・協力の強化
(3)　教育委員会等との関係の強化
(4)　法規や服務規定に基づいた経営の推進
(5)　今日的課題に向けた組織体制の充実

2　社会に開かれた教育課程の編成・実施・評価・改善
(1)　特色ある教育課程の編成・実施
(2)　学力向上に向けた組織的な取組
(3)　道徳教育・健康教育の充実
(4)　北方領土学習・ふるさと学習の充実
(5)　地域社会の人的・物的資源の効果的活用

3　研修活動の推進
(1)　カリキュラム・マネジメント等における研修の充実
(2)　根室管内校長研究大会及び地区教育経営研究大会開催と内容の充実
(3)　全道や全国の研究大会への積極的な参加
(4)　今日的な課題に対応する研修計画推進

4　教育諸条件の整備・充実
(1)　後継者育成の推進
(2)　人事課題に対する意思集約と発信
(3)　女性活躍推進

5　教職員の待遇改善への働き掛け
(1)　管理職の抜本的待遇改善
(2)　教職員の健康管理、働き方改革の推進
(3)　事務や栄養職員、退職者等の処遇改善

6　業務見直しと組織強化
(1)　活動の充実及び組織・事業の改善
(2)　組織的な情報収集と的確な情報提供
(3)　各種調査活動の協力と推進
(4)　関係機関や諸団体との連携
(5)　適正な予算執行に向けた見直しと改善

四　主な活動内容

1　根室管内校長研究大会
(1)　研究テーマに沿った学校課題を管内教育推進の重点及び管内教頭会のレポートと関連付け作成し、協議した。

2　定例理事研修会の開催
(1)　各市町単位校長会の活動を交流し、課題と改善策について協議した。また、北海道教育庁根室教育局から教育の動向や今日的課題について情報提供を頂いた。

3　「チーム根室」の取組
(1)　授業改善に向けた授業アンケート「自分をフリカエル」の実施と管内教頭会や北海道教育庁根室教育局と連携した。

五　令和五年度役員体制

会　　長　近藤　康（別海・上西春別小）
副 会 長　根本　渉（別海・別海中央小）
副 会 長　古森　康晴（中標津・中標津東小）
事務局長　齋藤　征志（根室・光洋中）
会　　計　岡部　臣也（別海・上風連中）

（根室市・光洋中　齋藤　征志）

オホーツク

ヒグマの親子
（知床にて）

オホーツク管内校長会は、オホーツクの教育の充実・発展のため、心豊かでたくましい子供の育成に鋭意努力を重ね、組織の総力を傾注して研究と実践に努めてきた。

今年度は、小学校七一校、中学校四三校、小中併置校一校、義務教育学校四校の計一一九人の校長で組織されている。

これまでの成果を踏まえ、「オホーツクの子供たちのために、志を高く掲げ、力強く前進する校長会」のスローガンの下、創意と活力に満ちた学校づくりに努めている。

一　活動方針

1　ふるさとの地から世界を見つめ、新しい社会の形成に向けて挑戦する児童生徒を育成するため、「チームオホーツク管内校長会」として、関係機関との連携をより一層強化し、管内的な取組を通して課題解決に努め、以て、地域・保護者の信託に応える学校経営を推進する。

2　自らの使命を自覚し、指導力を発揮して、学校組織の活性化と教職員の資質・能力の向上等に努め、能動的で活力ある学校づくりに全力で取り組む。

二　活動の重点

1　愛情と信頼に基づく、活力ある学校経営の推進に努める。

2　「生きる力」を育む教育課程の編成・実施と評価・改善に努める。

3　児童生徒理解を深め、時代の変化に即した生徒指導の充実や特別支援教育の組織的な推進を図る。

4　校長の資質・能力の向上を図る研修活動の推進に努める。

5　教職員の資質・能力の総合的な向上に努める。

6　組織内や関係機関との連携による組織の強化に努める。

7　管内教育をめぐる教育諸条件を把握し、その改善と整備・充実に努める。

8　教職員の処遇の改善に努める。

三　各部の活動計画

1　研修部

(1)　第五一回　オホーツク管内校長会教育研究大会

(2)　各ブロック・市町村研修会の推進

(3)　道小・道中全道大会、全国研究大会への参加促進と研究交流

(4)　教育課程に係る調査への協力

2　情報部

(1)　「会員の顔」の発行

(2)　道小・道中及び全連小・全日中と連携した広報活動

(3)　ホームページの更新

3　経営部

(1)　地区別教育経営研究会の開催

(2)　学校経営に関する調査の実施

(3)　管内における諸課題の把握と分析

4　対策部

(1)　管内の教育課題を集約した学校経営資料の提供

(2)　道小・道中関係の諸調査への協力

四　役員一覧

会長	徳増　秀隆	（北見小泉中）
副会長	鈴木　義樹	（紋別南丘小）
〃	仲野　寿浩	（網走第一中）
監査委員	加藤　弘一	（訓子府小）
〃	太田　依里	（遠軽生田原中）
事務局長	天野　昌明	（北見小泉小）
事務局次長	伊井　俊明	（北見北光小）
〃	河村　一恵	（網走白鳥台小）
〃	橋本　正之	（訓子府中）
〃	藤田　哲也	（北見南中）
会計	宮崎　浩	（おんねゆ学園）
研修部長	鈴木　聡	（知床ウトロ）
情報部長	尾島　康人	（北見相内中）
対策部長	川合　伸幸	（紋別小向小）
経営部長	髙橋　良幸	（北見留辺蘂中）

（北見市・南中　藤田　哲也）

札幌市

モエレ沼公園
（ガラスのピラミッド）
ＨＩＤＡＭＡＲＩ

札幌市中学校長会は、市立中学校九六校と、今年度開校した義務教育学校・福移学園、北海道教育大学附属札幌中学校、北翔支援学校、市立札幌開成中等教育学校を加えた、計一〇〇人の校長で構成されている。

今年度も、小澤保範会長の下、副会長六人、会計一人、事務局長一人が役員として会務を担うとともに、各部部長七人、監査委員二人、事務局員七人の計二五人で理事研修会の運営にあたる。

一　活動方針

市民の負託に応え信頼される中学校教育を推進すべく、「教育の動向を的確に捉える、保護者や地域、関係機関等との連携を図る、会の組織と機能を一層充実させる」を基本に校長としての研さんと職能の向上を目指す。また、「学びの保障と小中一貫した教育の推進」、「学校における働き方の見直し」等を含め、今年度の重点項目は次の四つである。

・校長会の組織・運営の強化と研修の充実
・学校経営の改善と充実
・学校経営の条件整備と教職員の待遇改善
・教育関係機関や諸団体との連携強化

二　各部会の運営の方針

〈管理部〉
・学校経営上の管理、運営についての現状把握と分析を行い、課題の解決を図る。

〈施設部〉
・長期的展望に立った学校施設・設備の整備・充実及びＩＣＴ教育に関わる施設・設備や学習環境に関する諸課題の改善・充実に努める。

〈研究部〉
・研究基本主題による共同研究を総括し、校長としての職能向上を目指すことにより、中学校教育の充実・発展に努める。

〈指導部〉
・生徒の実態を的確に捉え、問題行動の質的変化にも適切に対応できる生徒指導の在り方について検討する。

〈保健体育部〉
・全市的立場で生徒の心身の健康保持、増進と体育・スポーツの充実発展を図る。

〈進路指導部〉
・新たな価値を見いだし、持続可能な社会を創る力を育むキャリア教育の充実を図り、適正な学校経営を行うための研究と条件整備にあたる。

〈特別支援教育部〉
・特別支援教育に関する諸課題について研究協議し、その推進と充実を図る。

三　具体的な運営・活動

1　「例会・研修会」は全員出席の会議とメール会議を合計年一〇回予定している。

2　「理事研修会」は、例会・研修会の前週に二五人の理事の出席で開催され、運営に関する協議、議題の整理等を行う。

3　「部会」（七部）は、年間数回設定され、担当する諸課題に取り組んでいる。

4　「各区校長会」（一〇区）は、行政区ごとに設置され、区内の情報交流や課題に応じた協議、検討、研修等を行っている。

5　「学教連絡会」では、毎月、幼小中高の四種校長会等の代表と市教委が、情報交流等を中心に連携を深めている。

6　「小・中学校生徒指導特別委員会」は、小・中校長会代表と関係機関で構成され、生徒指導上の諸課題について、連携・協力を深めている。

四　研究活動

昨年度は、全日中研北海道（札幌）大会を中心に職能の向上に努めた。今年度からは、研究基本主題「新たな価値を見出し、持続可能な社会を創る力を育む札幌市中学校教育」を掲げ、三年継続研究を推進する。七つの部が教育課程や学校経営、生徒指導、教育環境等の視点から課題の究明に取り組む。

また、札幌市中学校長会は、政令指定都市中学校長会で構成する「大都市中学校長会連絡協議会」に加盟している。今年度の静岡大会には一〇人が参加し、大都市が抱える教育課題について情報交換と協議を行った。

（札幌市・もみじ台中　木原　英俊）

北海道風土記

真簾沼　空沼岳にて

ノゴマ　はまなすの丘にて

エゾシマリス　アポイ岳にて

ゴゼンタチバナ　神居尻山にて

チングルマ　北海岳にて

コメバツガザクラ　樽前山にて

ツバメオモトの実　イワオヌプリにて

カラマツソウ　羊蹄山にて

キクザイチゲ　昆布岳にて

美しき空のまち しんしのつ

新篠津村・新篠津中
寺嶋裕介

新篠津村は、石狩平野の西部に位置し、北は月形町、西は当別町、南は江別市に囲まれています。人口は約二、八〇〇人と少ないですが、多くの分野に力が注がれており、魅力的なまちとして発展しています。農業を主産業に発展してきましたが、美しい自然環境を活かした観光も地域を支える重要な要素となっています。住民も温かく、村全体で子供たちを育てようと教育環境も充実しています。

【新篠津の歴史】

現在の新篠津の環境を築くまでには先人たちの大きな努力がありました。泥炭と洪水に苦しむ過去から抜け出し、土地改良を通して美しい田園地帯として再生するため、世界銀行の支援を受け、運河を掘り、新たな土地を築きあげました。これらの苦労と努力を経て、今では実り豊かな農村地帯となり、秋には黄金の稲穂が広がっています。近年は、麦・豆・野菜・花卉などの作付けもしながら、「土づくり」「人づくり」を柱としたクリーン農業の実践に取り組むなど、持続可能な農業に焦点を当て、村の発展のために挑戦し続けています。

【新篠津の見どころ】

札幌近郊で大自然を楽しめる利点を生かし、様々な観光スポットやイベントがあります。

【たっぷの湯（道の駅併設）】

源泉かけ流し一〇〇％の温泉で元々人気スポットでしたが、アクティビティの充実もあり、近年は毎週末、親子連れで賑わいます。敷地内の施設を紹介します。

・温泉　宿泊可能。村の住民は毎月二回無料で入浴できる特典
・レストラン　地元のお米や野菜をふんだんに使用した料理を楽しめる。村の住民はランチ三〇％オフの特典
・産直市場　隣接。お米・野菜等の特産品が購入できる
・アクティビティ　夏：キャンプ・ボート、冬：グランピング・ワカサギ釣り等、年中遊べる（近くにゴルフ場もある）

【美しき空のまち】

高い建物や山がなく、全域が平坦な地形を生かし「美しき空のまち」をテーマに村のイベントや観光スポットをデザインしています。

○グライダーの搭乗体験　予約不要：地域内でも珍しいアクティビティ
○青空祭り　村の伝統行事。餅まき、花火、山車等、終日見どころ満載
○ランタン祭り　ランタン、アイスキャンドル、犬ぞりレース等、盛り沢山
○しんしのつ天文台　十月オープン。道内初フルオープン式。道央圏最大級。村の地形や光源の少なさから夜になると肉眼でも多くの星座を楽しむことができる

新篠津は季節や時間を問わず、大自然の魅力を楽しむことができる場所です。

【教育】

教育環境も充実していて、小中一貫教育やコミュニティ・スクールの仕組みを生かし、村全体で子供を育てていく意識が高いです。また、施策だけでなく、物理的な支援も充実しています。

○ＩＣＴ環境の充実　ｉＰａｄ（小学校入学から中学校卒業まで個人管理）、ロイロノート、ＡＩドリル、村内公共施設のＷｉ-Ｆｉ完備等
○エアコン完備　令和二年から小中ともに普通教室・職員室等に設置され快適な環境
○小中のグラウンド天然芝　定期的に芝の整備。エスコンフィールドに負けない環境

小樽市歴史探訪

小樽市・西陵中
吉岡智尋

小樽市は、昨年に市制一〇〇周年を迎えた北海道でも歴史のある街だ。明治に蝦夷地を北海道と改め、本府を札幌に定めると、海の玄関口である小樽に人や物が集まった。そのため、今も明治から昭和初期に建てられた建造物が多く残り、観光スポットとして人気がある。今回は、運河や日本銀行旧小樽支店等の有名な建造物ではなく、勤務校周辺の少々ディープな建造物を紹介する。

【量徳寺】

この寺院は、安政元年に建てた草庵が起源とされている。明治五年に現在地に移転し、明治二十年と戦後に現在の本堂を再建している。新撰組の二番隊組長及び撃剣師範を務めた永倉新八の菩提寺でもある。晩年の永倉新八は、現在の市役所付近に居を構えており、「水天宮の境内で孫と剣術の稽古をしていた」、「映画館の出口で地元のヤクザにからまれたが、鋭い眼力と一喝で退散させた」等のエピソードを残している。量徳寺には、永倉新八に関連する小さな資料館が設置され、自由に見学することができる。

【龍宮神社】

龍宮神社は明治九年国有地払い下げの折に榎本武揚が移民の安意を図るため「北海鎮護」と献額し社を建立したことに始まる。明治天皇北海道御巡幸の際、随行された有栖川宮熾仁親王より「龍宮殿」と直筆の揮毫を頂き、明治一五年に社名とし、龍宮殿と称した。つまり、龍宮神社は旧幕府軍の総大将榎本武揚が建立した神社である。榎本家には隕石を材料にして作った刀剣である「流星刀」が代々伝わっていたが、平成二十九年龍宮神社に奉納された。

【魁陽亭(海陽亭)】

旧魁陽亭は、現在地に建てられた明治初期以来、「魁陽亭」「開陽亭」「海陽亭」と三度名前を変え、平成二十七年の閉店まで一五〇年近く営業していた北海道最古の料亭である。北前船主をはじめとする船乗りたちに親しまれた料亭だったことから、平成三十年には「北前船」日本遺産の構成文化財に認定された。榎本武揚、伊藤博文ら著名な政治家、日露戦後、小樽で開催された「樺太境界画定委員会議」後の祝宴、俳優の三船敏郎、石原裕次郎、作家の山口瞳らが度々訪れていたなど、著名人たちをはじめ、ゆかりの人物に関する逸話や資料が数多く残っている。

【旧渋澤倉庫】

南北に湾曲して走る小樽運河の北部は、通称「北運河」とよばれている。中でもひときわ目立っているのが、明治中期に作られた「旧渋澤倉庫」である。「日本資本主義の父」と呼ばれる渋沢栄一は、来年発行の新一万円札の肖像画になるが、多くの会社を創業、経営をしたことで知られている。倉庫業については「渋沢倉庫株式会社」を設立し、東京以外で初めて支店として小樽に進出している。その倉庫は、小樽市の歴史的建造物に指定され、最近はテレビや雑誌で多く取り上げられているが、ライブハウスやカフェとして再利用されている。

へそのまち、スキーのまち、ワインのまち「富良野」

富良野市・富良野東中
田中正徳

富良野市は、北海道のほぼ中央にある富良野盆地の中心都市です。スキーの町として有名で、世界的に優れた雪質とコースから、何度もワールドカップの会場となりました。そのため、冬になると全国各地からスキーヤー、スノーボーダーが訪れ、鮮やかなシュプールを描きます。

一九八一年から一九八二年まで放送され、その後、ドラマスペシャルとしてシリーズ化されたテレビドラマ「北の国から」でも有名な町です。

雄大で美しい自然が織りなす景色は、平成三年に「美しい日本のむら景観一〇〇選」に、平成十三年には、ふらののラベンダーとして環境省から「かおり風景一〇〇選」に、十勝岳山麓に広がる田園風景が「人と自然が織りなす日本の風景百選」に選定されました。

市町村の魅力度ランキング調査では、常に上位にランクインしている町です。

《へそのまち》

北海道のほぼ中央に位置していることを記す碑「北海道中心標（正しくは北海道中央経緯度観測標）」が市内に建立されています。

富良野小学校の敷地内にある大きな石碑前のボール状の碑がそれです。

また、毎年七月には北海道の中心の町として「北海へそ祭り」が開催されます。祭りでは、お腹を顔に見立てて絵を描き、頭部を大きな傘で隠して踊る、へそ踊りが行われ、観光客の人気を呼んでいます。富良野市の公立小中学校に勤務する管理職は毎年、へそ踊りに参加しています。

《スキーのまち》

富良野スキー場が、世界に知られるきっかけとなったのは、一九七七年のFISワールドカップです。富良野市での開催は通算一〇回を数え、毎大会、世界のトップスキーヤーが熱いレースを繰り広げてきました。スノーボードのワールドカップや国体、全日本選手権など、様々な大会や行事が行われています。

富良野スキー場には、ロングコースを楽しめる「富良野ゾーン」と、バリエーション豊かな「北の峰ゾーン」の二つのエリアがあります。また、八基のリフトのほか、六人乗りゴンドラや一〇一人乗りロープウェーなどの設備が整備され、ロープウェーは約五分で山頂駅に到着します。

富良野スキー場は、その充実したゲレンデ、最高の雪質を楽しめるスキー場として、多くのスキーヤーに愛されています。

《ワインのまち》

半世紀以上前、一九六〇年代まで、野山に自生する山ぶどうの他に、富良野にぶどうの木は存在しませんでした。しかし、「ワインの本場・ヨーロッパと気候風土が似ている」ことからワイン造りへの機運が高まり、醸造用ぶどうの栽培を目指し、「富良野市ぶどう果樹研究所」が設立されました。設立から五〇年あまり、情熱をもつ多くの人々が試験研究、製造開発に携わり、現在のふらのワインへつながっています。

「北海道で作る作物の中で、富良野でできないものはない。」と言われるほど、富良野では様々な農産物が作られています。そうして、その耕作地がパッチワークのように美しい景色を産み出しています。自然環境に恵まれ、健康に育った野菜はおいしさも抜群で、消費者が安心して食べられるように、富良野では有機物の投入や農薬散布の低減など、クリーン農業を推進しています。ワイン以外にも、チーズ工房やアイスクリーム工房などもあり、富良野では農産物を利用した美味しい加工品作りにも力を入れています。

四季を通して楽しめる富良野。一度訪れるとまた違う季節に訪ねてみたくなる富良野。是非一度、富良野へお越しください。

私の散歩道
歩いて楽しい町 旭川（時々ラーメン）

旭川市・緑が丘中
貞弘 真悟

私は旭川市旭町という場所に住んでいる。石狩川の側にあり、国道四〇号線に面しており、夜中でも元気な若者がけたたましい音を鳴らし疾走していく場所である。しかし、私の家から旭川駅に向かうルートは格好の散歩コースとなっている（片道四五分）。

【我が家⇩旭橋】

歩いて五分程で旭橋到着。市内中心に位置し、石狩川に架かる旭川のシンボル的な橋である。昭和七年に当時の最新技術をもって竣工された鋼鉄製のアーチ曲線を描く橋である。豊平橋（札幌市）、幣舞橋（釧路市）と並んで「北海道三大名橋」と称され「北海道遺産」にも選定されている。大雨が降った翌日の散歩では普段と比べ大きく増した水量に自然の猛威を感じ、三・六で会合があった日には、夏場の心地よい風に当たりながら家路に就く。私のお気に入りの橋である。

【旭橋⇩常磐公園】

旭橋を渡り五分程歩くと常磐公園に到着。平成二十八年に開園一〇〇周年を迎えた。ボートに乗れる「千鳥ヶ池」を囲むように緑があふれ、野外彫刻も我々の目を楽しませてくれる（旭川は彫刻の町でもあり、市内各所に七二点もの野外彫刻が点在している）。「日本の都市公園一〇〇選」にも選定されており、春は桜が咲く花見の名所、夏まつり・冬まつりを始め大きなイベントの会場となっている。私の散歩でも、芝生に腰掛け、木々を駆け回るリス、池で寛ぐカモを眺めたり、夏場に行われるラジオ体操チームの一員になったりと、落ち着ける場所となっている。

※このルートの途中に生姜ラーメンで有名な「みずの」があり、無くなり次第閉店のためいつも長い行列となっている。

【常磐公園⇩買い物公園】

常磐公園を抜け、一〇分程歩くと買い物公園に到着。正式名称は「旭川平和通買物公園」。昭和四十七年に開設された日本初の恒久的歩行者天国である。旭川駅前のメインストリート約一ｋｍに渡って、両側に商店、飲食店など様々な店舗が並ぶ旭川市の商業の中心地である。野外彫刻が並び、ベンチが設置されているこの通りもまた、多くの観光客であふれ、市民の憩いの場所となっている。ここは私の散歩コースでもあるが、夜になると、御存知「三・六」が展開する場でもあるため、ネオンに照らされた夜の散歩コースにもなっている。

【買い物公園⇩旭川駅】

買い物公園を一五分程歩くと「旭川駅」に到着。平成二十三年にグランドオープン。新駅舎は四代目。外観はガラス張りで開放感たっぷり。内装は道産木材がふんだんに使われ温かみに満ちた空間となっており、「木のまち旭川」を印象付けている。

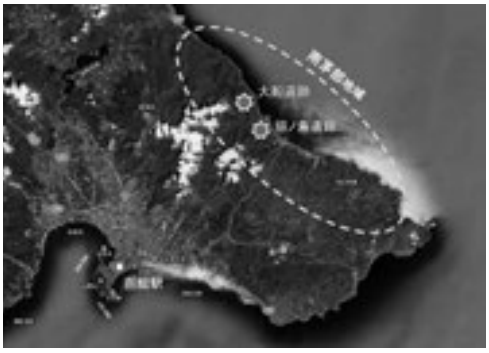
※「買い物公園」近辺には、ラーメンの有名店が軒を連ねている。焦がしラードの「蜂屋」、豚骨ベースの醤油味「天金」、動物系・魚介系のWスープが絶妙「梅光軒」、蜂屋と並び旭川ラーメン発祥の店「青葉」、醤油激戦地の旭川で「塩」で勝負の「山頭火」等、語り出したら切りがなく文面がラーメンで埋まってしまう。御賞味あれ！

私の散歩コースにはないが、三浦綾子文学の足跡を追うも良し、全国区となった行動展示が楽しい「旭山動物園」で童心に帰るも良し、はたまた、旭川の三大酒蔵「男山」「高砂酒造」「合同酒精」で車なしの一人利き酒大会を行うも良し、『飲む・食う・遊ぶ』の三拍子が揃った旭川に是非是非お越しを！

南茅部地域の歴史と伝統

函館市・南茅部中
山口哲也

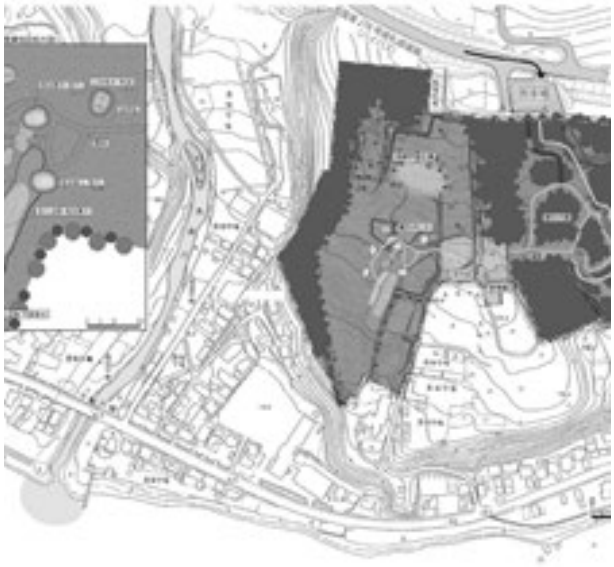
函館市の南茅部地域は、噴火湾に面し、自然の恵みをもたらす海と山に囲まれた地域である。古くから昆布や鱈、マグロなどの水産資源に恵まれた北海道大謀網漁業発祥の地である。さらには、昆布生産量が全国生産量の七割を誇る北海道を支える地域として知られている。昭和十一年、昭和天皇の北海道行幸に際し、昆布の上納を命じられ「献上昆布」として村をあげて謹製に奉仕した。昭和四十四年には、国内最初の昆布養殖を事業化し、道内屈指の漁業基地として現在に至る。



南茅部地域には、約九〇カ所の遺跡が海岸段丘上に連なり、これらは「南茅部縄文遺跡群」と総称される。この遺跡群は縄文早期から晩期に至る全時期を通じて、大規模な集落跡が多い。貴重な遺物も多数出土し、昭和五十年、農作業中に偶然発見された「中空土偶」は、昭和五十四年に国の重要文化財に指定された。その後、縄文後期を代表する優れた資料であるとともに、土偶の造形美としてきわめて重要であるということで、平成十九年に「国宝」に指定された。その他にも世界最古の漆製品なども出土し、縄文遺跡としてその重要性が認められている。

令和三年には、「北海道・北東北の縄文遺跡群」の一つとして、「垣ノ島遺跡」や「大船遺跡」が世界文化遺産に登録された。世界文化遺産の登録により、駐車場の整備や案内看板の設置等が進められ、週休日をはじめ、多くの観光客が訪れている。

垣ノ島遺跡平面図



大船遺跡平面図

小・中学校の閉校と開校

南茅部地域は、平成十五年まで南茅部町として、長きにわたり歴史と文化を積み重ねてきた。翌年に行われた函館市との市町村合併に伴い、各小・中学校も函館市立の学校となった。地域の人口、及び生徒数が年々減少傾向となり、令和四年度に大船小学校と臼尻小学校、磨光小学校が閉校し、旧磨光小学校の校舎を使用して函館市立南茅部小学校が開校した。中学校は、令和五年度に臼尻中学校と尾札部中学校が閉校し、新しい校舎、設備のもと、令和六年度に新設校として函館市立南茅部中学校が開校した。前年度に開校した南茅部小学校とともに、閉校した各学校の伝統を大切にしながら教育活動を推進している。

開庁一四〇年・市制施行八〇周年を迎えた 岩見沢市の魅力

岩見沢市・上幌向中
髙田 恭介

【はじめに】

岩見沢市は北海道の中西部に位置し、東は夕張山地を挟んで夕張市に、西は石狩川を隔てて江別市及び新篠津村、月形町に、北は美唄市及び三笠市に、南は栗山町及び長沼町、南幌町に接している。西部には石狩川流域低地である平野が広がり、東部には夕張山地を形成する低三性の山々が連なっている。また、北海道有数の稲作地帯として発展し、水稲、小麦、玉ねぎなどが基幹作物となっている。市内にはバラ園、ワイナリー、遊園地、果樹園、歴史遺産等多くの地域資源があり、田園風景、広大な農地等、非常に価値の高い資源が点在している。

【岩見沢の歴史】

明治十一年幌内間道路開削。岩見澤休泊所が設置される。明治十五年幌内煤田鉄道の幌内～手宮間が全線開通し、岩見澤駅、幌内駅が開設される。明治十六年札幌県勧業課岩見澤派出所が設置され、明治十七～十八年には、士族移民として山口県・鳥取県ほか一〇県から二一七七戸、一、七八〇人が集団で移住する。明治十七年十月六日、設村の告示により岩見澤村となった。岩見沢市は今年で開庁一四〇年、市制施行八〇周年を迎えた。

【岩見沢百餅祭り】

五穀豊穣・商売繁盛・長寿・岩見沢市の発展を祈願する祭りとして、岩見沢特産の米を特大の臼（直径二・二m、重量五・五t）杵（重量二〇〇kg）でつき、餅の量は三日間の合計で四二〇kgにも及ぶ。ついた餅は約一、二〇〇食のお汁粉にされ、来場者に無料で振る舞われる。この祭りのメインとなる大臼餅つきは、木塊状の杵をロープと櫓に取り付けた滑車で吊り上げて約五mの高さから落下させるもので「ヨイトマケ方式」と呼ばれる。杵を吊り上げる際は来場者も加えた約二〇〇人もの力が必要となる。「百餅」の名は、開基一〇〇年を記念に開催されたこと、開催日が敬老の日で一〇〇歳まで生きる長寿の願いが込められたことに由来する。

【IWAMIZAWAドカ雪まつり】

豪雪地帯の岩見沢を雪とふれあい、楽しもうと、ドカ雪まつりを開催している。会場では温かい「きじ鍋」が無料で振る舞われるほか、巨大滑り台、ジャンボかるた大会、人間ばんば選手権などのイベントが、会場を華やかに盛り上げる。

【未来のトビラを拓く、教育のまち 岩見沢】

「教育は、一人一人の可能性を広げ、未来を創造する営みである。」これは、岩見沢市教育行政方針の冒頭の言葉である。市では、子供たちが自分の将来に夢や希望を描き続け、失敗に挫けず、困難にも怯むことなく立ち向かい、自分らしさを発揮して、多様な人々と協働しながら、資質や能力を身につけるよう働き掛けていくことを教育の役割とし、推進している。次代を生きる子供たちがウェルビーイングを実現できるように「子供が輝く岩見沢の教育づくり」に向けて、確かな学力の定着を図り、子供と保護者の期待や信頼に応えていきたい。

空知地方における行政・産業・教育文化の中心地岩見沢市に、ぜひお立ち寄りいただけると幸いである。

幌尻岳の秀嶺を仰ぎ 戸蔦川の清流を聞く 肥沃な土壌の帯広市清川町

帯広市・清川中
小野稔之

帯広市清川町は、日高山脈の山系に抱かれた十勝平野の西部に位置し、何度も日本一の清流に選ばれる札内川とその支流の戸蔦川の恩恵を受け、土壌豊かな地域です。そのため、帯広市で進めている「フードバレーとかち」の基盤となる大規模畑作酪農地帯であり、全国でも有数の食料生産基地であります。

朝晩や一年の寒暖差を地の利とし、馬鈴薯、ビート、小麦、大豆、小豆などを中心とした多様な農産物が栽培されており、近隣には、収穫物を加工する「カルビー」、「日本甜菜製糖」、生乳を加工する「よつ葉乳業」、「Ｍｅｉｊｉ」などの大規模食品加工場が多数稼働しています。

【紫竹ガーデン】

初代オーナーである紫竹昭葉（故）さんが一九九二年に開園した人気の観光名所で、一万五、〇〇〇坪の敷地に、約二、五〇〇種類の草花が植えられています。

園内は一〇ほどのエリアに分かれており、それぞれ違った花を楽しむことができます。エリアのひとつ、「ワイルドフラワーガーデン」では、赤いポピーや黄色のハナビシソウなどが生育されており、花畑を楽しみながら十勝の食材を使用したサンドウィッチやチキンなどを、ビュッフェ形式でいただくこともできます。

【ジンギスカン白樺帯広本店】

北海道グルメとして全国的に有名なジンギスカン。道内各地に名店の多い北海道ですが、こちらはまさしく名実ともに秀逸の名店。一九五七年に帯広で創業した老舗で、二〇二二年にはオーストラリアの肉牛・羊の生産者団体・ＭＬＡ主催の「味付けジンギスカングランプリ」で最高賞を受賞。肉の食感が感じられるカット方法、ロース・モモなどバランスのいい肉のブレンド、肉の旨味を引き出す特製のタレと全ての工程にこだわっています。

【スノーピーク十勝ポロシリキャンプ場】

高い機能性と洗練されたデザインのアウトドアブランド・スノーピークが運営するキャンプ場。自然豊かなポロシリ高原に位置し、区画サイト、フリーサイトのほか、建築家・隈研吾氏と共同開発したトレーラーハウス「住箱（じゅうばこ）」に泊まれるサイトも完備。キャンプ初心者でも気軽に利用でき、自然に溶け込むような滞在が楽しめます。炊事場やシャワー、水洗トイレも整備されているので、快適に過ごすことができます。

【八千代公共育成牧場】

隣接する八千代町に位置し、東京ドーム二一〇個分の広大な敷地を有し、乳牛や馬などが放牧されている牧場です。牛や馬たちが自由に過ごす様子や幌尻岳がそびえる雄大な景色が楽しめ、開放感満点。バーベキュー場やパークゴルフ場も併設されています。毎年六月には八千代牧場まつりを開催。乳製品が当たる抽選会や、牧草ロール転がし体験、美味しいグルメが食べられる屋台などが集まり賑わいます。

【幸福駅】

隣接する幸福町に位置し、一九七三年にテレビ番組『新日本紀行』で取り上げられ、「愛の国から幸福へ」のキャッチフレーズで全国的に知名度が上がりました。当時は、恋人たちの聖地とも呼ばれ、限定切符は即日完売するほどの人気を集めました。現在は、旧国鉄の広尾線の廃線に伴い廃止となりましたが、駅舎や線路はそのまま残り観光スポットとして存続。今でも多くの観光客が訪れ、駅舎には幸せを願うメッセージが書かれた名刺が多数貼られています。当時運行していた列車の一部もプラットフォームに保存されているため、記念撮影スポットとしてもおすすめです。

釧路市　発展と共生

釧路市・共栄中
田中君枝

釧路市の概要

釧路市は、平成十七年に当時の釧路市、阿寒町、音別町が合併して新生「釧路市」となった。北海道の東部、太平洋岸に位置し、「釧路湿原」「阿寒摩周」の二つの国立公園をはじめとする雄大な自然に恵まれた街であり、東北海道の中核・拠点都市として社会、経済、文化の中心的な機能を担っている。

また、酪農を主力とする豊かな農業生産、豊富な森林資源を有する林業、そして国内有数の水揚げ量を誇る水産業など、日本の食料基地といえる地域でもある。

釧路市では、大規模な食品・製薬工場や製紙工場のほか、全国唯一の石炭鉱業所が操業している。これらの地域産業を支えているのが重要港湾釧路港や釧路空港であり、現在は、交通の利便性が一層高まることを期待し、北海道横断自動車道の整備が進められている。

また、特別天然記念物「タンチョウ」や「阿寒湖のマリモ」、「キタサンショウウオ」をはじめとする九つの天然記念物など世界的にも貴重で魅力あふれる地域資源が豊富にある。さらに、近年上昇が見られるとはいえ、夏でも最高気温が二〇℃台と涼しく、移住・長期滞在にも適した気候と注目されている。

共生の街づくり

釧路市内には建築家の毛綱毅曠氏が手がけた建築物がいくつかあり、釧路湿原や阿寒摩周などの素晴らしい自然環境を保護しながら共生するシンボル的存在となっている。

丹頂が翼を広げたイメージの博物館や湿原に生息する「やちぼうず」をイメージした釧路湿原展望台などは、展示物もさることながら建物そのものが鑑賞の対象となる。

市内の他の公共施設もこれらとの調和を大切にして設計されており、釧路市の景観を豊かなものにしている。

観光客数は令和元年度に過去最高の五三〇万七、〇〇〇人を記録（釧路市役所調査結果）した。現在はコロナ禍の三年間の損失を取り戻すべく、官民一体となって貴重な観光資源をPRしたり、「釧路ならでは文化」を体験できるアドベンチャートラベルを推進したりしている。

回復の兆しはすでに見え始めており、「世界三大夕日」と言われる釧路の夕日を見ようと大勢の外国人観光客が幣舞橋の上に集まって眺める様子が再び戻ってきている。

深みのあるオレンジから赤紫色へと刻々と変化する釧路の夕日の色彩は、市街地の奥に広がる湿原の水蒸気と太平洋の水蒸気、北緯四三℃の太陽の入射角度の影響によって生じるもので、釧路ならではの美しさである。

釧路の街を改めて見つめると、やはり美しい都市だと感じる。「釧路」の市名の由来となったアイヌ語はいくつかあるが、【クシュル】（通路・越路。交通の要所）という言葉はその一つである。その音に当てた「釧」とは貝釧（かいくしろ）、銅釧（どうくしろ）などの古代の装飾品の腕輪のことであり、道東の拠点として各町をつないできた美しい街への先人の想いに感じ入る。

文　芸

早朝サイクリングからマイカー通勤へ

恵庭市・恵北中
加藤　暢

今春、一〇年間の単身赴任を卒業し、自宅からのマイカー通勤となった。自由気ままな単身生活での食事は「好きなものを、好きなときに、好きなだけ」だったので、メタボ体型まっしぐら。職員検診では毎年、再検査や保健指導の対象者だったことは言うまでもない。

豊かな自然に囲まれた農村地区に赴任した数年前に思い切ってシティサイクルを購入。趣味と健康増進を兼ねて早朝サイクリングを始めた。年齢を重ねるにつれ起床時間はだんだん早くなり、アラームが鳴る前に目覚め、サドルに跨る生活を降雪まで続けた。おかげで、若干の減量に成功。味を占めた私は、冬季間もテレビを見ながらペダルを漕ぐ生活を心がけた。昔から「早起きは三文の徳」と言われるが、サイクリングは身体と心の健康を私にもたらしてくれた。

小鳥のさえずりを聴きながら、ペダルを漕ぎ進める先には感動的な風景との出会いがたくさんあった。美しい丘陵に燦燦と輝く朝陽。蓮の花が一面に咲き誇る池。雑木林で木の実を集めるエゾリス。朝もやの草原を仲良く疾走する馬の親子など。

私に身体と心の健康を与えてくれた時間は、転勤を機に片道一時間弱の通勤時間に変わった。たくさんの思い出と充実した日々を共に過ごした相棒のシティサイクルは今、車庫の片隅に寂しそうに佇んでいる。「週末だけでも」と思いつつ、未だに行動に移せない自分が情けない。

健康的な生活から離れて半年経った。私は早朝の相棒をシティサイクルからマイカーに変え、季節とともに変わりゆく田園風景とお気に入りの音楽を楽しみながらドライブ感覚で毎日ハンドルを握っている。

フロントガラス越しに映る景色に目を向けると、街路樹のナナカマドは真っ赤に色づいている。まもなく、冬将軍が到来し白銀の世界となる。雪解けまでの数カ月間に幾度となくホワイトアウトに遭遇するかと思うとゾッとするが、より一層の安全運転を心がけたい。

そして、来年こそ、相棒のシティサイクルと一緒に健康的な生活を再開したいと思っている。

心温かな　北限のブナの里

黒松内町・黒松内中
柴山理香

後志管内の南西部に位置する黒松内町には、北海道遺産「北限のブナ林」がある。北海道では渡島半島のみに分布し、寿都と長万部を結ぶ「黒松内低地帯」を北限として、本州から連続的に分布してきたブナの森が本町で途切れ、そこから北には北海道特有の森「針広混合林」が広がっている。

本校の総合的な学習の時間には、黒松内小学校から連続する九年間の「ブナ里学習」（ブナの里・キャリア教育）を実施している。春と冬には一年生は町ブナセンター職員引率によるブナ林散策、ブナ材やブナの葉を使用したフォトフレームやフォトアルバムの製作。二年生は社会福祉の町として認知症サポーター体験や町内の各施設の御協力による職場体験。三年生はブナ染めしたハンカチを修学旅行に持参し、現地でお世話になった方へ黒松内町ＰＲを兼ねてプレゼントしてきた。後期は朱太川の鮎の学習や黒松内低地断層帯による地震を想定した防災体験など、黒松内の特色を存分に活かしたプログラムが組まれている。一二月には、全学年「ブナ里発表会」を開催し、保護者はもとより地域の方々にも学習の成果を見ていただく機会となっている。

本校に着任してから、教育委員会をはじめ地域の多くの方々に、この「ブナ里学習会」が支えられているのを実感している。講師の方々と生徒との距離感がなく、小さな頃から彼らの成長を見守り続けている方々が、本校生徒の学習のために協力を惜しまない。一人一人の成長した姿を、自分ごととして喜んで頂ける温かさがいつもそこにある。

三年生最後の学習は「地域貢献＝黒松内への恩返し」。これまでの九年間の学びの集大成。自然・福祉・産業の将来について、探求学習の学習サイクルの中でそれぞれの未来の黒松内を発表する。今年も、どんな発表がされるか、心待ちにしている。

川柳と新聞で思考力・表現力を育む

小樽・潮見台中
髙橋恒雄

社会の小テストに「○ね」と書かれたことがあります。驚いて本人に聞くと、小テストが分からなくて集中できず、思わず書いてしまったとのこと。彼女の「辞書」にはイライラを表現する言葉は一つしかなかったのです。

次の週から「川柳」を使って語彙力を豊かにする実践に取り組みました。川柳の良さは、短時間で取り組めるところです。語彙力の少ない子はその範囲の中で一生懸命考え、魂のこもった一句をつくる。豊かな語彙力をもつ子は熟考し、丁寧に一句を仕上げる。作品の魅力に上下はありません。決められた時間で、子供たちは個別最適な思考を展開し、それぞれが伸びる。徐々に子供たちが変わってきました。学習に集中して取り組み、余った時間にテストやノートの余白に川柳を書く習慣がつきました。

川柳の可能性は何でもありということ。「汚い言葉」「エッチな言葉」「人を傷つける言葉」以外何でもOKです。字余り、字足らずでもいい。子供のやる気を伸ばすのが大事です。

苦手な子は例えば「夏」と思いついたら、好きな夏のイメージを並べて作品にします。成長すると、授業で学んだ知識を織り込んで表現する。それに気づいた私は新聞記事を毎日のホームルームで紹介し、感想を川柳に表現させ新聞に投稿しました。思考を深めるツールとして「五・七・五」を活用したのです。当時の生徒の作品で「優先はオリンピックか復興か」が新聞に掲載されました。風刺が効いた良い作品です。子供たちは沢山の温かい作品を残し卒業しました。私に「○ね」と言った彼女は、卒業時にはクラスの学級長として私を泣かせる素敵な言葉をプレゼントしてくれました。

「新聞でつなぐ記憶と生きる知恵」少し前に新聞掲載された私の作品です。風化させてはいけない記憶、これから未来を切り拓いていく生きる知恵。両方あるのが新聞。読むだけでは身に付かない力を川柳は付けてくれます。

笑顔の魅力

士別市・上士別中
及川裕二

八月の世界陸上競技選手権ブタペスト大会において、旭川市出身の北口榛花選手が、女子やり投げで見事、金メダルを獲得しました。また、その後のダイアモンドリーグ・ファイナル大会でも優勝し、年間チャンピオンに輝きました。私事ながら、北口選手の御両親とは古くからの知人ということで、榛花選手を(勝手に)身内のように応援していました。彼女の類まれな「身体能力」や積み重ねてきた「努力」は、当然トップアスリートとして群を抜いて素晴らしいのですが、彼女の魅力は御存じのとおり、屈託のない「笑顔」です。満面の笑みで天真爛漫に喜びを表現することができる純真さだと感じます。あの笑顔を見ると、誰しも心を和ませてもらえますし、応援してあげたいと感じるのは、私だけではないと思います。

「笑う門には福来たる」と言われます。いつも笑顔でいると、ミラーニューロンの原則で周囲も笑顔になり、往々にして物事が良い方向に進むことがよくあります。あるTV局のアナウンサーは、日頃から鏡を見て口角を上げ、笑顔を作って本番に臨むそうです。また、笑い声が絶えない職場は、終始ストレスがなく、業績が上がるという統計もあります。心から湧き出る笑顔には、人生を良い方向に導く不思議な力が存在するのです。

四年前の全英女子オープンゴルフ大会でメジャー制覇を果たした渋野日向子選手も、笑顔で勝ち進むその姿は「スマイリング・シンデレラ」と話題を集めました。厳しい勝負の世界に置かれていながら、大舞台での勝利を収めるためには、苦しいときにこそ「笑顔」で運を引き寄せることも必要なのかもしれません。

人は、生まれつきの顔のパーツは変えられませんが、表情はいくらでも変えることができます。人と人とが面と向かってコミュニケーションをとることが少なくなった現在、まして、まだマスク生活から完全に抜け切っていない昨今、ぜひとも「笑顔」で、毎日を送っていきたいものです。

ＡＩ時代を生きる

旭川市・神居東中
神林宏行

第七一期王座戦五番勝負第四局、挑戦者の藤井七冠が永瀬王座に一三八手で勝利し、三勝一敗として前人未踏の八冠完全制覇を達成しました。

近年、将棋の対局では、一手ごとにＡＩによる最善手や評価値が紹介されるようになり、棋士がＡＩの最善手を指すのか、はたまたＡＩが着想しない差し手で勝つのか、といったところにも関心を集めています。

この王座戦に先立って行われた第六四期王位戦第五局の七七手目に、藤井王位は解説者をも悩ませる「２四歩」という驚きの一手に出ます。ＡＩは、この手を最善手に挙げるどころか、むしろ「疑問手」と評価するものがあったほど。しかし、この一手から終盤の変化まで、しっかりと読み切って藤井王位は勝利し、対戦成績を四勝一敗として、王位防衛を果たします。「さすが」としか言いようがありませんし、その発想力は、「藤井聡太ならでは」のものと言えるでしょう。

チャットＧＰＴなどの公開によって、「生成ＡＩ」と呼ばれるＡＩ技術が身近になり、教育界でも関心が高まっています。働き方改革の一貫として、保護者向け文書や所見案の作成など、今後ますます活用が進む可能性を感じます。ただし、気を付けなければならないのは、ＡＩが作った文章には、当然のことながら、「個性がない」ということです。

ですから、今後ＡＩ由来の文書に触れる機会が増えてくると、人間の文章には、「その人らしさ」や「個性」がより一層求められようになるでしょうし、読み手には、ＡＩ由来か否かを見抜く力も必要になってくるでしょう。そして、これからのＡＩ時代を生きる我々に問われているのは、人間がいかに「人間らしいか」、「自分らしいか」、「個性的であるか」ということであり、人間社会が、多様な「個性」を尊重できる社会として「いかにして成熟できるか」ということではないでしょうか。

ＡＩと共に生きる時代…誰もが「ありのままの自分」を認められ、自信をもって「自分らしさ」を表現できる社会になることを切に祈ります。

我々はまだ考える葦なのか

猿払村・拓心中
藤田淳

ChatGPTを使ってみると、そのすごさに驚かされる。入力した途端にスラスラと文章が出てくる。大雑把なリクエストだと汎用的な回答が多い。より正確なものがほしければ細かいリクエストが必要だ。ただし、現段階では鵜呑みにするのは危険である。まだまだ使う側の一定程度の能力は必要である。ただ、一つ言えるのはChatGPTはお世辞上手である。読み手に不愉快な思いをさせない配慮か。

携帯電話のなかった時代から教員をしている自分にとってはテクノロジーの進歩はまさに日進月歩。世の中がテクノロジーを中心に変遷しているように思える。もっとも、人類の歴史がそうなのだろうけれど。

そのおかげで恩恵を得ている私たちだが、その一方で失っているものも少なくないと思う。これはノスタルジーな思いからくるものではなく、人間本来の生き方（生存の仕方）における不安である。

手間暇がかかることは「コスパが悪い」とされ、（見てくれの）結果が重視される世の中にあって、ますます考えなくなっている我々がいるのではないか。

考えることは疲れる。面倒なことである。あまり考えないで過ごす方が断然ラクだ。しかし、思考停止の行く先は、思考力の低下で判断力やアイディアを生み出す力が衰える。諦めない、ミスを挽回する力が身に付かない。慮ることができない。操られる。などなど危険な状態に陥ることが容易に想像できる。

かつてパスカルは「人間は考える葦である」と言った。人間は自分が非力であること、だから生きる力を身に付けることや他者と助け合うことの大切さを知っている。それは考えることができるからだということだそうだ。

現在の世の中を見て果たしてパスカルはなんと言うだろうか。

ふるさとへの誇りと愛着を！

羽幌町・焼尻中
加納克則

太古の原生林が息づく自然であふれる焼尻島。また、島の中央部に広がる草原では、幻の羊肉と評される「焼尻サフォーク」が放牧され、草をはむ風景がみられます。こんな豊かな自然の中にある焼尻小中学校に勤務して二年目。今年度、本校で子供たちに育てたい資質・能力である「主体性」・「協働性」・「表現力」の育成を目指し、全ての教育活動が横断的につながって、教育効果を相乗的に高められるよう教育活動を推進しています。

さて、今年度本校では、「北海道ふるさと教育・観光教育等推進事業」の指定を受け、子供たちのふるさとに対する愛着や誇りを育むための学習を行っています。総合的な学習の時間において、焼尻の観光と産業の中心であるめん羊牧場についての調査活動や四年ぶりに開催されるめん羊祭りへの参加を通して、めん羊に携わる人々の思いや地域の魅力を知ることを目的とし、文化祭で保護者や島民の方々に発表を行いました。「島に住んでいても気づかないことを、子供たちの発表で知ることができました。これからの焼尻をＰＲするためにも素晴らしい発表だったと思います。」と、島民の方から感想をいただきました。

そんな中、町営のめん羊牧場が飼育員の確保ができず、八月末で閉鎖されることになったのですが、下川町にある養鶏場を運営する会社がめん羊牧場の運営を引き継ぐことになり、「焼尻サフォーク」が残ることや島の観光にとっても大きなことだと思いました。したがって、引き続き、めん羊牧場についての学習を続けていけることになり、ほっと胸をなでおろしているところです。

「子供は家庭で育ち、学校で学び、地域で伸びる」という言葉があるように、家庭・学校・地域が連携・協働し、より良い学校教育を通じて、より良い社会を創ることが大切です。今後も子供たちが、ふるさと焼尻に愛着や誇りをもてる教育活動を推進していきたいと思います。

タイパになじまないもの

江差町・江差北中
米谷　優

初めて映画館で観た作品は「ゴジラ対ヘドラ」でした。当時の特撮技術を駆使したグロテスクなシーンが強く印象に残っています。田舎から映画館まで二時間半をかけて移動し、映画館で二時間。帰り道がまた二時間半。まさに一日がかりの映画鑑賞、仕事で疲れていたであろう父親がよく連れ出してくれたものだと今になって感謝しています。

高校時代、映画友達がいました。彼が私を誘うのは、上映中は話しかけないこと、エンドロールが終わるまで席を立たないこと、といった条件がそろっていたからのようです。当時の映画館は二本立て上映が当たり前で観客の入れ替えもなく、メインの映画が目当てだったのに併映の方が良かった、ということもよくあることでした。あるとき、いつものように映画に誘われ、題名を尋ねると併映「恍惚の人」というではありませんか。うっとりとなるような淫靡な恋の映画であろうかと友達二人で妄想を膨らませて座席に着くと、すぐに期待を裏切られました。モノクロのスクリーンに映し出されたのは認知症の舅を介護する嫁の話。原作は有吉佐和子。一九七二年にベストセラーとなり、森繁久彌が迫真の演技で舅役を務めた一九七三年の秀作でした。おかげでメインの映画は記憶に残っていませんが、その衝撃的な作品は、今も時折思い出します。

最近、タイパという言葉があるようです。話題の映画やドラマなどを早送りしながら観る、といった短い時間で効果的に利を得る……そんな風潮のようです。映画をタイパで測る時代になったことに衝撃を受けました。ある本に「生きることはバラで飾られねばならない」という一節がありました。映画は映画館でじっくりと味わいたい、私はそう思い、休日を利用して久しぶりに一人、映画館へと足を運びました。小さな映画館では一〇人ほどの客が、人生をバラで飾るかのごとくスクリーンに見入っていました。

教育の本質に迫っていくには

北斗市・浜分中
大友貴代

変化の激しいこの時代に、柔軟な発想で対応しなければならないことは明白としても、教育の本質にある「人間としていかに生きるべきか」を問うたとき、決して欠くことのできない人生の核となるべきものを欠落させることがあってはならないと強く感じてしまう。ＩＣＴ機器を文房具の一つとして効果的に活用することや、個別最適な学びに象徴される子供一人一人のペースや理解度にあった学びを保障することは言わずもがなであるにせよ、実感を伴う身体活動からこそ得られる知識・技能をはじめ、人間としての基本的な能力がしっかりと生きる力となって身に付いているかを問われたら果たしてどうだろうか。

私たちは実際多くのことを知ることができるようになったが、思考段階としての「記憶した」状態から、身体の感覚として「身に付いた」とどれだけ実感できているだろう。正解のない問いへ挑むときにも、必要となるのは身体の実感を通して確かなものとなった思考力や、何が起こるか分からない状況に自ら身を投じて四苦八苦した経験を積み重ねてこそ養われる柔軟な発想力であることに違いはないと思う。そして、人から「こうあるべき」と教わるのではなく、「自分はどうあるべきか」「どう生きるべきか」を自分で考え抜いて決める、そしてその意欲が湧いてくることが何より重要だと言える。

では、その意欲はどう湧いてくるのだろうか。カギは産声を上げた直後からすでに始まっているとの認識の有無による。抱っこされたぬくもりが生む大人への信頼と愛情の確信。一年もたたぬうちに身体を使って縦横無尽に動きたくなる衝動。二足で立ち上がり、歩き、走り出す本能としての運動など、子供が興味をもつことに、よっぽどのことがないかぎりブレーキをかけず見守ること、任せること。頭で考えるより先に、身体の実感により脳と身体能力を高めること。その蓄積がやがて社会と自分を結び付け、本物の学びへの意欲を掻き立てるのだと思う。

恩師のもとで

函館市・深堀中
佐藤強

今から四〇年以上前、中学校二年生のとき、自分の通う中学校に着任した体育の先生にその後の進路選択に大きな影響を受けた。

もともと体を動かすことが好きで、体育の時間には好意的だった自分が、「この先生のように、子供たちが思いきり汗を流し、仲間とともに取り組み、次の体育の時間が待ち遠しい、そんな授業をする教師になりたい。」と、いつしか将来の進路を考えるようになっていた。

今思えば、生徒一人一人の意欲を引き出し、仲間とともに体を動かすように組まれた授業の流れ、活動時間も十分、めあてや達成までの見方・考え方も示されていた。みんなで楽しく体育の授業をした思い出ばかり。

気がつけば自分もその道を目指し、大学に進学し、体育教師になった。いざ現場に入り、恩師のような授業をしようと思ってもなかなか思うようにはならなかった。ベテラン教師と新採用の教師が同じような授業にはならないのは当然のことだった。授業づくりについて、何度か恩師のもとを訪ね、助言をいただいたこともあった。多くの優れた授業を観察し、授業づくり、指導方法を学んだ。研究会にも参加し、より良い授業にも学んだ。多くの仲間もでき、情報交換も繰り返し、自分の授業スタイルを構築してきた。何度かの研究会での授業や研究発表も経験させていただいた。常に授業改善を繰り返し、子供たちに運動のもつ楽しさを自分なりには伝えてきたつもりである。

そして、教員としての経験年数も重ねてきたころ、主幹教諭を勧められ、その後教頭となり管理職の道に入ることになった。

校長として二校目、現在の函館市立深堀中学校で勤務することとなった今、校長室には、歴代の校長先生の写真が並んでいる。素晴らしい校長先生の中に、その恩師の写真を見付けた。「そうか、最後の勤務校はここだったのか」と、昔を懐かしむ。あのときから目標としていた恩師のもとで校長業務をしている。生徒と先生の関係から、同じ校長となった。しかし今では、もう指導を受けることはできない。仕事の合間にふと目線を上に向けると、恩師が微笑んでいる。恩師に見られていることに照れくささや、緊張感をもちながら、課題の解決に頭を悩ませている。毎日「しっかりやれ」と言われているようで、今日も背筋が伸びる。

旧交を温める

赤平市・赤平中
髙岸春二

還暦を前に、実に四〇年ぶりの高校のクラス会が八月に行われた。二人の幹事がライン等を駆使してほとんどのクラスメイトに連絡をつけ、約三分の一のメンバーが集まった。卒業以来一度も会っておらず、ましてやマスクをつけていたため、最初は誰だか分からない者もいた。マスクを外し認識した後は、お酒の力もあり、四〇年前の思い出話やそれぞれの近況報告に大いに盛り上がった。

この三年間、コロナ禍のため、多くの会議や懇親の場が制約され、対面でのコミュニケーションは激減した。リモート会議は移動時間や場所の制約がなく、有効なのは重々承知はしているが、久々の対面でのコミュニケーションの機会に、心は解放され、サプライズもあり、筋書きのないたわいもない話の連続に、還暦を前に若返った自分に気がついた。

仕事柄、堅い話をする機会もある。しかし、人生を豊かに楽しく送るためには、対面でのリラックスした時間は不可欠であると感じる。様々なストレスを抱える時代の変遷の真っ只中にいる我々には、そのようなオアシスが必要なのだ。

奇しくも大学の同窓会の周年行事も九月に行われた。全国各地に散らばる同窓生に案内を出し、大学等と一緒に立ち上げた実行委員会を中心に準備を重ねた。リモートでの事務局会議、そして会同での実行委員会と慎重に準備をするうちに、それぞれの役割・意義を痛感したものである。「温故知新」という諺がある。「古きを温ねて新しきを知る」という意味だが、急速な情報社会の進展の中にあり、対面での豊かなコミュニケーションの大切さを再認識することも、まさに、それにあたるのではないだろうか。

今回のクラス会も然り。ライン等で連絡を取って実現した四〇年ぶりの会。年齢を重ねたしみじみとした再会を、胸に刻むひとときだった。

四〇年ぶりの再会

室蘭市・室蘭西中
赤松政彦

昨年、ふるさとの室蘭市に着任した。ある日、白髪でマスク姿の男性が校長室を訪ねてきた。「いやぁ、久しぶりだね」とマスクを外したその顔を見て私は驚いた。中学時代の部活動の顧問、M先生だ。四〇年ぶりの再会に驚きと喜びで気持ちが昂ぶった。「先生、お久しぶりです！」M先生は新聞で私の名前を見付け、わざわざ学校まで訪ねてくれたのだ。

再会を喜び合う中、M先生は予期せぬことを話された。「君たちにはあの時すまないことをした。私が異動して、男女のバスケット部が廃部になってしまったこと。本当にすまなかった。それを伝えたかった。」思いもよらない謝罪。涙がこみ上げた。

私が中学三年になったとき、男女バスケットボール部は廃部となった。M先生が異動し後任がいないという理由だった。主将だった私は部員たちと廃部の撤回を訴えた。M先生も異動する直前まで後任者の配置をお願いしてくれていた。しかし廃部が年度末に決定し、私たちに伝えることもできずに異動した。当時まだ三〇代のM先生が断腸の思いだったことを知った。M先生に責任はない。しかし最後の中体連大会に出場できず、悔しさと喪失感をまわりにぶつけていた記憶がある。M先生も私たちの思いを察し、気に留めてくれていた。四〇年後、その思いを伝えに来てくれたのだ。二年間の部活動でしか接していない私を忘れず、七〇才を過ぎて会いに来てくれたと思うと胸にこみ上げるものがあった。

あのときの不完全燃焼が大学までバスケットを続ける原点になったこと、教員になってから三〇年近く指導者としてバスケットに深く関わってきたことを帰り際に伝えた。M先生、そしてバスケットとの出会いが、自分のこれまでの人生に大きな影響を与えたことに感謝している思いを伝えたかった。M先生と再会して、私自身も職員や生徒たちに誠実であり続けたいとあらためて思う。短い時間だが、掛け替えのないときを過ごした。

つながり

日高町・門別中
高杉　省一

以前、植物を特集するテレビ番組を見て感銘を受けた。

「植物は栄養を根から得ている。しかし根が栄養を取り込む力は弱いため、大部分の栄養は菌が土から吸収し、植物へと送り込んでいる。その代わりに植物は光合成で得た養分を菌に送り込む共生関係を築いている。そして根の先の菌糸と菌糸がつながりあうことで森中の木々をつなぐ巨大なネットワークが存在している。」

菌糸のネットワークは、光合成ができなくて今にも死にそうな木に、元気な木から養分を送り助ける働きをしているという。弱者を助けるネットワークが植物の間に存在している可能性がある。これまで植物は競い合って隣り合う植物と光や養分の取り合いをしていると考えられてきた。しかし実際は菌糸のネットワークを介して、強い協力関係を築くことで安定した生態系を作っている。

森の地下に広がる支え合いの世界。目に見えないところでの支え合い。自分にも同じようなつながりがある。今でも連絡をくださる傘寿を過ぎた校長先生、忘れたころに電話をかけてくる教え子たち、これまでお世話になった先輩や同僚、数多くの子供たち、保護者の方々。それらの関係性の中で互いに勇気づけあい、励ましあい、時に悩ませ、悩まされてきた。

今、自分は校長として、現場で汗水たらして子供たちと向き合って懸命に格闘している先生方をしっかり支えるネットワークを築けているだろうか。自分自身が先生方に元気や勇気を分け与える原動力たり得ているだろうか。先生方を着実に支える役割を果たしていきたい。そのためにも自ら学び続け、行動し成長していきたいと思う。そして自分だけでなく、誰もが互いに助け合う職員集団のつながりを大切にした学校経営に邁進していきたい。

生涯心の師

幕別町・札内東中
横山　一仁

「いいか〇〇〇だぞ、だから今□□□しなきゃだめなんだ。大人になったらきっと分かる。」

「私はみんなに好かれようなんて思っていない。だけど、二〇歳になったとき、苦しいとき、そういえば昔『横山がこんなこと言ってたな』って思い出して、乗り越えてくれたら本望。」

教壇で子供たちへよく言っていた。それから管理職になり一〇年。

学校や街中で「先生」と声を掛けられることがよくあるが、誰か思い出せない、ごまかしながら話をすることが増えた。なかには、それを察し「△△ですよ」と教えてくれる教え子もいる。話がはずむと「先生に怒鳴られたのめちゃ怖かった」とか「先生が言ってくれた◇◇◇の言葉、今になってよく分かる」等、教え子の学生時代の話がほとんどだが、最近はそのときの光景も思い出せなくなってきた。

若い頃、毎日が一生懸命だった。中堅の頃、子供にどう伝えようか必死に考えた、悩んだ。全ては「関わる子供たちが幸せになってほしい」その一心で毎日毎日を勝負していたのだが、今ではこの様。

教師は、いつも目の前にいる大勢の子供と接している。教師にとって一人の子供はその中の一人なのかもしれない。しかしながら、子供にとっては、出会うことのできる限られた教師の中の一人。そして、子供によっては、教師が発した言葉、見せた表情等が、心に残り続けている者もいる。さらに、そのことを今も大事にしてくれている者もいる。

『情けない』、教え子に出会うたびに感じる。

それとともに、忘れかけていた当たり前のことに気付かせてくれる時間になっている。”聖職“として大切なことを教えてもらっている。

子供にとって生涯心の師であるために、改めて自覚と責任をもって教職の道を、永遠に歩んでいきたい。

スポーツ界の名将に学ぶ

帯広市・川西中
村上達也

今年は春からスポーツの世界大会が続いています。ワールド・ベースボール・クラシック優勝の「侍ジャパン」、サッカー女子W杯ベスト8の「なでしこジャパン」、バスケットボールW杯でパリ五輪出場権を獲得した「アカツキ・ジャパン」、同様にパリ五輪出場権を獲得した男子バレーの「龍神NIPPON」、残念ながら出場権獲得に至らなかった女子バレーの「火の鳥NIPPON」、最後まで勇敢な戦いを見せてくれたラグビー日本代表「ブレイブブロッサムズ」等々、日本代表チームの活躍は、我々日本人を熱狂させ、大いに勇気づけてくれるものでした。スポーツ好きの私には、幸せな日々が続いています。

さて、いずれのチームも監督・コーチの人間力、人柄、リーダーシップ、競技に関する新しい知識や技術の習得、その技術に関わる指導力、戦術やその選択に優れていたことは間違いないことと思いますが、特に対戦相手に関わる情報収集や分析、対応策の研究に相当のエネルギーを費やしたことと考えられます。今回結果を残した各チームの名将は、豊富な経験のみに頼ることなく、前もって有効な情報を得て、さらに試合においては、状況に応じた生きた情報を集めて分析し、素早く実戦に生かしたことが、結果に結びついたと思われます。

AIの急速な発展等、世界では科学技術が目覚ましい進歩を遂げています。政治の世界もビジネスの世界もスポーツ界も新しい情報を収集し、社会の変化や新しい価値観に対応することが益々重要になっています。それは教育界も個人も同様です。

このような状況下において、持続可能な社会の創り手の育成と日本社会に根ざしたウェルビーイングの向上を図るためにも、情報収集を怠ることなく、教育活動の質の向上に向けた新しい知識や技術の習得に積極的に取り組み、実践に生かしたいものです。

アウトドア考

釧路町・富原中
水野秀哲

昔からよく一人でキャンプをしている。真冬の誰もいないキャンプ場でもやっていることを周りに伝えると、かつては「一人で？」「真冬に？」と驚かれ、「変態」呼ばわりされた。まぁ、そうか…。それが最近はどうだろう、コロナの影響もあって空前のアウトドアブームである。冬でも大勢のキャンパーが集まる。このブーム、仲間が増えるのはいいのだが、正直なところ「早く過ぎ去ってくれないかな」と思っている。できれば見たくない、どうして平気なの…と閉口することが多くなったからだ。

どの世界にも暗黙のルールやマナーが存在するが、それ以前に「人としてどうなの」と思うことがあまりにも多い。酒が入って明け方まで大声で騒ぐのはいかがなものか。自分の子供たちを放っておいて、大人だけ酒宴で大盛り上がり。その子供が張り綱に躓いて転ぶと、そこにタープを張ってるのが悪いように振る舞うのはどうか。直に焚き火をすることを禁じている無料キャンプ場。放置される焚き火の趾（焚き逃げという）やゴミの山は見るも無惨である。傍若無人な振る舞いは枚挙に暇がないが、このブームがきてから、残念ながら確実に増加した。

ふと、このような大人が多いのは何故か。どうしてそうなってしまうのかを考えてしまう。今の生徒もこうなってしまうのか。それこそ「教育」の責任じゃないのか。くつろぎに来たのに悶々とする。

昔からこの手の不逞の輩はいるのだが、昨今どうもその多さが違う。多様な価値観が認められる時代。開放された空間で自由な雰囲気を楽しんでいることの何が悪い。そう、それ自体は悪くない。問題は周りや他人、環境や状況に目を配る・気を配ることをあからさまに放棄していることにある。かつてそんなのは自然に身に付けていたこと。恥ずかしいことだったはず。そこまで我々は丁寧に教えなければならないのだろうか…。価値観が多様化しても、大切なことは今も昔も変わらない。

私の背中を押してくれる「マグカップ」

釧路市・春採中
新井　真人

校長室の私の机の上には、「ＬＡＢＯＵＲ　ＳＯＬ」と書かれた手作り風のマグカップが置いてある。以前、転勤する際に、「ありがとうございました」の言葉とともに生徒からプレゼントされたものである。

その生徒とは、私が教頭時代、転勤する日までの約三か月間、別室でともに勉強をした。勉強もしたが、それよりも世間話やゴールセッティングなどの話が多かった。前向きで何事にも一生懸命な生徒であり、真面目に全力で走りすぎたこともあって少し充電期間が必要であった。

頭の良い生徒で、ちょっと背中を押してあげると勝手に良いゴールを設定し歩み始めてくれる。私は目標をディスカウントして、「いいね」「すごいね」と一緒に喜び、寄り添っているだけで良かったように思う。

充電期間の後半に、サッカーとフットサルの審判の免許を取得すると言い出した。少しでも考え方や視野が広がればと思い、私が大学までサッカー部に所属していたこともあり、プレーヤー以外にも、サポーターや審判をするという楽しみ方があることを話すと、なぜかやる気を出してくれた。教員生活の半分以上、生徒指導に携わってきたが、子供たちの成長する姿にはいつも驚かされる。

その生徒が高校に合格したときに電話をくれた。「ありがとうございます」「よかったね」の言葉とともに、双方、うれし涙いっぱいの電話となった。先日、その生徒から再び電話がかかってきた。今度は涙はなく「看護学校に合格しました」と、晴れ晴れとした声での喜びの電話であった。

「ＬＡＢＯＵＲ　ＳＯＬ」とは、「幸せや豊かさ」を意味する言葉のようである。その生徒に「幸せで豊かな人生」が訪れることを願い、毎日コーヒーを入れながらマグカップを眺めている。そして、マグカップが「みんなが幸せで豊かな学校生活を送れるようにしてね」と、私の背中をそっと押してくれている、そんな気がする。

八〇二〇運動

中標津町・広陵中
谷村　靖志

八〇歳になっても二〇本以上自分の歯を保とう」という八〇二〇運動。二〇年以上前、歯医者でこの標語がかかれたポスターを見た。当時、「おじいちゃん、お口臭い」と孫に言われ、入れ歯を洗浄するＣＭをよく目にしていた。八〇歳で入れ歯がいらない、二〇本も自分の歯があるなんて夢物語だと思った。自分の歯で噛めることはおいしくモノを食べることができ、更に消化や吸収が良くなる。噛むことで認知症予防にもなると言われる。健康な歯の維持と体の健康はとてもつながっている。

たまたまＮＨＫ「あしたが変わるトリセツショー」を見始め、最後まで見入ってしまった。テーマは『オトナ歯磨き』。平らな乳歯とは違い永久歯には凹凸がある。力任せにシャカシャカ音を立てて磨くと、歯と歯の間、歯と歯茎の間など細かい部分に磨き残しが出て歯周病などを引き起こす原因になる。音があまり立たないように優しく磨くことが大切である。しかし、正しい歯磨きの方法を知っても、それを継続して続けられる人は少ない。シャカシャカ音を立てた方が磨いている感じがして気分がいいし満足感も得られる。いわゆる「習慣の壁」が望ましい持ち方で歯磨きが継続できない原因だという。そこで、歯ブラシの端に目印のテープを貼り、無意識に端を持って優しい歯磨きを継続させるアフォーダンス理論を応用した方法などが紹介されていた。

スウェーデンでは予防のために歯医者に行く習慣がある。プロフェッショナルケアとして定期的に歯科衛生士らによる歯の手入れや口のメンテナンスを受けている。八〇歳の日本人の残存本数は平均一五本なのに対してスウェーデンでは二四本である。八〇二〇運動は夢物語ではなかった。健康な歯を維持し健康寿命を延ばす一助にしたい。

治療が終わって半年、定期検診の通知が届いた。優しい歯磨きの継続よりも歯医者に対する苦手意識の克服の方が難しいと感じている。

バスケ男子ワールドカップとウェルビーイング

遠軽町・南中
小栗　敬一郎

バスケットボールワールドカップ二〇二三が八月二十五日に開幕した。日本、フィリピン、インドネシアによる三か国共催となる今大会である。日本は沖縄県で開催された。

今大会は、ＦＩＢＡ国際バスケットボール連盟が開催する世界最大級の国別対抗トーナメント。世界のバスケットボール一位を決める大会である。

日本は、トム・ホーバス監督率いる精鋭一二人が出場し一次リーグのフィンランド戦で日本代表史上初となるワールドカップでの対ヨーロッパ戦勝利を収めた。二次リーグ進出は逃したが、順位決定リーグでベネズエラとカーボベルデに連勝して日本代表史上初のワールドカップ一大会三勝を記録し、今大会最終順位でアジア勢最上位となる一九位となった。これにより日本代表にとって一九七六年モントリオールオリンピック以来四八年ぶりとなる自力でのパリオリンピック出場権獲得という歴史的偉業を成し遂げた。

トム・ホーバス監督は、選手を熱く鼓舞し力を引き出しウェルビーイングを高めた。教職員にも同じことが言えるだろう。信頼関係から成り立つ熱い鼓舞。様々な魔法の言葉で「自己肯定感が発生し」「安全安心な環境ができ」「心身の健康、幸福感が得られ」「教職員が多様性を理解し」「地域のつながりができ」「社会貢献意識を高め」ることでサポートを受けられる環境を得ることができた。

選手（子供）は、身体的・精神的・社会的に良い状態で試合（授業）に臨み、短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義などの将来にわたる持続的な勝利（幸せ）を得ることができる。それは、指導者（教職員）の指導力（授業力）に大きく関わる。

吹奏楽の思い出

札幌市・八軒中
大矢　俊明

私は、国語教師でしたが、中高大と吹奏楽部に所属していたため、初任のときからずっと吹奏楽部の顧問をしていました。現在とは違い、音楽科以外の先生が吹奏楽部顧問をしている例は少なく、苦労もありました。しかし、周囲の先生方の助けや保護者の理解、そして何より子供たちのひたむきに取り組む姿勢のおかげで長年顧問を務めることができ、現在でも、札幌市中学校吹奏楽研究協議会（中吹研）という吹奏楽に関わる仕事に携わることができています。

吹奏楽の魅力は、何と言っても音色の多様性だと思います。木管楽器や金管楽器、打楽器などの様々な楽器が、それぞれ素敵な音を奏でながらブレンドされ、豊かな響きを創り出し、一つの音楽が仕上がっていきます。曲を合奏したときの感動は、一人で吹くときには味わうことができないものです。自分が生徒だったときも、「みんなで一つの曲を創りあげる苦労と喜び」や「熱く部活動に燃える気持ち」などを経験することができました。また吹奏楽で演奏される曲のジャンルは、クラシックからポップスや歌謡曲、ジャズなど多種多様で幅広く、聴く人を楽しませます。

校長になった今、吹奏楽を通して学校現場に思いを馳せ、職員室を見てみると、まろやかな音色を奏でる先生、迫力ある音色を奏でる先生、規則正しくリズムを刻んでいる職員など、様々な個性ある音色が響いています。このそれぞれの響きが融合し、学校としての一つの豊かなハーモニーが奏でられるように、日々奮闘しています。やはり、一つの音色だけでなく、たくさんの音色が混じり合った方が、深い味わいになります。まさに多様性の尊重です。また、学校から地域に向けて発信する場も、入学式や卒業式などの儀式だけでなく、幅広い活動で、地域の方々を巻き込み、学校と地域が一体となって思いを共有したいと考えています。吹奏楽で学んだ思いを校長としても活かしていきたいと思います。

令和５年度　一般会計予算

収入の部

（単位：円）

科　　目	令和4年度（補正予算）		令和5年度予算額	予算額比較		備　　考
	予算額	決算額		増	減	
１．会費収入	35,024,400	35,024,400	34,732,800		291,600	単置校5,400円×511校×12か月＝33,112,800 併置校2,700円× 50校×12か月＝ 1,620,000
２．繰越金	6,093,708	6,093,708	5,115,624		978,084	
３．雑収入･特別会計	50	10,113	1,600,050	1,600,000	0	銀行利息 全日中地区研究補助（研究大会基金より入金）1,600,000
計	**41,118,158**	**41,128,221**	**41,448,474**	**330,316**		

支出の部

科　　目	令和4年度（補正予算）		令和5年度予算額	予算額比較		備　　考
	予算額	決算額		増	減	
研究大会費	**8,787,000**	**8,294,150**	**9,875,000**	**1,088,000**		
１．大会運営費	3,000,000	3,000,000	3,000,000			研究大会実行委員会による大会運営費（担当地区決算）
２．研究活動費	4,587,000	4,587,000	4,575,000		12,000	各地区の研究活動補助費（3,000円×465校）＋札幌3,180,000
３．旅費	1,200,000	707,150	2,300,000	1,100,000		役員・研修理事・司会・提言等旅費
研究調査費	**1,850,000**	**1,621,276**	**1,911,000**	**61,000**		
１．旅費	1,400,000	1,115,900	1,400,000			ブロック研修費、地区教育経営研究会、地区交流等旅費
２．印刷製本費	297,000	351,560	355,000	58,000		学校経営の資料
３．通信運搬費	53,000	53,816	56,000	3,000		上記送料
４．賃金	100,000	100,000	100,000			調査アンケート作成等筆耕料
研究物刊行費	**2,060,000**	**1,506,280**	**2,070,000**	**10,000**		
１．印刷製本費	1,800,000	1,341,280	1,750,000		50,000	道中だより､全道中､法制研集録､実態/調査報告書、研究紀要
２．通信運搬費	260,000	165,000	320,000	60,000		上記送料
事務局費	**28,421,158**	**24,590,891**	**27,592,474**		**828,684**	
１．借損料	3,445,000	3,515,193	3,525,000	80,000		事務所賃貸料、会議会場費、機器リース料、車借上げ料等
２．給料・手当	5,270,000	5,268,880	5,424,000	154,000		専任職員給与、手当
３．退職・社保	1,136,000	1,121,853	1,196,000	60,000		社会保険料、雇用保険料、退職積立金
４．備品費	60,000	68,200	80,000	20,000		事務所備品
５．印刷製本費	880,000	808,584	850,000		30,000	総会要項、運営要綱、感謝状、要望書、提言書、役員名刺等
６．通信運搬費	860,000	685,164	820,000		40,000	電話代、郵券、託送料、振込料金
７．消耗品費	440,000	457,183	450,000	10,000		用紙代、封筒、購読料、プリントトナーインク、その他事務用品
８．慶弔費	90,000	166,478	100,000	10,000		退職・退会役員記念品、祝電、香典、供花
９．賃金	200,000	200,000	200,000			筆耕料、印刷賃金
10．渉外費	800,000	490,617	780,000		20,000	関係機関総会・研究大会参加費、外郭団体会議、広告料、食糧費
11．負担金	4,220,000	4,120,350	4,160,000		60,000	全日中会費、交通安全協会、旧北方圏、社明運動、道P連他
12．旅費	7,300,000	3,980,811	7,890,000	590,000		総会、理事研修会、事務局研修会、全日中総会・研究協議会
13．送金費	80,000	80,000	80,000			会費等地区からの送金手数料補助費（各地区 4,000円）
14．雑費	40,158	27,578	37,474		2,684	会議用お茶代、両替料他
15．予備費	3,600,000	3,600,000	2,000,000		1,600,000	
計	**41,118,158**	**36,012,597**	**41,448,474**	**330,316**		

令和５年度 北海道中学校長会役員・理事

会長	森田　聖吾 忠和中 (旭川市) 0166-61-5300	副会長	１ブロック	２ブロック	３ブロック	４ブロック	５ブロック	６ブロック
			村上　俊一 菁園中 (小樽市)	森田　聖吾 忠和中 (旭川市)	長谷川秀雄 桔梗中 (函館市)	盛永　明寿 富川中 (日高町)	徳増　秀隆 小泉中 (北見市)	◎笹川　恒春 北栄中 (札幌市)

事務局長	三浦　英悟 琴似中 (札幌市) 011-611-1351	事務局次長	吉本　将樹 稲穂中 (札幌市) 011-684-4601	事務局次長	河村　克也 東光中 (岩見沢市) 0126-22-0329	会計理事	伊藤　仁弥 長橋中 (小樽市) 0134-24-0465	

運営委員長	市川　恵幸 厚別南中 (札幌市) 011-894-7311	運営委員	１ブロック	２ブロック	３ブロック	４ブロック	５ブロック	６ブロック
			金森　直人 千歳中 (千歳市)	森河　　真 稚内中 (稚内市)	増田　正弘 野田生中 (八雲町)	渡辺　敬方 星の丘中 (伊達市)	小玉　　功 幣舞中 (釧路市)	市川　恵幸 厚別南中 (札幌市)

部	副会長 (事務局)	部　長	部　員			副部長	幹　事	
経営	長谷川秀雄 桔梗中 (函館市)	小森　　亨 樽川中 (石狩市)	代永　　研 桜町中 (小樽市)	袰田佳奈恵 当麻中 (当麻町)	田上　直広 湯川中 (函館市)	野口　俊之 花川北中 (石狩市)	北村　　剛 駒里中 (千歳市)	松橋　辰吾 西部中 (北広島市)
	三浦　英悟 琴似中 (札幌市)		富田　和幸 標茶中 (標茶町)					
研修	徳増　秀隆 小泉中 (北見市)	遠山　博雅 山鼻中 (札幌市)	亀田　寛人 増毛中 (増毛町)	福井　順一 江差中 (江差町)	瀧澤　義守 幌別中 (登別市)	髙橋　正幸 平岡中 (札幌市)	田丸　明史 手稲西中 (札幌市)	川原　明子 屯田北中 (札幌市)
	吉本　将樹 稲穂中 (札幌市)		小嶋　範彦 静内第三中 (新ひだか町)	中村　俊緒 池田中 (池田町)				
対策	村上　俊一 菁園中 (小樽市)	工藤　　亘 中央中 (旭川市)	後藤　正弘 大野中 (北斗市)	鳥谷部　賢 太由仁中 (由仁町)	能戸　貴英 南町中 (帯広市)	坂本　征人 一已中 (深川市)	小泉　　寧 南幌中 (南幌町)	柴田　真琴 岩内第一中 (岩内町)
	河村　克也 東光中 (岩見沢市)		佐藤　英樹 山花中 (釧路市)	橋本　正之 訓子府中 (訓子府町)				
情報	盛永　明寿 富川中 (日高町)	細谷　隆志 稚内東中 (稚内市)	山下　秀一 旭中 (余市町)	齋藤　征志 光洋中 (根室市)		山田　誠一 早来中 (安平町)	鏡　　武志 青翔中 (苫小牧市)	高橋　泰明 東明中 (室蘭市)
	伊藤　仁弥 長橋中 (小樽市)							

事務所	北海道中学校長会事務所 〒060-0001　札幌市中央区北1条西3丁目　敷島プラザビル ＴＥＬ：011-251-1344　ＦＡＸ：011-251-1302 E-mail：dotyu-kotyokai@bz04.plala.or.jp	事務主事	加藤　秀典
		会計主事	高橋　寿輔

表紙に寄せて

「小樽市銀鱗荘」

小樽市・桜町中
代永　研

藤井八冠の初防衛の場として話題となった銀鱗荘は、小樽市を展望する平磯岬にそびえたっています。一九〇〇年（明治三十三年）に、余市の猪俣安之丞邸宅として建てられ、一九三八年（昭和十三年）に現在地に移築されました。猪俣家は、鰊漁の漁場経営だけでなく三隻の北前船経営も展開していました。望楼で、安之丞は望遠鏡で群来（くき）にわく漁場と北前船の入港状況を確認していたと伝わっています。

小樽市は、昨年に市制一〇〇周年、今年は小樽運河一〇〇周年という大きな節目の年を迎える歴史と伝統の街です。この小樽市において、今年度、「第六四回北海道中学校長会研究大会小樽大会」を、コロナ禍を経て四年ぶりに会同にて開催することができました。全道各地から三〇七人もの参加者をお迎えし、北海道中学校長会会員の皆さまの「和」と「強い決意」が体現した研究大会となりましたことは、小樽市校長会としてこの上ない喜びです。本大会全体会の会場となった小樽市民会館は、一九六三年（昭和三十八年）に開館した建物であり、参加者の皆様には市内の数々の名所とともに、その歴史ある風情を感じ取っていただけたのではないでしょうか。今大会の研究の成果をもとに、北海道の未来を創る子供たちを育てる気概を新たにしたところです。大会運営を支えてくださった関係者の皆さまに改めて感謝申し上げます。

編集後記

令和五年度版会誌「全道中」第93号が、皆様の多大なる御協力により出来上がりました。ここにお届けいたします。

北海道教育委員会教育長　倉本博史様、北海道立教育研究所長　中澤美明様の「潮流」への御寄稿をはじめ、「特集」では、三人の会員の皆様から先進的な実践について御寄稿いただき、テーマに迫ることができました。

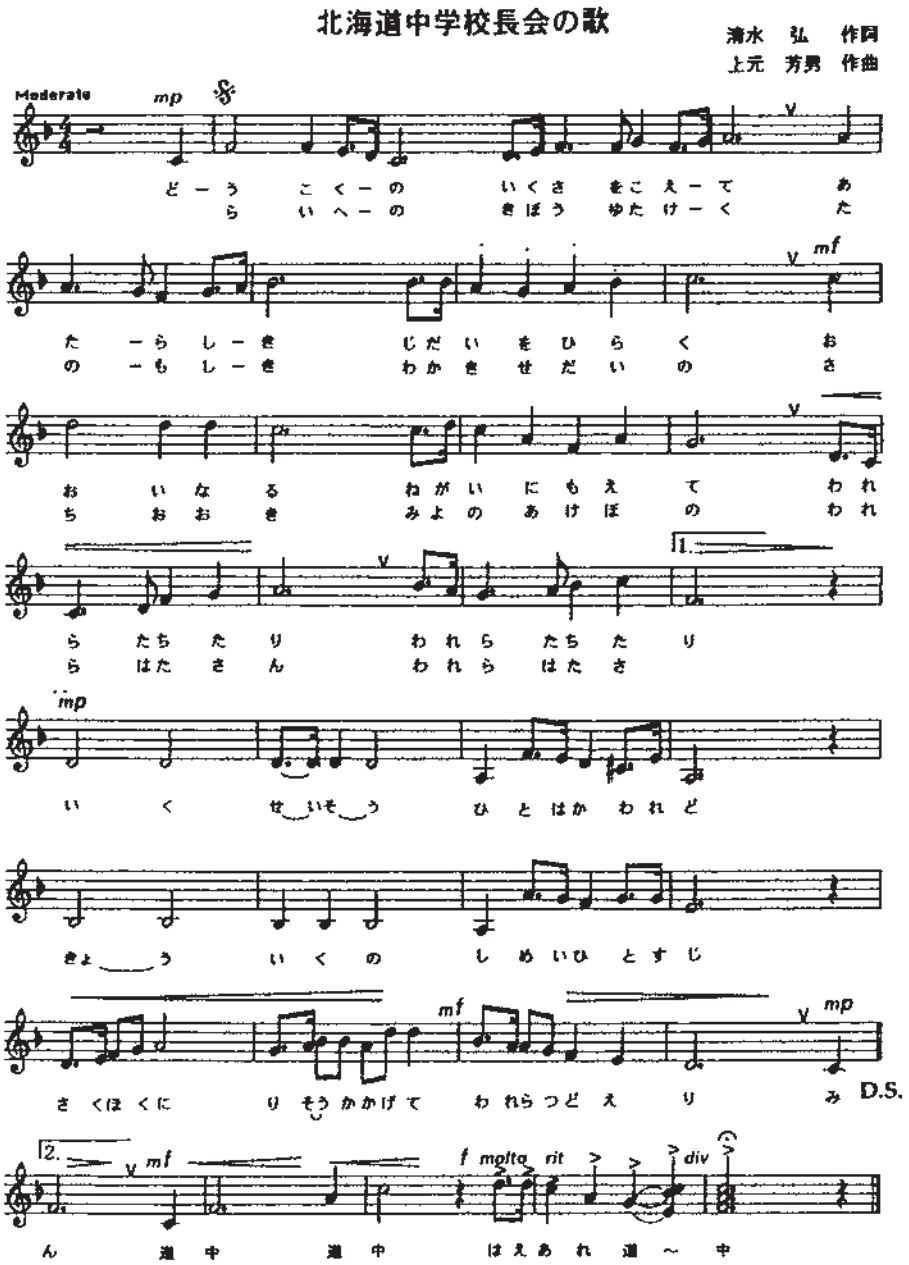
また、北海道中学校長会役員・理事、各地区役員をはじめ、多くの会員の皆様に御協力をいただき、各地区の活動や風土紹介、論考、文芸など多彩な内容を掲載することができました。会員の皆様の職能向上や広い北海道の教育情報源の一助となれば幸いです。

最後になりますが、社会に開かれた教育課程の具現化に向けて日々実践を推進する中、本誌の発行に快く御協力いただきました全ての皆様に心より感謝申し上げます。

全道中　第93号

発　行　令和六年三月一日
発行者　北海道中学校長会
　　会長　森田聖吾
　　札幌市中央区北一条西三丁目
　　札幌プラザビル内
　　電話（〇一一）二五一―一三四四
　　FAX（〇一一）二五一―一三〇二
編　集　北海道中学校長会情報部
印刷所　佐藤印刷株式会社
　　札幌市北区北七条西八丁目一
　　電話（〇一一）七二六―三三四五

北海道中学校長会の歌



慟哭の　いくさを越えて
　新しき　時代を拓く
大いなる　理念に燃えて
　吾ら　起ちたり（くり返し）

幾星霜　人は変れど
　教育の　使命一筋
朔北に　理想かかげて
　吾ら　集えり

未来への　希望豊けく
　頼母しき　若き世代の
幸多き　み代のあけぼの
　吾ら　果たさん（くり返し）

道中　道中
栄あれ　道中